

# 水の文化

# 大禹たいうの

# 治水



- 大脇良夫「禹王の足跡を巡る旅」
- 水の文化楽習実践取材「富士山と酒匂川」
- 岡田真美子「禹王を祀る原動力」
- 島谷幸宏「生きている川 酒匂川」
- 深谷克己「田中丘隅を認めた時代」
- 植村善博「時間・空間で読み解く鴨川」
- 千明金造「片品村五千人の心意気」
- 古川京司「大禹謨発見のドラマ」
- 古賀邦雄 水の文化書誌「黄河は流れる」
- 蜂屋邦夫「禹の治水と中国史の流れ」

# 水治禹大



禹は、中国・古代夏王朝の初代王。

夏王朝の始まりは紀元前2070年ごろ、実に4000年前の話で、伝説の王朝といわれてきました。

しかし近年、考古学的な発掘により、中国政府はその存在を認めるようになっていました。

古代中国には、堯・舜・禹という伝説上の聖人がいました。

この3人は部族連合の首長とみなされますが、禪讓（血縁者でない有徳の人物に地位を譲ること）という形で帝位を継承しました。

ところが禹の息子である啓が帝位についたことから、夏王朝は、中国史上最初の世襲王朝である、といわれています。

禹は、治水事業に失敗した父鯀の跡を継ぎ、舜に推挙される形で、黄河の治水にあたりました。

そのために治水神としてもあがめられています。また禹にまつわるたくさん伝承から、

謙虚で勤勉な人柄といわれ、聖人としても尊敬を集めました。春秋時代の中国の思想家で儒家の始祖である孔子も、

「夏の禹王には文句のつけようがない」と賞賛しています。

中国では「黄河を治むる者は天下を治む」と言われ、為政者の条件として黄河の治水が挙げられました。

それを成し遂げた禹は、治水家としてのみならず名君としての象徴でもあったということです。

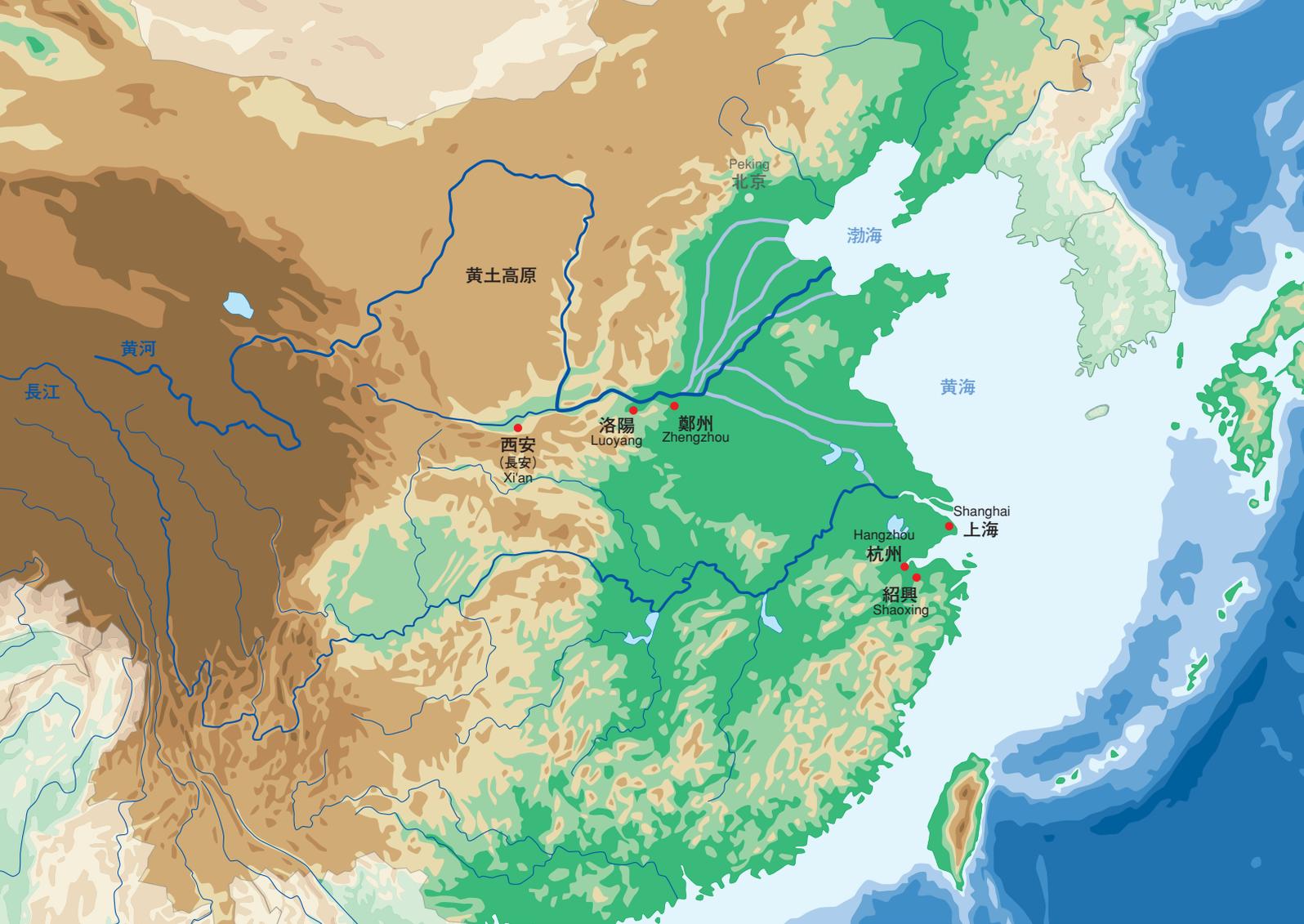
中国思想史で重要な存在である禹の碑が、なんと、日本にもたくさんつくられてきたことがわかってきました。

禹を引き合いに出さなくてはならないほど、過酷だった水を治める艱難。

禹を引き合いに出せるだけの知識と教養。

禹になぞらえた治水顕彰碑や祈りには、

豊穰と恵みの裏側にある、水との闘いの歴史が垣間見えます。



世界の屋根といわれるチベットの標高4300m付近から湧き出た水を源流とし、渤海へ注ぐ全長約5464kmの黄河。中国では揚子江に次いで2番目に長く、世界では7番目の長さである。中国で「河」と書いたときは黄河を指す。黄河の下流域は中原と呼ばれ、黄河文明発祥の地であり、過去に歴代王朝の都が置かれてきた。禹の興した夏王朝も、まさにここにある。黄河は上・中流で黄土高原を通り、多くの支流が流入するため大量の黄土を流送。年間16億tといわれる土砂の堆積により、下流部は天井川となるため古来より氾濫を繰り返し、大きく流路を変えてきた。水色の線は、その痕跡であり、それらの旧流路は黄河故道と呼ばれている。また、日中戦争中の1938年（昭和13）には日本軍の侵攻を阻止しようとした中国国民党によって花園口（鄭州市北の郊外18km）、の堤防が爆破され、流路が変わった。河口が現在の位置になったのは、1947年（昭和22）堤防の修復完了後のことである。

右ページ：治水事業を象徴した禹のレリーフ。中国・紹興の会稽山にある大禹陵内博物館所蔵。禹は紹興で亡くなり会稽山に葬られたとされる。大禹陵には秦の始皇帝も祀ったといわれ、現在は重点保護文化財になっている。禹は王であるにもかかわらず、鋤（すき）を持ち、泥の中を這い回って働き、脛（すね）の毛がなくなってツルツルになった、といわれている。

水の文化 40号 2012年2月

特集「大禹の治水」

禹王の足跡を巡る旅 大脇良夫

水の文化楽習実践取材  
足柄の歴史再発見クラブ  
富士山と酒匂川 編集部

コラム 禹王を祀る原動力 岡田真美子  
コラム 生きている川 酒匂川 島谷幸宏

田中丘隅を認めた時代 深谷克己

禹の廟はなぜつくられたのか  
時間・空間で読み解く鴨川 植村善博

シリーズ里川  
片品村五千人の心意気 千明金造

高松・栗林公園と西嶋八兵衛  
大禹謨発見のドラマ 古川京司

水の文化書誌  
黄河は流れる 古賀邦雄

禹の治水と中国史の流れ 蜂屋邦夫

文化をつくる 禹の治水に学ぶ 編集部

里川文化熟報告

インフォメーション

51 50 49 38 36 30 26 20 16 12 10 8 4



# 禹王の足跡を巡る旅

歴史好きの大脇良夫少年は、鳥根の高校時代に素晴らしい恩師との出会いがきっかけで生涯の宝物・禹王と巡り会いました。禹王碑建立には、必要条件として「治水の要衝」、十分条件として「治水家としての禹王を知る思想家・土木家がいた」、維持条件として「バックアップする組織の存在」が必要と主張しています。日本の禹王碑の背後に見え隠れする中国、台湾、朝鮮半島と日本各地の文化交流の実相。大脇さんの〈禹王探求〉はまだまだ続きます。

## 大脇 良夫

おおわき よしお  
全国禹王の碑探求家  
足柄の歴史再発見クラブ顧問

1941年生まれ。慶応大学経済学部卒業後、富士フィルム（株）入社、本社人事部長などを歴任。2003年フリーになって郷土史研究に専心、2006年〈足柄の歴史再発見クラブ〉を立ち上げ、初代会長を務める。（株）心理技術センター客員研究員、神奈川県日中友好協会会員。

肖像画提供：世田谷郷土博物館



## 〈西の文命〉 京都加茂川に触発

地元酒匂川の治水神として、中国の古代王朝である夏王朝の初代皇帝である禹王が祀られています。

禹は大禹、夏禹、戎禹ともいい、夏王朝成立後は夏后と名乗ったといわれます。名は文命、姓は姁。足柄上郡開成町には文命中学校という公立学校まであります。

南足柄市大口の福沢神社内に文命東堤碑と文命宮、足柄上郡山北町岸の岩流瀬土手脇に文命西堤碑と文命宮をつくったのは、東海道人崎宿本陣名主を務めた民政家の田中丘隅です。

田中丘隅（1662〜1730年）  
寛文2年、武蔵国多摩郡平沢村（現在のあきる野市平沢）の名主窪島（久保島とも）家の八郎左衛門の次男として生まれる。兵太夫、兵庫 重間（しげさと）、休愚、休愚右衛門、喜古（よしひさ）などと称す。

窪島家は甲斐の武田氏の家臣であったが、武田氏滅亡後は武蔵国平沢村に移り、農業と絹物行商を生業としていた。行商に出かけた東海道川崎宿で、誠実な人柄を見込まれて22歳のころ本陣名主田中家に夫婦養子として迎えられた。

隠居後には回想録『走庭記』を著し、14カ条の教訓を子孫に伝えた。翌年、農民の生活実態、年貢徴収の事情、凶作対策、治水策などを論じた『民間省要』全17巻を著す。8代将軍吉宗に献上されたことから、1723年（享保8）江戸町奉行大岡越前守忠相に登用が促され、川方御普請御用を拝命する。荒川、多摩川の治水、二ヶ領（にかりょう）用水、大丸用水、六郷用水の改修工事、酒匂川の補修などを行ない、その功績が認められ、1729年（享保14）武蔵国内3万石を管轄する支配勘定格（代官）に任ぜられた。

文命宮は笠石とご神体を祀る祠部分と台座の石で構成された祠です。大口の文命宮は1923年（大正12）に起きた関東大震災で倒壊したまま地中に埋まっています。

だが、道路拡幅に伴って福沢神社が移転する際に、地元有志の働きかけによって2009年（平成21）復元されました。笠石と台座の石は失われていたため、班目地区の

有志が酒匂川の川原で適当な石を選び出し、中央の祠と組み合わせつくられています。

〈足柄の歴史再発見クラブ〉は、神奈川県西部を流れる酒匂川のほとりに居住する、ごく普通の市民の集まりです。足柄の郷土史を子どもたちに伝えたいという想いがもともとなって、2006年（平成18）1月に誕生し、最初に小学生、中学生向けの副読本として『富士山と酒匂川』を作成しました。

副読本づくりで田中丘隅の事績研究を進めるうちに、西の文命と申すは、京都加茂川の堤にあり

東の文命と申すは、相州酒匂川の堤にあり

という記述を見つけました。これは1829年（文政12）に行なわれた酒匂川の公儀御普請の際に、御勘定役の関七郎兵衛が村役人に対して「畏れ多くも、酒匂川文命宮の石碑について、者どもに言い聞かす」という口上で説明したくだりの原文です（南足柄市史別編8史料89より引用）。

加茂川の表記は多々あって、『日本紀略』（814年の項）では鴨川、『山城国風土記稿』では賀茂川と記されています。ちなみに現在は高野川との合流点（下鴨神社辺り）までを賀茂川、それ以南を鴨川と呼ぶのが通例のようです。



**文命西堤碑**

酒匂川は、主文四年(一七〇七)の富士山大噴火による降灰のための河床が埋まり、岩流瀬・大口付近は大水が出るたびに堤防が決壊し、周辺の農民たちは甚大な被害を被った。このため、荒川・多摩川、酒匂川の水を導いた川崎藩主田中丘龍は、荒川の急勾配により享保十一年(一七三六)荒れ果てた酒匂川の改修工事の指揮にあたった。

丘龍は、井儀村や嵯峨に石をつめ、その一つ一つに藩侯が陀羅尼經を讀んでから川巻に横み上げ、堤が完成するとその上には田圃の水神である馬王の牌をつた、馬王の別称が文命であることか、「文命堤」と言われ、川の東西で西堤(岩流瀬)と東堤(大口堤)と呼ばれている。(この堤等の記述により、酒匂川流域の村々は次第に復興していった。)

この碑は、丘龍が文命西堤の完成を記念して建立したもので、享保十一年(一七三六)五月二十五日、武蔵国崎、田中丘龍立と刻されている。また、文命堤の名については、東堤碑に詳しく記されている。

平成六年九月

山北町教育委員会

右ページ：岩流瀬土手のそばにある文命宮。大脇さんが指を指し示している部分には、縦に2文字ずつ「水土」「大馬」「神祠」と刻まれている。左ページ：文命宮と並ぶ文命西堤碑。すぐ脇に川丈六地藏の内の1体が(山と北岩流瀬のお地蔵さん)として安置されている。

## 〈東の文命〉の謂われ

幸いにして〈東の文命〉酒匂川の文命宮と石碑に関する史料は、はっきりしています。建立ははずれも1726年(享保11)で旧暦の4月に文命宮がつくられ旧暦5月25日に文命堤碑が建てられました。時代は下りませんが、1841年(天保12)に完成した『新編相模国風土記稿』にも「享保11年4月、文命堤修築を記念し、永久の鎮護のために神禹を祀る」とあります。『明治12年文命社など神社明細帳』にも、祭神は「夏禹王」とはっきり書かれています。1906年(明治39)に出された勅令第220号「神社寺院仏堂合併跡地ノ譲渡ニ関スル件」に端を発した神社の統廃合政策の結果、各地で一村一社が目指され、文命社でも1909年(明治42)に近隣11社が合祀されました。その際も「夏禹王」は祭神の一つとして祀られ続けています。以来、今日まで、東堤と西堤の文命宮に為政者と地域住民がお参りして、堤防の安全と豊穰を祈願してきました。

## 禹を採せ

〈西の文命〉の存在と文命社の祭神が「夏禹王」であることは、会

が発足した2006年(平成18)の11月初旬に判明したことなのです。が、早速、15日には京都の歴史博物館や土木事務所に赴きました。

〈西の文命〉加茂川の禹王廟は、江戸時代直前ごろまでは鴨川・四条橋・五条橋辺に複数存在したものの、現在はすべて失われていることを確認しました。

しかし、この調査の過程で高松・香東川、大阪・淀川、群馬・利根川上流に2カ所、大分・臼杵川と合計5カ所の新たな「禹にまつわる碑」を発見したのですから、大きな収穫でした。

2年目には、小冊子『酒匂川の治水神』が完成し、地元への啓発活動を行いました。

1990年代に京都で禹王廟論争が展開されたことを知り、2008年(平成20)には、当時、論争の主役だった武蔵大学の瀬田勝哉教授、立命館大学の川嶋将生教授、同志社大学の山田邦和教授にその後の研究についてうかがいました。が、新たな進展は見出せませんでした。その後、山梨県富士川町(かじか)の「富士水碑」に禹の名があること、同じく富士川に禹之瀬という地名があることを確認。高松や大分、大阪、広島、群馬にも脚を伸ばし、現地視察を重ねました。

こうして、各地で地元研究者と禹王への熱い想いを語り合う中で、

第1回禹王・文命サミット開催(2010年11月)の手応えを得てきました。

## 禹による日中の文化交流

私は〈西の文命〉に触発され、中国の治水神が足柄平野の鎮護役を300年にわたって担っているという不思議にハートを揺さぶられました。このときの想いが、禹王についての探求を深めていったのです。

禹王に関心を持った理由の一つに、日本と中国の不幸な歴史の回復をしたい、という気持ちがありました。1894年(明治27)の日清戦争から始まり、盧溝橋事件、太平洋戦争を経て、1972年(昭和47)に国交正常化を果たすまでの78年の間にも、治水神である禹による文化交流は途絶えることがなかったのです。実際、この期間中に大阪・淀川に3基、群馬・利根川上流の浮川、広島・太田川の計5カ所に新たな禹王碑がつくられています。

中国は4000年の歴史を持ち、日本の文明の兄として多大な影響を与え続けてくれました。不幸な諍いの結果、こうした過去の貢献が霞んでしまい、正しい評価がされていない状況に陥っています。禹はそうした日中関係を改める、

# 禹王の名が記された治水碑および地名

(足柄の歴史再発見クラブ)提供の資料(2012年1月現在)をもとに編集部で作図

## 1 夏禹王廟 かうおうびょう

1228年(安貞2)ごろから江戸時代直前ごろまで右岸・四条橋~五条橋付近に存在したことが確認されている。  
鴨川(京都府京都市左京区)河川鎮護のため、中国の治水神・禹王を祀った。現在、存在は確認されていないが、禹を祀った元祖の地とされる。

## 2 禹門山龍澤寺 うもんざんりゅうたくじ

1455年(享徳4)魚成川(うおなりがわ)(愛媛県西予市城川町魚成)禹門山命名には薩摩・島津藩、豊後の豪族・魚成家の影響があるようだが調査中。

## 3 大禹謨 だいいうぼ

1638年(寛永15)ごろ香東川(こうとうがわ)(香川県高松市)現存する最古の禹王碑。治水家の西嶋八兵衛によって建立。

## 4 宇平橋碑 うひいばしひ

1690年(元禄3)長堂川(ながどうがわ)(沖縄県島尻郡南風原町)琉球王朝時代の建立。禹の業績を語る橋碑が、ほぼ同時期に六つつくられたが現存するのはこれのみ。

## 5 夏大禹聖王碑 かだいいうせいおうひ

1719年(享保4)淀川(大阪府三島郡島本町)木津川・宇治川・桂川の3川が合流し淀川となる急流地に存在。

## 6 文命宮・文命西堤碑

1726年(享保11)酒匂川(神奈川県足柄上郡山北町)文命社の祭神は「夏の禹王」。文命宮と碑がセットで存在する。7 文命宮・文命東堤碑とともに、田中丘陵によって建立された。

## 7 文命宮・文命東堤碑

1726年(享保11)酒匂川(神奈川県南足柄市)

## 8 禹稷合祀の壇 うしょくごうしのだん

1740年(天文5)臼杵川(大分県臼杵市)治水神である禹と五穀の神である稷(しよく)を祀った祭壇。

## 9 小禹廟 しょううびょう

1753年(宝暦5)大和川(大阪府柏原市)大坂城代の稲垣重綱の没後100年供養塔だが、地元では小禹廟と呼ばれ続けてきた。

## 10 富士水碑

1797年(寛政9)富士川(山梨県南巨摩郡富士川町諏沢)角倉了以の功績(1607年富士川禹之瀬開削)を顕彰した碑。

## 11 大禹皇帝碑

1874年(明治7)利根川支流片品川(群馬県利根郡片品村土出)中国原碑(岫巖碑)に極めて似た、篆書体風の77文字が刻まれる。中国からも注目される可能性大。

## 12 淀川洪水記念碑銘

1886年(明治19)淀川(大阪府大阪市都島区)前代未聞の被害をもたらした、1885年(明治18)の淀川大洪水を記念した碑。淀川には、禹王の名が記された治水碑が7碑(5、12、13、14、15、17、19)確認されている。

## 13 修堤碑

1886年(明治19)淀川(大阪府高槻市唐崎)

## 14 明治成年唐崎築堤碑

1890年(明治23)淀川(大阪府高槻市唐崎)

## 15 淀川改修紀功碑

1909年(明治42)淀川(大阪府大阪市北区毛馬)沖野忠雄による改修工事は、1896年(明治29)測量に着手、途中、日露戦争をはさみながら1909年(明治42)完了した。

## 16 禹王碑

1919年(大正8)利根川支流浮川(群馬県沼田市利根町)片品村の大禹皇帝碑との関連性などの解明が待たれる。

## 20 句佛上人句碑

1928年(昭和3)信濃川(新潟県燕市大川津)東本願寺23世大谷光演による「禹に勝る業や心の花盛り」が刻まれる。

## 11 大禹皇帝碑

## 16 禹王碑

## 18 西田明則君之碑

## 6 文命宮・文命西堤碑

## 7 文命宮・文命東堤碑

## 10 富士水碑

## 22 禹之瀬

## 1 夏禹王廟

## 21 大禹謨

## 5 夏大禹聖王碑

## 13 修堤碑

## 14 明治成年唐崎築堤碑

## 17 大橋房太郎君紀功碑

## 19 治水翁碑

## 9 小禹廟

## 12 淀川洪水記念碑銘

## 15 淀川改修紀功碑

## 3 大禹謨

## 2 禹門山龍澤寺

## 8 禹稷合祀の壇

## 17 大橋房太郎君紀功碑

1923年(大正12)淀川(大阪府四條畷市)淀川の治水に一生を捧げ、治水翁と呼ばれた大橋房太郎の顕彰碑。大橋は大阪府議会議員となって1896年(明治29)河川法の制定を働きかけた。

## 18 西田明則君之碑

1923年(大正12)衣笠公園(神奈川県横須賀市)西田明則による東京湾・海堡建立の業績を、大禹治水に勝ると記す。

## 19 治水翁碑

1923年(大正12)淀川(大阪府四條畷市)治水翁 大橋房太郎の顕彰碑。

## 20 句佛上人句碑

1928年(昭和3)信濃川(新潟県燕市大川津)東本願寺23世大谷光演による「禹に勝る業や心の花盛り」が刻まれる。

## 21 大禹謨

1972年(昭和47)5月太田川(広島県広島市安佐南区佐東町)我が国最大サイズ(縦2.3m×横3.8m)の禹王碑。太田川河川改修を記念して建立された。

## 22 禹之瀬(地名)

建立年不明 富士川(山梨県南巨摩郡富士川町)

## 4 宇平橋碑



素晴らしいきっかけになってくれると思います。

当時の開成町町長の露木順一さんとともに法政大学の王敏教授を訪問し、文命社の存在を報告したところ、8月には王教授と新華社通信が見学に来られ、以降、日中友好協会や中国人、中国人留学生などの見学が盛んになりました。

また、全国に多くの仲間ができて、2011年(平成23)には、その仲間たちと中国本土に禹王を訪ねる旅を持つまでに発展しました。

実は河南省の龍門(禹門口とも写真左下)の見学に同行してくれた張仲勛さんが話しているときに、盛んに「リーベンレン」とおっしゃる。中国行きが決まってから、仲間と中国語のレッスンを受けたのでその単語が「日本人」を指すのではないかと思ったのですが、中国人通訳の口からは「日本人」に関する言葉が出てきません。それで、「張先生は何度もリーベンレンとおっしゃっていますが、日本人について何かおっしゃっているのではありませんか」と質問しました。

すると通訳は「実は禹門口には立派な禹王廟があって、信仰する人たちが賑わったのだが、太平洋戦争のときに日本軍が破壊してなくなつた、と張先生はおっしゃっています。しかし、私はそれを言



大口土手そばの福沢神社に隣接した文命宮と文命東堤碑。

うことを憚ったのです」と答えが返ってきました。

私たちは本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになり、張先生に謝りました。そして通訳の人の気持ちも理解できたので、その配慮についても感謝の言葉を表わしました。少し緊張感も覚えましたが、このあと、さわやかな風が流れ、お互いが近づきあえたようにも思えました。

### 実在が認められた夏王朝

2000年(平成12)11月9日新華社通信は「中国の歴史が1200年遡る」と報道しました。当時の私はまだ企業に勤める一般人でしたが、テレビニュースに釘付けになりました。中国政府は中国第一線の研究者200名を擁して「夏商周年表プロジェクト」を進めてきましたが、研究結果として「夏代は紀元前2700年、商は紀元前1600年、周は1046年に始まる」と発表したのです。

夏商周年表プロジェクト  
中華人民共和国の第9次5カ年計画のプロジェクトの一つ。具体的な年代が判明していなかった中国古代の3代について、主に天文学的手法、考古学的手法、文献学的手法といった多面的な視点から具体的な年代を確定させた。

神話の国 出雲の出身のせいとか、生来、歴史に興味があった私は、

伝説上の人物と思われてきた夏王朝の禹王について、定年を迎えて時間に余裕ができたら取り組みたい、と思っていましたから、このニュースがとりわけ胸に響いたのかもしれない。

幸い、地元の仲間にも恵まれ、中国古典を漁り、みつけた新しい情報を交換し合う楽しみもできました。中国人の治水の神といえは禹と言ひ伝えられてきた長い歴史の中で、中国古代の思想家たちが禹をどのように評価してきたのかは中国古典の基本である『書経』や『論語』からうかがい知ることがができます。これらから禹の位置づけを知るとともに、古代中国の治水思想や国づくりの思想に触れることができました。そして、それらから日本が受けた影響を想像するようになりました。

### 日本と中国の禹を結ぶ、琉球と朝鮮半島

中国・紹興大禹陵の「禹跡館」という史料館には、中国全土の禹にまつわる遺跡をプロットした大地図があり、朝鮮半島と日本は空白になっていました。私は「日本にもこんなに禹の遺跡がありますよ!」と知らせたい気持ちになりましたし、近いうちに朝鮮半島や台湾にも禹を探しに脚を延ばした

い、と思っています。昨年、高松・栗林公園で大禹謨のシンポジウムが開催されたときに寄せられた情報から、沖縄本島(沖縄県島尻郡南風原町)に宇平橋碑の確認に行ってきました。薩摩・島津家の影響か、琉球王朝独自の文化によるものか、とワクワクしながら訪問したところ、冊封していった中国本土からの影響ということがわかりました。伝播のプロセスがわかれば、大陸から日本につながるミッシングリンクの一片が一つ、はまるような気がします。

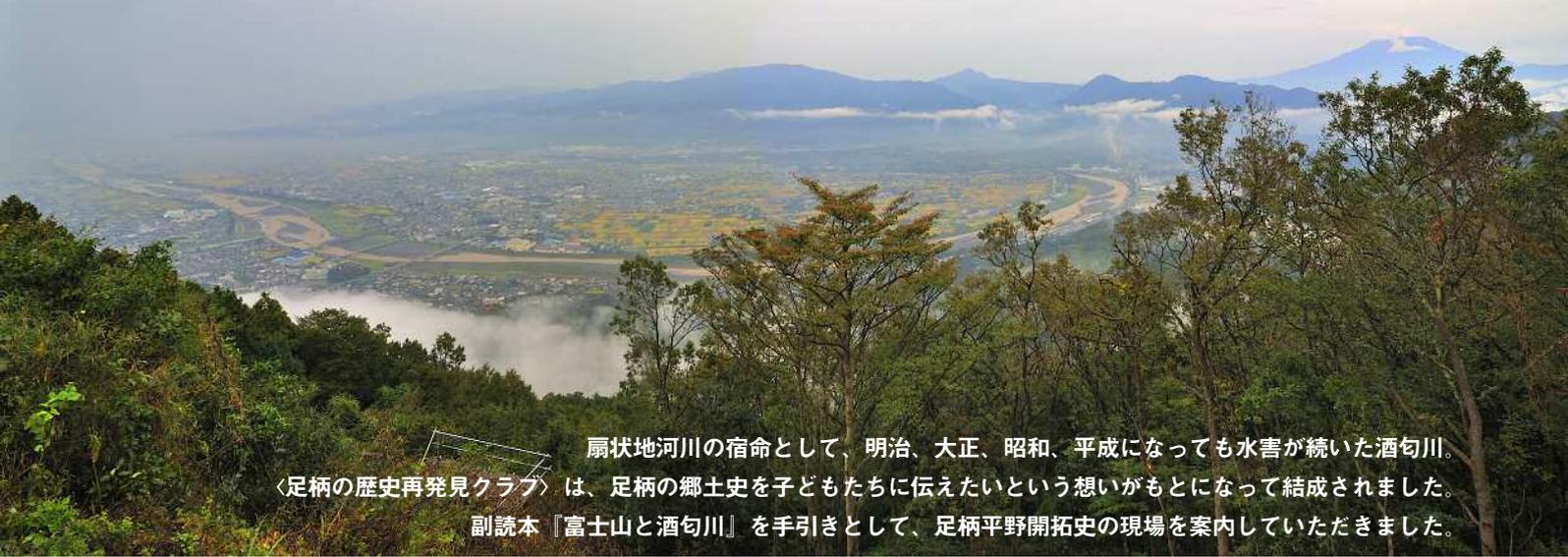
稲作や仏教が中国から朝鮮半島を経由して伝わったように、禹もやってきたのです。仏教が、中国(朝鮮半島)日本、と違う性質に変化していったように禹への想いも違ってきているかもしれません。しかし、超え難い自然の脅威に対して、禹に求めた人々の想いはそれほどかけ離れてはいないはずですよ。

「西の文命」京都・加茂川の禹王廟をはじめ、全国の碑や地名の中にも多く、謎解きには一層の情熱が鼓舞されます。謎解きを助けてくれるのは中国の圧倒的な歴史の厚みであり、それを学ぶことは違いを理解しながら認め合うための第一歩かもしれません。



# 富士山と酒匂川

## 〈足柄の歴史再発見クラブ〉の活動



扇状地河川の宿命として、明治、大正、昭和、平成になっても水害が続いた酒匂川。  
〈足柄の歴史再発見クラブ〉は、足柄の郷土史を子どもたちに伝えたいという想いがもとになって結成されました。  
副読本『富士山と酒匂川』を手引きとして、足柄平野開拓史の現場を案内していただきました。

### 田中丘隅のバトンを渡す

神奈川県にある足柄平野は、気候も温暖で農産物も豊富、小田原に近く海の幸にも山の幸にも恵まれた暮らしやすい地域である。しかし1707年(宝永4)、富士山の宝永噴火をきっかけに酒匂川の氾濫が常態化。災害常襲地帯となる時代があった。富士山の噴火による降灰で川床が上昇し、堤防が決壊。大規模な洪水が頻発する激甚災害地となったのである。

災害復旧にあたった田中丘隅(4ページ参照)は、災害の記憶を忘れず自衛するようにと、文命社と川丈六地藏を祀った。

〈足柄の歴史再発見クラブ〉は、そうした足柄の郷土史を子どもたちに伝えたいという想いがもとになって、2006年(平成18)1月に結成された。会長の佐久間俊治さんは、「足柄の郷土史から学んだことを若い人たちに伝えていくことは、大人の責務です」と結成の動機を語ってくれた。

その成果の一つが、小学生、中学生の副読本『富士山と酒匂川』。この本を手引きに、足柄平野開拓の現場を、河川工学者の鳥谷幸宏さんと環境宗教学者の岡田真美子さんとともに案内していただいた。

### 足柄平野の開拓の大恩人 大久保忠世・忠隣

扇状地である足柄平野を大木田地帯に変えたのは、大久保忠世と忠隣親子だ。

戦国時代の小田原は後北条氏が治めていたが、1589年(天正17)に真田家との領土争いを発端に、豊臣秀吉による小田原征伐を招き、1590年(天正18)に、後北条氏は滅亡。家康の関東移封に伴って、豊臣秀吉の命を受け小田原城に4万5000石を与えられたのは、三河国額田郡上和田(愛知県岡崎市)の徳川家譜代の名門で武断派筆頭・大久保家の嫡男の大久保忠世だった。

息子の忠隣は本能寺の変(1582年(天正10))に際して、「生涯第一の艱難」と家康が後年述懐する伊賀越えに同行。甲斐・信濃平定に尽力し、1594年(文禄3)忠世亡きあと小田原城の2代目城主になった。甲斐・信濃平定に尽力していたころ、家康の命で大蔵長安こと、のちの大久保長安(ちようあんとも)と出会うのである。

大久保長安(1545~1613年) 父の大蔵大夫が猿楽師として武田信玄に召し抱えられたことをきっかけにして、黒川金山などの鉱山開発や税務など武田家に従事。武田家滅亡後は家康に取り立てられ、相模國小田原藩の初代藩主となった大久保忠隣と親交を持つことになる。大久保氏は忠隣から与えられたもの。

甲斐が家康の領地となったとき、内政再建を所務方として行ない、釜無川や笛吹川の堤防復旧や新田開発、金山採掘などに尽力した。八王子千人同心の創設、全国のお金銀山の統轄や、関東における交通網の整備、「里塚の建設」など江戸初期の国土開発を一挙に推進した。死後に金の横領で私腹を肥やしたという疑いがかけられ、遺体が礫に処された。

忠世は秀吉の小田原合戦で荒れた足柄上・下郡147カ村を復興するために検地を行ない、大口にまだ土手がないために網目状に流路が広がる酒匂川の川筋を平野の東側に一本にまとめ、新田開発するという壮大な計画を立てた。忠隣は父の遺志を継ぎ、上流からの水勢を弱めるために春日森土手、岩流瀬土手、大口土手を築き、現在の酒匂川の基礎をつくった。

春日森土手は、酒匂川の水勢を釜淵と呼ばれる段丘崖に当てるための誘導の役割を果たし、岩流瀬土手は釜淵に当たった水勢を千貫岩と呼ばれる段丘崖に誘導して、大口土手に直接当たらないようにする重要な土手。大口土手は、千貫岩に当たった水勢を迂回させて、足柄平野に酒匂川が緩やかに注ぐように考えてつくられている。この治水システムは、武田信玄による釜無川、笛吹川の場合とよく似ていて、影響があると思われる。

忠隣はまた、酒匂川左岸に全国でも珍しい形(拜み石)で組んだ酒匂堰を、右岸の大口土手付近に穴



現在の酒匂川流域。●と▲を組み合わせた地点から撮影したのが、右の写真だ。流路が固定されて開発が進んだ。国土地理院基盤地図情報(縮尺レベル25000)「神奈川、静岡」及び、国土交通省国土数値情報「河川データ(平成20年)、土地利用細分メッシュデータ(平成18年)」より編集部で作図  
この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の基盤地図情報を使用した。(承認番号 平23情使、第630号)

①～⑥は川丈六地蔵の位置

水門堰、根又堰、武永田堰などをつくり、足柄平野に用水路網を巡らせ新田開発に注力した。足柄平野では用水という言葉は使われず、堰と呼称する。用水を堰というのは、足柄と山梨、長野の一部だけ。甲州に縁の深い大久保長安の影響もあるのではないかと。

1591年(天正19)の検地から約50年後の1640年(寛永17)には、反別収穫高が214%を超える。忠世と忠隣親子は、足柄平野と酒匂川にとって恩人といえるべきだが、晩年に悲劇を迎える。忠隣は本多一派との対立から、大久保長安事件を発端に失脚させられ、彦根に移封となる。

**大久保長安事件**  
徳川幕府成立後、忠隣とその与力といえる大久保長安を中心とした武断派と、本多正信・本多正純を中心とした文治派が派閥を形成し対立。正純の与力であった岡本大八が有馬晴信から賄賂を受けた事件により、本多派は一時、勢力が衰退したかにみえた。  
一方長安は、全国各地の鉱山奉行を務めており、鉱山開発のコストを削減することで自分の取り分を増やし、富を蓄えた。取り分は出来高制の範囲で合法的だったが、本多派はその巨額に着目し、長安は私腹を肥やし謀反を企てていたと家康に讒言。埋葬されていた遺体を掘り起こし、岡本大八が処刑された安倍川河原で磔に処した。長安の7人の男児と腹心も処刑となり、長安の庇護者であった大久保忠隣も失脚させられた。

### 宝永噴火で激甚災害地に

酒匂川に文命宮が祀られた端緒は、富士山の宝永噴火にある。

大久保が1609年(慶長14)に

つくった酒匂川の外形は、約100年間、維持される。しかし99年に富士山の噴火が起きた。貞観噴火に匹敵する大噴火であった。

1707年(宝永4)10月4日に起こった宝永地震の49日後、11月23日(いずれも旧暦)に富士山が大噴火を起こした。梅の実ほどの軽石や砂や灰が、16日間も降り続き、山北町の上のほうは約1m、開成町の町内には40cmほどの降灰(スリア)があったという。

当時の様子は収穫高から推察できる。富士山が噴火したのは、現代の暦でいう12月16日。その年の収穫は既に終わっているから噴火前を基準にみると、38年後の1745年(延享2)で3分の1にも達しない。住民は、その間、小高い丘への避難生活だった。収穫高が、噴火前のレベルに回復するのは明治になってから。実に170年以上かかっているのだ。足柄平野の先人達は、想像を絶する労苦を経験した。このことにより、歯を食いしばって頑張るDNAが足柄平野に培われたのかもしれない。

### 激甚災害への幕府の対応

初代会長を務めた大脇良夫さんは、この災害に対する幕府の対応は非常に素早かった、と言う。「1708年(宝永5)1月1日の

# 禹王を祀る原動力 原典テキストの存在

岡田 真美子

おかだ まみこ  
兵庫県立大学環境人間学部環境宗教学教授

## 『真古文尚書』『偽古文尚書』『尚書正義』

禹に関する最古の記述は『書経』にあります。この『書経』中、禹に関する文章は、「禹貢」と「大禹謨」の2カ所にあります。前者は『新釈漢文大系』の『書経上』にあり、後者は『同書経下』に入っています。禹の事績が記される『書経』の古名は『尚書』といい、『書経上』は『真古文尚書』、『書経下』は『偽古文尚書』とされています。

『真古文尚書』は秦始皇帝の焚書坑儒を生き延びて、孔子が壁蔵していたものでオリジナル文献。これに対して『偽古文尚書』は、東晋代（4世紀）になってから書かれた文献です。すなわち、「大禹謨」は『書経』とはいいながら、司馬遷の著した『史記』以降の文献であることに注意しなければなりません。

以上のことから、禹に関する文献は「禹貢」及び『書経』と、その前に置かれている「堯典」「皐陶謨」（これもまた禹と皐陶の問答）中の禹に関する記述が古く、司馬遷によ

る『史記』がそれらをつないで、今日知られる禹王伝記が書かれたと思われまます。

また、聖謨という君子の政策という点で見ますと「偉大な禹のはかりごと（政策）」と解されますが、「謨」は、「詰」（君主の臣下に対する言）に対して「臣下の君主に対する言」という文章形式をさす術語でもあり、実際に『書経』の「大禹謨」を見たところ、禹の偉大な事績を記したというよりは禹の問答集で、「政策」というよりは「問答」と解したほうがよいのではないかと思われまます。

ですから、禹を讃える石碑を建てた人は『書経』の「大禹謨」の内容を理解していたのではなく、「大禹謨」を「偉大な禹の方策」と考えて、碑文に選んだのではないのでしょうか。『書経』の中の禹の事績である「禹貢」は淡々と記されていますが、なかなか味わい深いものです。『新釈漢文大系 書経上』（明治書院）「禹貢第11節 導水」及び、禹の貢献をまとめた解説部の表（p.93～94）と、『史記』や古地図を見ると、より深い理解が得られるかと思われまます。

## 『尚書正義』と関東管領 上杉憲實の接点

『偽古文尚書』の注釈書は、唐代に編纂された『尚書正義』で、これは科挙の試験を受ける者は丸暗記していた書物の一つといわれるほど、重要な内容を持っています。しかし『尚書正義』の原本は、本家中国では既に失われてしまい、日本の足利学校本（宋の両浙東路、茶塩司刊本）が唯一現存する原典テキストです。現在も、栃木県の足利学校に国宝指定書籍として所蔵されています。

この『尚書正義』を1439年（永享11）に足利学校に寄進した人物が誰であろう、円覚寺117世蘭室妙薫禪師に協力して神奈川県足柄上郡の班目下河原に上杉一門の菩提供養のために珠明寺を建てた開基の一人であり、関東管領だった上杉憲實です。上杉憲實は足利学校中興の功労者であり、金沢文庫にあった『尚書正義』を足利学校に納めました。足利学校本は日本の他の地域にも広がったらしく、江戸時代末期に幕府が古典の刊行を奨励したとき、肥

早朝に噴火が収まりますが、3カ月も経たないうちに、幕府は次々と政策を打ち出します。一つには、

当時の小田原藩主の大久保忠増は被災地への食料供給などの対策を実施しましたが、藩レベルでは手に負えないと知るや、幕府に救済を願い出て、周辺一帯を一時的に幕府直轄領とします。幕府は、小田原5万6000石を吸収する代わりに、上げ地といって美濃、三河、伊豆、赤穂を代地に提供しました。

二つ目は、伊奈半左衛門忠順が現地駐在の復興大臣に就任します。江戸詰でなく現地駐在が大切です。三つ目は、全国の大名領や天領に対しては、石高100石に対し金2両の臨時復興税を徴収します。このぐらいいのスピード感だから、みんなも納得するんですね。48万8770両が集まりました。ところが実際に被災地救済に充てられたのは、約13万両。トホホと思

いますが、江戸の御殿の修復に流用した。萩原という非常に優秀な財務大臣がいて、どうせ必要ならとやっちゃったのです。

臨時復興税は、酒匂川の川底いっぱいに溜まっていた噴火砂を浚う御手伝普請に使われました。最初に岡山藩から170人ぐらい来ます。次に北九州の小倉藩、越前の大野藩、熊本の新田藩、鳥取藩

全部で500人ぐらいの人たちが来て働いてくれました。

1711年（正徳元）の大洪水で大口土手が決壊し、新流路には堤防がありませんから、雨のたびに（流路が変わって大変でした（13ページの図）。間もなく川筋が落ち着き、東側の村々は安泰になり、酒匂川の旧流路も田んぼになりました。元は川ですので肥沃な土地で、東の村々は『このままでいい』といい、西側の六カ村は『とんでもない』と反対。深刻な東西対立になりました。このときの絵図の原図は明治大学に保管されています」

流路を元に戻すのか？ このままにするのか？ 最後の裁きには、大岡越前守が登場。大岡裁きの末、川筋を元に戻せと命じられ着任したのが田中丘隅である。

## 土手の復興と文命社創設

田中丘隅は『民間省要』という本で、「徳川の世になり120年経つけれど、家康公の精神が揺らいで非常に由々しい事態に陥っている」と訴え、酒匂川災害の復興工事についても提言。江戸の業者による手抜き工事を厳しく糾弾、酒匂川の特徴を熟知する地元を活用すべし、と言った。丘隅は2代目大口土手をつくって治水事業を行なったあと、岩流瀬土手と大口



臨済宗円覚寺派の珠明寺は、1420年（応永27）、円覚寺117世の蘭室妙薫禅師と室町幕府の関東管領の上杉憲實によって開創された。酒匂川の氾濫や富士山の噴火によって、何度も移転を余儀なくされた。1734年（享保19）8月8日の氾濫では、水死者19霊の記録が過去帳に残り、悲惨な戒名が刻まれた墓も残されている。石垣に開いた穴は、横井土の跡。高台の怒田に避難民が移転した際に、飲み水として使われ、1980年（昭和55）ごろまでは現役だったそうだ。



後藩では時習館でこの足利学校本を復刻しています。現在、完全にそろった版木が、熊本大学に保存されていますが、桧板の両面に各々4ページ分の文字が刻まれており、全部で388枚にのびります。

足利学校は16世紀の中ごろ、空前の活況を呈し、全国から内地留学者もいたということですから、『尚書正義』を学んで帰った者も多かったことでしょう。『尚書正義』が当時の日本でよく読まれたことは、江戸

の林羅山の「春鑑抄」における引用や、岡山藩の大水害後川除けを行なった熊沢蕃山と藩主池田光政とのやりとりでもわかります。

また、高松城で『尚書正義』の「大禹謨」を講じたのは、勸学家老だった青山家だったことと思います。青山家は私の夫である岡田の祖母の生家であり、浅からぬ因縁を覚えま

す。高松の香東川にも「大禹謨」の碑がありますから、『尚書正義』の線から禹碑探しをしてみるのも大きな手がかりとなり得るのではないのでしょうか。

私は、河川改修という大事業に携わる人々に、禹王を祀らせ、その信仰を全国に広げる原動力となったのは、やはりこの公式テクストの存在であったと考えます。しかもそのテクストの保存に関して、酒匂川大

口近くの寺にゆかりの上杉憲實がキーマンであったことが珠明寺訪問から引き出せたことに、歴史の因縁を感じざるを得ません。

土手に文命社を建て、文命宮と碑をつくって祭りを行なうように指示し、土手には桃、李、梨、栗、柿など、実のなる樹木を植えるように命じたほか、川丈六地蔵も祀った。集まる時には堤防上に石を持ってくるようにとも命じたが、石を持つてくる習慣は1970年（昭和45）ごろまで続いていたという。

受け継がれる治水家魂

しかし、田中丘隅のつくった土

手は、8年後には潰れてしまう。56人の水死者を出し、史上最大の被害となった。これについて大脇さんは、

「このときは酒匂川だけでなく、関東の川という川がほとんど氾濫するほどの大暴風雨だったのです。が、言いわけになりません。まず、田中丘隅様がつくられた土手だから大丈夫だろうとの油断があったと思います。次に、時間帯が午前4時で、寝込みを襲われた。現代風にいえば、ゲリラ豪雨で避難する時間が無いほど急激な洪水だったでしょう」

1735年（享保20）3代目大口土手を、丘隅の婿養子 蓑笠之助が復旧する。丘隅と笠之助の仕様の違いは土手の材質と工法だった。丘隅は赤土を使ったが、笠之助は車地（人力のクレーン）を使って巨石を積み、城の石垣のように頑丈な土手を築いた。

「今から約200年前の1802年（享和2）に大洪水が起きて、岩流瀬土手も大口土手も表層は全部崩れましたが、土台底部は残ったと伝えられています。材質と工法の違いが、明暗を分けたのではないかと思います」

なお、川音川の合流点に大掛かりな三角土手を築いたのも笠之助ではないか、といわれている。

# 生きていく川 酒匂川

島谷 幸宏

しまたに ゆきひろ  
九州大学大学院工学研究院教授

## 扇状地河川の特徴とは

典型的な扇状地河川である酒匂川の治水の要は、流路を固定することにあります。大久保忠世が検地を行なって、網目状に流路が広がる酒匂川の川筋を平野の東側に一本にまとめ、今まで川であった場所を新田開発するという壮大な計画は、息子の忠隣が上流からの水勢を弱めるために春日森土手、岩流瀬土手、大口土手を築くことで実現されましたが、理にかなった治水術だと思えます。

扇状地河川の特徴は、川筋がいくつもできてしまつて流路が固定しづらいことです。しばらくの間、一定の川筋を流れていても、そこに土砂が溜まつて地形が高くなるので（自然堤防）、また低い所を求めて流路が変わるからです。イタリアにはまだ自然河川が残っており、網目状の流路を見ることができまますから、航空写真を検索してみてください。

山から平地に出た所で、川に運ばれた粘着性のない砂と礫を中心とする土砂が堆積し始めます。粘着性が「あるか」「ないか」が川を性格づけますが、川も下流に行くと、粘着性のある土などが多くなるので、川岸の浸食に対しても強くなります。

川岸と川底と同じ材料でできていくために、川底の石が動き始めると、川岸の石も同時に動き出す。そ

れで川を深く保つことができなくて、

浅くて平たい川になるから、常に左右に振れやすいのです。こうして、

扇状地の傾斜を持った地形が形成され、山から平地に出た所が扇の要になります。禹王の本場である黄河も、

「鉄の尾を持つ」と言われ、鄭州辺りを尾の付け根（扇頂部）として、南北に大きく振られてきました。

酒匂川は平地に出たあとでも、山に拘束されているために川筋が限定されている箇所が見受けられますが、

制限する山などがなければ、網目状に広がった流路をつくるのが扇状地河川の特徴なのです。

## 扇状地震堤の機能

酒匂川は、山梨の釜無川・笛吹川と非常によく似ています。

釜無川・笛吹川にも酒匂川にも霞堤が見られますが、上流（扇状地）霞堤と下流霞堤とは、求められる役割が違います。下流霞堤は、氾濫させることが基本的な目的です。上流から水が入ると田んぼがやられてしまふのですが、下流から入ると無事ですし、肥沃な土を落としていくつくれるし、より下流の人を氾濫から守る。霞堤をどこにどうつくるかで、

あふれる場所を特定することもできます。成富兵庫茂安がつくった象の鼻や天狗の鼻、松浦川のアザメの瀬も同様の構造です。あふれることで、

沃土や生きものを運んできてくれる。

上流（扇状地）霞堤は、流路固定と氾濫戻し。扇状地河川の勾配はだいたい100分の1から500分の1ぐらいの間です。100分の1という

うと、100m行つて1m下がるぐらいの勾配。霞堤であふれるといつても水深はせいぜい2mにもなりません。傾斜がきついので断続堤の切れ目からあふれることはないから、

閉じる必要性がない。万が一切れ目から水があふれても、間に入った水が堤防を支える役目をします。二重堤だと思えばいいんです。閉じてしまつと、逆にあふれた水が戻らなくなつてしまいます。

昔の人はその土地に住む人が損をするような仕組みは絶対につくりません。それは霞堤に限らず、溜め池でも同じです。みんな、洪水防止の面からしか見ていないため霞堤の機能を正確にとらえていませんが、多面的な働きを持つことを見直すべきです。

釜無川に合流する御勅使川に相当するものが、酒匂川における川音川です。小河川のほうが水が先に出てくるので、大河川の合流地点に土砂を溜めます。それで川が曲がるのを、

どうやって制御するかというのが治水の要点になるわけですから、こうした小河川との合流点が治水の要衝になります。ここに葦笠之助がつくつたといわれている三角土手がある

わけです。

甲州三大難所といわれているのが、笛吹川の万力、釜無川の竜王と笛吹川・日川・重川の三川が合流する近

津。これらの堤がよく切れるので三大水難所といわれています。甲府盆地への水の供給は、ここから行なわれています。いつも水が当たる所は、

いつも水が引ける所なんです。笛吹川の万力林にあたるのが、酒匂川の福沢神社付近（文命東堤碑）ではないでしょうか。私は酒匂川の地図を見て、福沢神社と高台病院と寒田神社と開成スポーツ公園付近が、治水上

の要所だと思いました。

## 日本列島の基本構造

みなさんは、付加体（accretionary prism/wedge）という言葉を知っていますか。海洋プレートが、ハワイの辺りの中央海嶺という所から吹き出されてきて、徐々に

日本列島に押し寄せられて大陸プレートの下に沈み込む際に、海の中の堆積物やサンゴが削り取られて、日本列島に付加される。これを付加体と呼んでいます。

海溝付近には、洪水のときに川から運ばれた土砂や岩石が積もっていきます。酒匂川も富士山の噴火の際に放出された砂礫や、川が削り取ったたたくさんの土砂を海溝に運んだと想像できます。

## 現代の水害に生きる 丘隅の精神

田中丘隅は水防命令書を発行して、水防組合をつくらせ、どここの堤防をどの村が守るのかを明確にした。水防を日常生活の一部にして習慣化することで自衛するとい

う丘隅の思惑は、1938年（昭和13）の水害時にも役立っている。

九十間土手は曾比と中曾根を含め、現在もかろうじて残る三つの

かすみ堤（ここでは足柄地域の表記に準ずる）の内の一つ。その九十間土

手が決壊の危機を迎えたのは、1938年（昭和13）の梅雨の出来事である。

6月中旬から降り続いた長雨で、酒匂川は増水していた。27日の深夜から28日の夕刻にかけての豪雨に加え、さらに降り続いた雨によ

り、30日の正午過ぎから九十間土手の南端からじわじわと決壊が始まった。

通常は堤防を守るために置かれた（川倉（水制工 写真左）の残骸



海洋プレートが海溝で大陸プレートの下に沈み込む際には、次々に到着する新しい付加体が古い付加体の下に潜り込みながら大陸側へ押し上げるため、並行する逆断層が形成されるという特徴があります（ただし並行する2本の断層間にある岩体内においては、下部が古くて上部が新しくなる）。

小田原周辺の海域はプレートが集まっている地帯でもあり、付加体の構成も複雑で、非常にわかりにくくなっています。フィールドワークでも確認してみたのですが、川底の材料には火山岩、花崗岩、堆積岩といったいろいろな種類の岩石が混在していました。

日本列島を構成する材料としては、一番新しい付加体が太平洋側にあって、日本海側に徐々に押し出されるために北にいくほど古い付加体が存在します。

## 川の性質を左右させる地質

日本列島は、このような単純な基本構造なのですが、火山が載っていることで他国に比べて地質が複雑になっています。いわゆる白砂青松というのは花崗岩地帯なので、川砂が白い、というように、山の地質が川の性質に、大きく影響を与えているのです。

地質と山から出る水の流量というのはものすごく関係が深く、小水力発電をするときの適地探しに効力を発揮すると考えています。（地質と流出特性）の表を見ると、古い地質の所は新しい地質の所の4分の1しか水が出てきません。火山岩の所は第4紀ですから、1000hで3t。

上に植物が載っていることで植物が寄与する面もゼロではないのですが、せいぜい1割程度で、水量は地質によってほぼ特定されます。水源の維持管理からいうと森林の保水力も大切ですが、岩体の容量が非常に大きいことから、地質の影響の重要性をもっと意識すべきです。

## 平野に点在する〈島〉

酒匂川は自然堤防が非常に発達した川で、集落はほとんど自然堤防上にあります。島がついた地名が多く見られるのも、その現われです。

旧流路の横には、氾濫したときに土砂を堆積した跡として自然堤防ができます。古い地図を見ると、その跡がよくわかりますし、川が低いほうに流れたがっていることも、地図から読み取ることができます。水を堤防にぶつけて勢いを削ぎ、方向をコントロールしているのですが、それでも川が行きたいほうに流れてしまう恐れがあることもわかります。実際、過去の水害の例を見ると、コントロールしきれないでそちらに流れて行ったこともあるようです。

川の方向をコントロールしたのは、利水に有利だからです。もちろん、取水口は高い所に設けているはずですが、川全体を扇状地の中でも高い所に導いておけば、どこからでも水路を固定すれば、扇状地全体を網目状に流れくねっていた酒匂川の滞筋を整理して、残りの土地を開発することが可能になります。大久保忠世・忠隣親子が行なった足柄平野の開発は、まさにそういう手法でした。

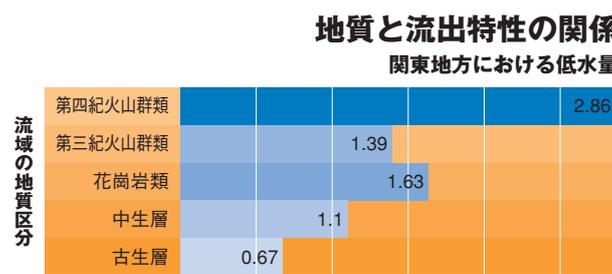
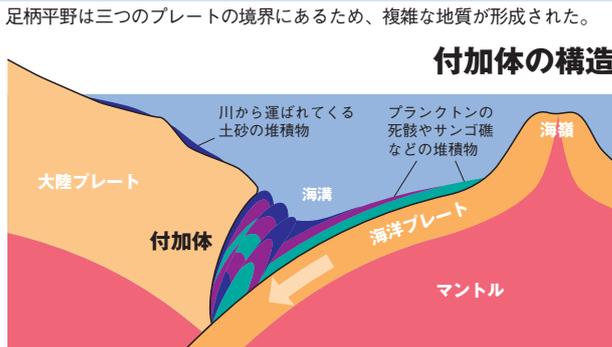
日本の古代に拓けた土地は、例えば大和盆地や九州に見られるように、はじめは小河川の扇頂に集落が形成されます。その後、治水技術が向上すると、大河川の扇状地にも進出することが可能になります。足柄平野全体を見渡すと、酒匂川の左岸の山あいにある曾我という地名の辺りが古くから開けた集落であると予想でき、そうした歴史的経緯がわかります。そういう意味でも、とても素晴らしい場所だと感じました。

実は扇状地河川においては、大変インパクトのある事例が1960年代にありました。高度経済成長期に、全国の河川の高さが約3m下がったことです。日本全体で2億tぐらいの土砂が出るのですが、ピーク時には3分の1以上の土砂が採取され、しかも土砂許容量があまり守られずに大量採取された結果です。そのため、河川の高水敷が安定して、そこが樹林化するようになりました。網目状に複数の川筋に水が流れていたのに、単立化といって滞筋を一つに集約するようになったことも、樹林化に拍車をかけました。

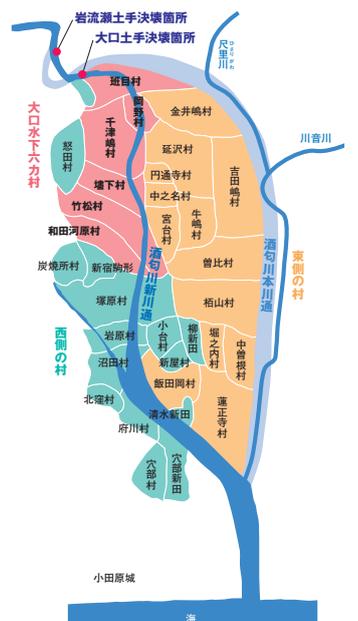
酒匂川は樹林化しないで砂礫に覆われて白い河原が見えますが、こういう川は今では少なくなっています。久しぶりに川らしい川を見たと思えました。

扇状地河川の特徴の一つはこの河原ですが、現在は河原が減っており、全国的に河原の再生が行なわれています。酒匂川には良い河原が残っていますね。私たちは酒匂川のような川を（生きている川）と呼んでいます。

足柄平野は三つのプレートの境界にあるため、複雑な地質が形成された。



基本的に地質は古くなるほど締め固められ硬くなるので、水が浸透しにくいと考えればよい。地質により4倍の開きがあることが数値から読み取れる。ただし花崗岩は風化しやすいので保水力は比較的大きくなる。このような特徴は、平常時の河川の流出特性にも同様の影響を及ぼす。  
注：低水量とは、一年のうち275日（9カ月）間これより下まらない水量。（虫明功臣さんらの研究を島谷幸宏さんがまとめたものです）



決壊した酒匂川の新流路  
1720年（享保5）10月「相州酒匂川本川通川除御普請願絵図」より、編集部が作図（明治大学博物館 瀬戸家資料）  
赤色部分が移転を余儀なくされた、大口下水水損六カ村。



上から、1938年（昭和13）の水害で崩れた九十間土手が修復されて70年が経過。九十間土手は、かすみ堤として現役で活躍している／金井島にある瀬戸屋敷には、富士山宝永噴火のスコリアが一目でわかる〈はぎ取り標本〉がある／副読本『富士山と酒匂川』を手にした佐久間俊治会長と事務局長の大井みちさん。



上から、山から平地に流れ出した酒匂川は、春日の森土手でコントロールされて河岸段丘である釜淵にぶつかって、ほぼ直角に流れを変える。写真向かって右に見える土壁が釜淵だ／大口土手そばに建立された文命宮と文命東堤碑。どちらも関東大震災で倒壊していたのだが、2009年（平成21）に復元された。文命宮の石は祠部分以外は、新しい石だ。文命東堤碑の原文は、田中丘隅が書き、荻生徂徠が推敲したもの。

につかつた本流が、中土手を直撃し始める。中土手が切れると開成町南部から小田原市まで水浸しになる。死守せねばならない重要な最後の砦である。地元住民による〈川倉〉の撤去と松の木による木流しが敢行されたが、危険はますます高まり、半井神奈川県知事は、ついに赤羽工兵隊と横浜消防隊に救援要請を出した。

「しかし中土手を守り抜いたのは、地元住民パワーだったのです。大きな鋸を体に縛り付け、激流の酒匂川に命綱なしで飛び込んで〈川倉〉を切り倒したのは、地元吉田島の15人だったのです。危険であ

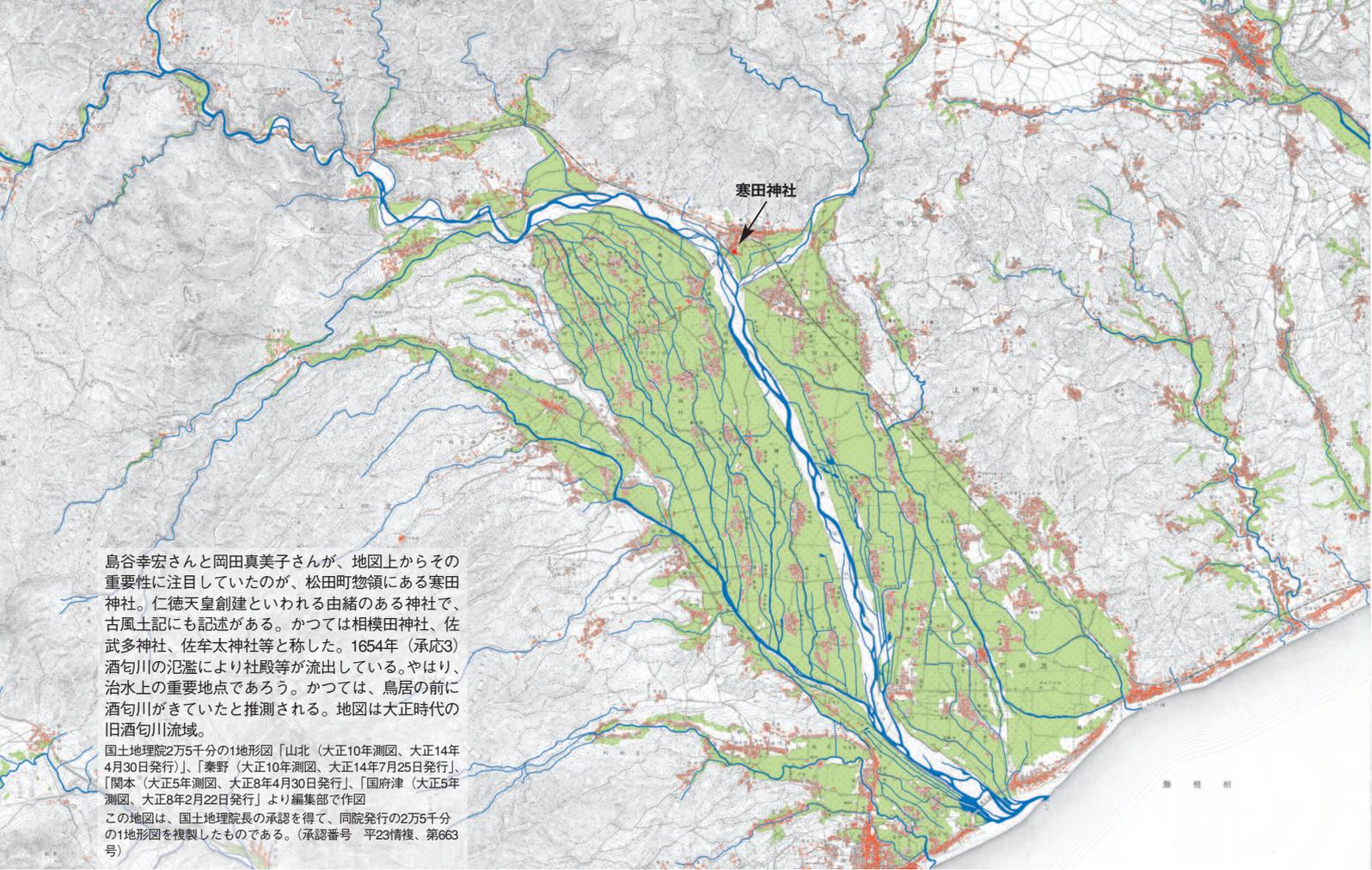
るが故に、工兵隊がためらう中を飛び込んでいった15人のことを郷土の誇りとして、子どもたちに語り継ぎたいと思います」

このとき壊れた九十間土手は1941年（昭和16）に丸2年を要して復旧された。2009年（平成21）は大口土手が築かれて400周年、2011年（平成23）は九十間土手修復70周年の記念の年。こうした節目には、必ず過去の経験を生かす記念のシンポジウムが行なわれてきた。そして、〈足柄の歴史再発見クラブ〉メンバーが運営の強力なスタッフを務めている。

2011年（平成23）10月22日に行なわれた〈酒匂川かすみ堤 九十間土手修復70周年を考える小田原・開成の住民の集い〉で大脇さんは、1938年（昭和13）の大洪水以降、酒匂川の防災意識が次第に希薄になったことを指摘している。

その理由として、①三保ダム完成（1978年（昭和53））による洪水調整機能への過信、②都市化によるかすみ堤消滅で遊水地機能が失われたこと、③そして流域市町村（静岡県、神奈川県3市、5町）の連携意識の低下、の三つを挙げている。特に、①の洪水調整機能については、酒匂川全水量の3分の1にしかならないことを訴えている。

次に控える大きな記念イベント



寒田神社

島谷幸宏さんと岡田真美子さんが、地図上からその重要性に注目していたのが、松田町惣領にある寒田神社。仁徳天皇創建といわれる由緒のある神社で、古風土記にも記述がある。かつては相模田神社、佐武多神社、佐牟太神社等と称した。1654年（承応3）酒匂川の氾濫により社殿等が流出している。やはり、治水上の重要地点であろう。かつては、鳥居の前に酒匂川がきていたと推測される。地図は大正時代の旧酒匂川流域。

国土地理院2万5千分の1地形図「山北（大正10年測図、大正14年4月30日発行）」、「秦野（大正10年測図、大正14年7月25日発行）」、「関本（大正5年測図、大正8年4月30日発行）」、「国府津（大正5年測図、大正8年2月22日発行）」より編集部で作図  
この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。（承認番号 平23情復、第663号）



は、2013年（平成25）文命用水完成80周年だ。大久保忠隣以来310年余続いた取水方式が関東大震災で壊滅。酒匂川から直接取水する従来の灌漑用水は、氾濫によって取水口が泥で詰まったり破壊されると、修復しなくてはならぬ。そのたびに動員される農民の労苦は、大変なものであった。そこで、幹線水路を酒匂川沿いに新設し、そこから灌漑用水路に流す画期的な用水システムが計画された。これが、文命用水だ。山北町の足柄橋近くから取水された水は、右岸の開成町側から川底をサイホンで通して、左岸の松田町・大井町・小田原市に送られている。文命用水には落差を利用した水力発電所も組み込まれている。

「富士山と酒匂川」では、開成町の文命中学校の美術部の生徒たちが挿絵を描いてくれた。当時、平均年齢63歳だった〈足柄の歴史再発見クラブ〉の会員たちの孫世代のおつき合いは現在も続いており、郷土史に興味を持つ頼もしい人材が育ちつつある。酒匂川の防災意識を希薄にしまった三つの原因も、郷土史を学ぶことで徐々に改善に向かいつつあるように感じた。

「当時は発電に対する偏見があった、作高に悪影響があるのではないかと、反対運動が起きました。幾多の紆余曲折を乗り越えて、大規模な幹線水路を新設した先人たちの努力には頭が下がります」と大脇さん。壊れたものを元通りに復旧するのではなく、システム自体を見直した英知と勇気を称えたい。



# 田中丘隅を認めた時代

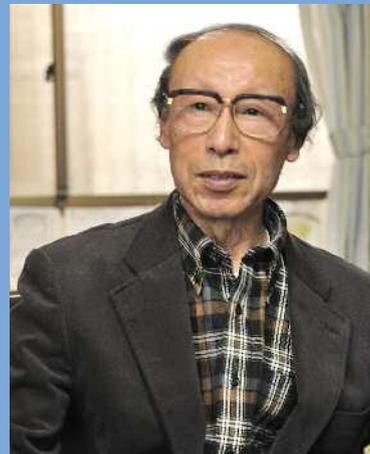
川崎宿名主だった田中丘隅は、  
酒匂川改修を見事にやり遂げ、  
足柄平野の洪水常襲地帯を復興させました。  
中国・夏王朝初代の禹を祀る大口土手の文命宮と  
文命東堤碑、岩流瀬土手の文命宮と文命西堤碑は、  
災害の再発を防ぐ、丘隅の想いが込められた仕組みです。  
献言書『民間省要』を著した丘隅を  
認めた時代背景について、深谷克己さんにうかがいました。

## 深谷 克己

ふかや かつみ

早稲田大学名誉教授 文学博士

1939年、三重県久居市生まれ。早稲田大学文学研究科史学専攻博士課程修了。1971年同文学部助手、1974年専任講師、1977年助教授、1982年教授に就任。1980年、「百姓一揆の歴史的構造」で早稲田大学文学博士。アジア民衆史研究会代表、早稲田大学アジア歴史文化研究所（総合研究機構プロジェクト研究所）代表などを歴任。2010年、同大学を定年退職。専門は日本近世史。主な著書に『百姓一揆の歴史的構造』（校倉書房 1979）、『百姓成立』（塙書房 1993）、『近世人の研究—江戸時代の日記に見る人間像』（名著刊行会 2003）、『藩政改革と百姓一揆 津藩の寛政期』（比較文化研究所 2004）、『江戸時代の身分願望—身上りと上下無し—』（吉川弘文館 2006）ほか



## 丘隅を用いた 吉宗—大岡ライン

富士山が1707年（宝永4）に大爆発して、噴火による降灰が酒匂川に溜まったことで土手が切れ、足柄平野は洪水の常襲地帯となりました。徳川吉宗は、その治水事業を大岡越前守忠相に命じ、大岡は田中丘隅を復旧工事の責任者に任じました。

田中丘隅（4ページ参照）は、その仕事を見事にやり遂げ、災害の再発を防ぐ仕組みとして大口土手と岩流瀬土手に中国・夏王朝初代の禹を祀りました。大口土手につくられた碑の原文は田中丘隅が書き、吉宗の命で荻生徂徠が添削し、大岡が幕府代表として検分に訪れたといっています。

大岡越前守忠相は、1717年（享保2）から19年間江戸町奉行を務めました。兼職の形で1722年（享保7）関東地方御用掛に任じられています。従来の農政担当機関である勘定所と競合する形で、武蔵を中心に各地で新田開発などの農政を担当しました。

享保期には、かなりいろいろなお政策が打ち出され、歴史の中の曲がり角として大きなものでした。律（刑法）の見直しも、その一つです。古代の日本は遣唐使を派遣し

て、中国の律令政治の仕組みを取り入れました。室町幕府の時代は、中国との間に冊封・朝貢の関係ができていたのですが、貿易（勘合貿易）利益を得ることに主眼がありましたし、そのうちに中断状態になってしまいました。そのため遣唐使の廃止以降、王朝が交代するたびに改編された中国の律を学んでこなかった。400年続いた明代の律も、日本に入ってきていませんでした。

日本にそういうことを学ぶ儒者が育ってきた、という背景もあります。紀伊藩主徳川光貞や加賀藩主前田綱紀とその周辺の学者によって行なわれたのが嚆矢です。荻生徂徠などは中国に行ったこともないのに、発音も非常に巧みだったようです。刑法というのは現場の実状が理解できていないと本当の意味での理解が難しいのですが、徂徠は『明律国字解』を著して、今の私たちでも理解できるように書き下してくれています。

光貞の子である徳川吉宗が8代将軍になってから幕府内部でも、改めて明律などの研究をも参考にしながら、大きくいえば「寛刑化」が進みました。今の表現を使えば、司法改革ですね。戦国時代の名残である「やられたらやり返す」といったような残酷刑をゆるめ、特に遠隔の血縁者でも同罪にするよ

うな連座制などを改めています。

## 徳川直轄地の特殊性

これは私の推測なのですが、近世人の改名についての話です。新撰組の近藤勇は、甲陽鎮撫隊を率いて甲府城の占拠に向かうにあたって、大久保剛、土方歳三は内藤隼人と改名します。一方、東山道軍参謀として土佐軍と因幡軍を率いる乾退助は「入甲」にあたり、板垣退助と改名します。

大久保は、おそらく八王子千人同心を代官として最初に指図して、西方からの江戸攻撃を防御する基盤をつくった大久保長安（8ページ参照、内藤は江戸城から府内麹町、四谷門を経て多摩に抜ける道筋に屋敷を与えられた譜代大名内藤氏（高遠藩）の名字だろうと思います。対する乾が選んだ板垣姓は、武田信玄の重臣、板垣信形からきていると考えられます。

多摩地域というのはほとんど將軍・旗本領という直轄地だったこともあって、東照神君（家康）、東照大権現への想い、恩顧感情が余所と比べて根強い。そのことは、千人同心や新撰組、農兵、さらには武州一揆に加わった百姓にも見られます。板垣姓を名乗ることで、甲州に点在する武田家遺臣や領民が徳川から離れ、新政府に帰順す

ることを期待したのです。乾家は、幸いにして板垣信形の末裔でもあったので、あながち荒唐無稽な改名でもありません。

八王子千人同心

武蔵国多摩郡八王子（現・八王子市）に配置された郷土身分の警備組織。徳川家康の江戸入府に伴い、1600年（慶長5）に発足し、甲州口（武蔵・甲斐国境）の警備と治安維持が任務とされた。初代の統括者は、代官頭大久保長安。甲斐の武田家の滅亡後に武田遺臣を中心に組織された。甲斐が天領に編入され、太平が続いて国境警備の役割が薄れると、日光東照宮を警備する日光勤番が主な仕事となった。

新撰組がどこで崩壊したかを判断するのはなかなか難しいところですが、甲陽鎮撫隊をつくって最後まで応戦しているし、その資金を全部ではないとしても、「大政奉還」した後の江戸城の指揮者クラスが資金を渡していますから、京都で敗退したときが終わりとはいえません。そのころには幕府の老中会議は崩壊しているんですが、京都では近藤に大名格を与えています。

江戸城から一番直近の防備線は麹町、次が多摩、その先端が八王子で、その向こうにあるのが、甲府城。陽というのは州と同じ意味で、甲州のこと。甲府城をいち早く奪取して、幕府の回復を図ろうとして、近藤は大久保、土方は内藤と名乗った。そこに私は、彼らが江戸を守る、という意気込みを

見るのです。

徳川が江戸に入府するきっかけになったのは、豊臣秀吉の小田原攻めでした。関東の覇者である後北条氏の小田原城には支城が58もあって、江戸城も八王子城もそれらの一つです。小田原攻めでは八王子城で玉砕型の激戦が行なわれています。江戸城攻撃を担当したのは、徳川勢。ですから家康は、江戸は西から攻撃を受けやすいことを痛感していたのです。

当時、社会の動揺が大きくなって悪ねだりや強盗などが増えましたが、安全を保障する領主の力は衰えていました。そのため各地の豪農の間では、自衛の必要を考えて剣術稽古が盛んになりました。八王子宿と高井戸宿の中間に置かれた日野宿の名主間屋の佐藤彦五郎も、自邸の一角に出稽古用の道場を設けています。天然理心流の剣士、沖田総司らが出張してきて、村の若者たちに剣術を教えています。農兵は、洋式の出で立ちで銃砲の訓練を行ない、千人同心とはほとんど関係を持ちませんでした。

1866年（慶応2）の武州一揆（通称、名栗のぶっこわし）鎮圧や八王子での薩摩浪士捕縛にも尽力しています。日野宿では、多摩を支配していた伊豆代官の江川太郎左衛門の指示で、郷土防衛意識を持った在村武装集団もつくり、江川

農兵とも呼ばれました。

土方歳三の姉と結婚し、新撰組の支援者でもあった彦五郎たちは、鳥羽伏見の戦いに敗れて江戸に戻ってきた近藤たちを迎え、兵糧隊として農兵隊（春日隊）を組織し、甲陽鎮撫隊にも加わっています。

### 近世の身分制

江戸時代の身分制の特徴は、「身分別に支配する」というところにあります。町奉行所の役人たちは、旗本にも寺社にも手が出せない。身分の高低というよりも、属する身分集団が違うと監督・監察する者も違う。これを「筋違い」といいますが、この身分別支配というのが近世的な特徴です。

御三家の紀州藩主から將軍になつて江戸に乗り込んできた吉宗は、御三家出身の將軍といつても宗家筋ではない。自分一人が乗り込んで、権力は形成できない。そこで紀州藩から二、三百人、家来を引き連れてきた。三河以来の旗本ではなく、新参の旗本や御家人です。それまでの課報組織である伊賀者も甲賀者も信用しない。御庭番という組織を設けて紀州出身の者を使う。江戸城政治でも同じです。やがて江戸城政治は、紀州系の人材によって担われるようになる。その代表的な人物が田沼意次

です。父親が吉宗に従つて和歌山から江戸に来る。その子の意次が吉宗以降三代の將軍の「恩寵」で5万石クラスの大名になり、政策を牽引しました。

吉宗が確立した、いわば「紀州王朝」の顕著な例が、御三卿（吉宗が分立した徳川氏の一族。田安德川家と一橋徳川家と清水徳川家）です。吉宗の孫の家治の子で「世子」に決まっていた家基が若くして急死したことから、さっそく御三卿の一橋

家から家齊が出て11代將軍になりました。吉宗が目安箱を江戸城の評定所近くの門に出して、投書を大いに奨めたこともあって、自分の訴えを捨文の形にすることが流行りました。日本橋には目安提出推奨の高札が出され、三つ内容を奨めています。一は政治向き（お仕置き筋）の改革案、二は悪政の事実（私曲・非分事例、三は裁判の遅滞（永々捨て置き）の言い分です。「裁判が遅れている」という苦情が増えた背景には、民間の経済活動が活発になったために、訴訟が増えたことがあります。犯罪というより、利害のもつれから訴訟に及ぶ者が増える一方で、領分を越える紛争では江戸の評定所で裁判を行ないました。

吉宗が刑法を改革しようと考えたのは、法と実際とに齟齬ができて、解決できない問題が増えてきたからです。明律の研究も中国の真似をするというのではなく、紛争解決を図るために、東アジアの蓄積、特に中国の刑法について、もう一度研究し直そうとしたことにあります。

裁判のために宿屋（公事宿）に逗留して、訴状を出し判決を待つ遠方の百姓なども多くいました。訴訟代表者を送り出した村からすると、非常に費用がかさむ。そういう状況が、吉宗の藤元の江戸で生まれていた。それに、吉宗は対応したわけです。田中丘隅も、川崎宿名主のときに、江戸に訴訟で赴く人の苦勞話を聞いたかもしれせんね。

### 『民間省要』を著す背景

田中丘隅についての研究では、長大な意見書である『民間省要』の解説として、法政大学名誉教授の村上直さんたちが平川家本からまとめているものが一番新しく、正確なものです。例えば「キユウグ」という名前についても、本人が書いたように休に愚としたほうがいいと提言しています。

新政府になつてしばらくの間、国会開設運動、自由民権運動といわれる活動が広まった時期があります。そのころ、建白の時代と呼

ばれて多くの人が意見を提出しました。江戸時代は、以前は言論などほど遠いイメージにとらえられていたが、近年は見直されています。田中丘隅のように下から意見を出した事例はたくさんあり、献言（建言）の時代といえます。建白も似た言葉ですが、多少主張の度合いが強いと解されるため、明治以降は、特定の主君のみでなく公に訴え出る場合に建白という言葉が用いられたのでしょう。

主君から「異見」（自説を主張するので、意見より異見と表記することが多い）を言え、と言われて家臣が主君に建言することは諫言といわれます。主君が家臣から誓詞を徴するときには、考えた異見を必ず言わなくてはならない、という内容を入れることさえあります。それが、行政実務を根気良くやることと合わせて、戦国の槍働きの忠義（武功）でなく、近世的な忠義であると考えられるようになったのです。17世紀の名君といわれた池田光政も、既にそうした誓約を徴しています。

池田光政（1609～1682年）

西国將軍と呼ばれた池田輝政の孫。水戸藩主の徳川光圀・会津藩主の保科正之と並び、江戸時代初期の三名君と称されている。7歳のときに42万石の姫路藩主である父・利隆が死去。幼少を理由に因幡鳥取藩32万5000石に減封となる。叔父・池田忠雄の死去に伴い、岡山藩31万5000石へ移封。幕府が推奨した朱子学ではなく、陽明学を信奉し、陽明学者の熊沢蕃山を招

聘し、（諫め箱）を採用した。しかし、次第に朱子学に近づき、蕃山と鯉鱒が生まれた。1641年（寛永18）全国初の藩校として花島教場及び、1670年（寛文10）庶民の学校としては日本最古の閑谷学校を開いた。岡山郡代官として津田永忠を登用し、干拓による新田開発や白間川（旭川放水路）の開鑿などの治水事業、産業の振興を奨励して、教育の充実と質素倹約を旨とする（備前風）といわれる政治家姿勢を確立した。

田中丘隅は、唐の史官である呉兢が編成したとされる太宗皇帝（李世民）の言行録『貞観政要』（全10巻40篇）を意識して著した、と自ら述べています。政要とは政治の要諦ということ。丘隅は太宗を尊敬しながらも、「私は下から物申す野の人間だから」と、政要でなく省要とするといひ、まさに「民間」からの異見を言上しようとしたのです。

それにしても、『貞観政要』を引き合いに出しているということ、は、「貞観の治」や太宗についての知識が丘隅にあったということでもあります。中国でも日本でも、『貞観政要』は政道の書の代表的なものなんです。大坂の陣で豊臣が滅びたときに、天皇や公家を縛る「禁中并公家中諸法度」が出されましたが、その第一条で「天子は学問が第一である」と指示しています。その「学問」として、第一に挙げられるのが『貞観政要』です。日本の近世天皇は政治の場（民百姓統治）にはいけないけれど、民

百姓に治者がどう臨むかを学ぶことが義務づけられているのです。家康や吉宗が儒学者に講じさせて『貞観政要』を学んだと『徳川實紀』にも記録されています。唐の2代目皇帝である太宗は、玄武門の変を起こして兄の李建成と弟の李元吉を殺害して皇位に就きましたが、あるとき吉宗のまわりの医師や儒者たちが秀吉と李世民を比べ、どちらも戦好きで似たり寄ったりだ、という話をしている。別室で彼らの話を聞いていた吉宗は、「秀吉は家を滅ぼしたけれど、李世民は以降の繁栄（盛唐）の礎を築いたのだからまったく違う」と論じています。

これは聖王の禹の話と通じるところがあります。古代中国には堯、舜、禹という伝説の三皇帝がいます。禹の父親の鯀は堯の臣下で天下に洪水が起ったときに治水工事を任せられましたが、9年経っても何の成果も挙げることができず、摂政の舜が羽山（東方辺境の山）に押し込めて死にいたらしめると同時に、子の禹を起用して事業を継がせたとあります。つまり親への孝と王への忠をどう考えるか、ということ。当時の儒者たち、また治者は、こういう話を引き合いに出しては、異同を弁別する思想を磨いていったのだらうと思います。

これは聖王の禹の話と通じるところがあります。古代中国には堯、舜、禹という伝説の三皇帝がいます。禹の父親の鯀は堯の臣下で天下に洪水が起ったときに治水工事を任せられましたが、9年経っても何の成果も挙げることができず、摂政の舜が羽山（東方辺境の山）に押し込めて死にいたらしめると同時に、子の禹を起用して事業を継がせたとあります。つまり親への孝と王への忠をどう考えるか、ということ。当時の儒者たち、また治者は、こういう話を引き合いに出しては、異同を弁別する思想を磨いていったのだらうと思います。

## 人生三分論で生きる

およそ近世の宿場は、経済的に疲弊していくのが普通でした。そもそも宿場というのは、社会の最上層から最下層までの人間が立ち寄り、下は胡麻の蠅（護摩の灰とも。旅人の姿をして、旅客の持ちものを盗む泥棒）や雲助（宿場や街道で荷物運搬や川渡し、駕籠かきに携わった人足）から、大名・公家までが通り、あらゆる身分の人間が行き交いました。

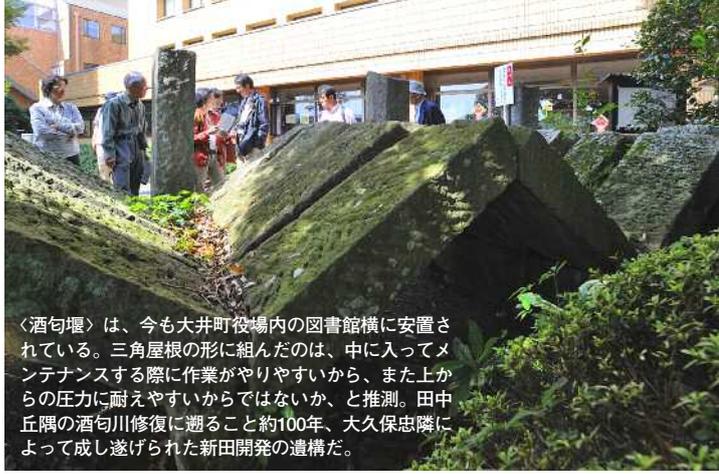
こういう大変なところに、田中丘隅は見込まれて夫婦養子として入ります。養子に取った東海道川崎宿の本陣名主田中家にしてみれば、才覚のありそうな人物を選ばなければ、宿場の破綻につながるわけ。宿場は本陣や問屋を兼ねることもあり、宿としての仕事以外にも、宿駅の常備人足・馬、道路・用水施設の管理、荷物・手紙のスムーズな受け渡し、さらには名産や名所にも目を配るといような仕事の種類々雑多にありました。そういう中で、忙しいだけでなく、宿営が全体として出超赤字に陥っていくというのが、東海道などの幹線道路の宿場の傾向だったので、公儀からの財政援助もありました。丘隅は宿名主として、伝馬制度

の負担や多摩川の治水、地震などで経済的に疲弊していた川崎宿の立て直しを図ります。多摩川の河口は今でも六郷川と呼ばれますが、その渡船権を川崎宿の請負にする許可を受け、渡船賃の収入を得られるようにしたり、幕府から宿救済金3500両の支給を受け、川崎宿を再興したのです。

しかし、丘隅は死ぬまで宿場運営というようには考えませんでした。だいたい近世人は、一人前になるまでの25年間、当主として家業・家職に打ち込む40歳までの15年間、それから隠居してからの50歳代までの十余年間、というように考えるのが普通でした。人生三分論ですね。近世には、この隠居の第3期にまったく新しいことに挑戦し、社会還元を考える人たちがいました。人よりも長く生きたんだから命を惜しまないというわけで、百姓一揆のときに、処刑の恐れのあるリーダーを引き受けたりすることもあったのです。

田中丘隅は、なるべく早く隠居しようと思いましたが、何も風雅の余生を求めたのではなく、自分の蓄えた見聞、考えを、学問的に確かなものにし、農政や民間の問題解決に生かそうとしたのです。そのことは、その後の歩みでわかります。丘隅は1711年（正徳元）、50歳のときに隠居。江戸に遊学し、

の負担や多摩川の治水、地震などで経済的に疲弊していた川崎宿の立て直しを図ります。多摩川の河口は今でも六郷川と呼ばれますが、その渡船権を川崎宿の請負にする許可を受け、渡船賃の収入を得られるようにしたり、幕府から宿救済金3500両の支給を受け、川崎宿を再興したのです。



「酒匂堰」は、今も大井町役場内の図書館横に安置されている。三角屋根の形に組んだのは、中に入ってメンテナンスする際に作業がやりやすいから、また上からの圧力に耐えやすいからではないか、と推測。田中丘陵の酒匂川修復に遡ること約100年、大久保忠隣によって成し遂げられた新田開発の遺構だ。



と磨かれました。土手をつくり、石垣を築くような大土木工事を短時日でやってのけるようになり、信玄堤に代表されるような土木技術が、一種の軍事技術として発達したのです。

箱根用水は、この軍用技術が民生に応用された好例です。

箱根(深良とも)用水  
1670年(寛文10)に完成した用水路。海拔723m、貯水量1億7000万tの芦ノ湖の水を駿河国(現在の静岡県)駿東郡(すんとうぐん)に流した用水路。湖尻水門で湖水の水位を堰上げ、深良水門から取水。総延長約1280m、高低差約10mの隧道(トンネル)で、芦ノ湖の水を山向こうの裾野市深良地域、黄瀬川へと導いた。深良村(現裾野市)の名主である大庭源之丞は灌漑用に芦ノ湖から箱根山の外輪山(湖尻峠)を貫通する隧道を掘るのを考へ、江戸商人である友野与右衛門に資金協力を要請した。戦後、民主主義実践のモデルとして、小説や映画「箱根風雲録」で全国に紹介された。

の原風景などといわれますが、これは近世の主たる光景ではありません。近世は、大きな河川の護岸、川筋の付け替えといった治水工事をしない、溜池や大河の downstream、つまり沖積平野に用水路をつくって水を導き、川の下流の沖積地を水田化するという政策に転換した時代です。新田開発は、17世紀に入ってから爆発的な人口増加の原因ともなり、社会の再生産を支える基盤ともなりました。

しかし、この大開発は、マイナスの弊害が起きて河川に大きな影響を与え、全国的に洪水が頻発しました。1666年(寛文6)には「諸国山川掟」の幕令が出され、幕府も新田開発推進から既存の田畑、つまり本田を丁寧耕作する方向に、農政の転換を図っています。まあ、これは淀川水系に限定した話ですが、それでも公儀(国)の姿勢がそうよりに変わっていったことは事実です。過剰に開発が進むと、秣場や入会山の不足から紛争になることが多く、各藩でも開発制限令などが必要となりました。

寺子屋や家塾で教わった教え子が、師匠が死んだ際にその遺徳を偲んで建てた、筆子塚が近年続々と発見され、この時代の庶民がいかに勉強熱心であったかがわかっていきます。勉強熱心というだけでなく、男なら日常の貨幣使いや証文・帳面の必要、女なら奉公に出る際に嗜みのために読み書きが求められるようになり、貧しいから奉公に出るといっただけでなく、奉公に出るにはそれぐらいの備えが必要だ、と考えられるようになったのです。

日本に中国の治水の神である禹にかかわる碑がたくさんつくられたということは、近世になって、こういう教養や富が庶民にも備わってきたこと、決して無縁ではないと思います。

箱根用水がつくられた寛文年間(1661~1673年)の特徴は、江戸の町人資本にあります。溜まった富の投資先と、年貢の増収を願って新田開発に取り組んだ幕府や藩の思惑とが一致。もちろん、成功した暁には既得権益(年貢米処分権や水利用料徴収など)が認められました。したが、儲けだけでなく、社会的な正義や公共心もあつたでしょう。

農業をするには、水をいかに導くかという技術が求められます。日本では棚田に人気があつて日本

## 治水意識の変遷

この時代、幕府は直轄地である徳川氏の知行分は700万石。その内の幕領、つまり將軍の直轄地は、石高でいうと400万石くらいありました。仮に5万石

戦国時代には、水の扱いが一段



取材・2011年11月15日

# 時間・空間で読み解く鴨川

## 禹の廟はなぜつくられたのか



物事は一方向からだけ見ても、理解できません。  
自然地理学を専攻してきた植村善博さんは、  
空間だけではなくて、時間軸、歴史軸も見て、  
時空を両方理解しないと地域理解はできない、といいます。  
京の都という特別な位置に存在する鴨川に、  
かつて存在したといわれる〈禹廟〉がなぜつくられ、  
そして消えていったのかという謎解きも、  
時空を読み解くことで、ほぐれていくかもしれません。



### 植村 善博

うえむら よしひろ

佛教学部歴史学専攻歴史文化学科教授 文学博士

1969年立命館大学文学部地理学科卒業、1971年立命館大学大学院文学研究科地理学専攻修士課程修了。1973年から高等学校教諭を経て、1993～1998年佛教学部助教授。2002年博士号取得（文学 立命館大学）。2011年より現職。

主な著書に『京都の地震環境』（ナカニシヤ出版 1999）、『比較変動地形論—プレート境界域の地形と第四紀地殻変動』（古今書院 2001）、『図説ニュージーランド・アメリカ比較地誌』（ナカニシヤ出版 2004）、『台風23号災害と水害環境』（海青社 2005）、『京都の治水と昭和洪水』（文理閣 2011）ほか

### 儒教思想と禹

京都における禹廟の初出は、『相国寺陰涼軒日録』（1488年〈長享2〉）です。鴨川の四条南の松原橋に〈禹廟〉（廟：祖先の霊を祀る所や神々の祠）がある、と出ていますが、残念ながら現存しません。1686年（貞享3）に刊行された地誌『雍州府志』にも2カ所に掲載され、『洛中洛外図』（上杉家本・町田家本）にも描かれています。

ただ、旧五条大橋、現在の松原橋にあったという説に対して、四条橋東詰にあった神明社（現在の南座と仲源寺の間）とする説、四条橋東詰の仲源寺（浄土宗知恩院派。通称目疾（めやみ）地藏として現存）とする説、四条橋東詰大和橋畔の弁財天社と

する説があり、現存しないこともあって、正確な位置は確定できません。

〈禹廟〉をつくったのは、平安時代初期に設置された令外官で、鴨川の堤防修築を司った防鴨河使という役職の中原朝臣為兼（任地から勢多判官為兼（せたのはんがんためかね）ともいわれる）です。

仲源寺縁起には、1228年（安貞2）の鴨川の氾濫時に、為兼は、後堀河天皇の命により鴨川の視察を行ない、川に流された人が地藏堂に取りついて助かった場面に出くわして地藏尊像を安置した、とあります。

為兼は鎌倉時代の人で、武人ではなく博士、学者の系列。御所に仕える学者の系譜で、儒学系の明経道博士という称号を持っていて、儒学の中身に精通している人だったようです。だから禹が彼の頭の中にあつて、自然に治水と結びついたのかと思います。

南の〈禹廟〉だけでなく、北のほうに弁財天をセットで祀っています。私は専門外なのですが、これも中国の儒教と関係するのではないのでしょうか。鴨川の禹廟についていえば、中原為兼が儒学に精通し文献から知識を得て治水神として禹廟を祀ったのではないかと、そういう可能性が高いと思っています。

### 古代・中世の災害意識

京の都では、桓武天皇が794年（延暦13）に行なった平安京への遷都以来1200年間、地震や洪水が何度も起こっています。古代や中世の人たちにとって災害とは、異界からくる恐ろしいもの、神の怒りでした。

災害には水害もあるし、疫病も大きいですね。それから早魃、落雷、火事、地震も怖かったです。こういうありとあらゆる自然災害とか、疾病という厄災は、すべて異界からきた異物なのです。

それらが時々くる。それはもう恐ろしいもので、防ぎようがない。でも防ぎたいから、祈祷をしたり、天や神を敬った。寺院や密教が発展したのは、そのためでもあります。本当は皆、災害忌避なのです。支配階級の人たちにとってみれば、支配するためにも災害は起こってほしくないから、少しでも祈ら天皇は謝るのです。私の不徳の致すところだと。そして、人々にお布施をした。税金を安くするか、食料を配るとか。ひどい場合は元号を変えて縁起をかつく。だから何とかして災害の前兆をつかもうと重用したのが、安倍晴明ら陰陽師です。そして厄災が起



こつたら、坊さんに祈禱してもらって鎮める。その祈禱ということ、天皇から支援を得て発展したのが密教です。

桓武天皇は、政治に介入してきてけしからんと南都仏教を批判しました。そういう桓武にうまく入り込んで信用を得たのは、最澄とか空海とかです。密教はまさにそういう災害思想や儀式を中国で勉強してきているわけです。

### 密教からのアプローチ

禹のことは、最澄も空海も当然学んできたはず。具体的に書いたものもあります。

しかし、遣隋使や遣唐使になって仏教を学びに行った人たちは、民衆の生活とかはあまり考えていなくて、必死に、とにかく仏教とか密教の奥義を極めて、仏教を日本に持ち帰ることで目的なわけです。運が良ければ早く帰れるし、悪ければ20年、30年かかった上に、帰りの船が沈んで命を落とす人もいっぱいいた。そんな中で、最澄も空海も、仏教をもらって帰国してきたラッキーな人でした。

密教の人たちというのは、真剣に災害と向き合ったと思うのですよ。では、密教の人たちが日本に禹を伝えたのでしょうか。確証はないけれど、私はそれはちょっと

違うような気がする。密教の人たちにとって、禹が周知のものであることは事実でしょうが、禹は必ずしも災害神、治水神ではないと思うのです。

特に、清廉潔白な天子。要するに勤勉で、仕事のために頑張ったとか、お酒も飲まないで政務に専念したとかという、そういうものが強く出ているように思うのです。

だから例えば日本書紀では孝徳天皇が、古事記では元明天皇が、禹にたとえられている。日本の禹といわれるぐらい立派な人だったと評価される。清廉潔白で政務に精通して精進する人という意味で禹が使われています。割とそれが続いて、おそらく平安時代中期くらいまでは治水神ではなかった。

だから禹が治水神として伝わってきたというのは、今はまだ、はっきりわからないのですが、別のルートではないかと思うのです。

日本には古代から、別に瀬織津姫のような治水神がいたので、禹は受け入れられていたのではないかと。須佐之男命すさのおののみことだつて水の神として祀られています。神道で広く見られるのが瀬織津姫を祀った神社で、かなりあちこちにあります。神道系の治水神がある中で、禹が入ってくる、ある意味、外来神が侵食してくるわけでしょう。

伝統的な日本神道の治水神と、

外来の新参の文化が地域や流域の中でどういう風に共存しているのか、はたまた反目しているのか。そういう目で禹を見ていたら、面白いかもしれませんね。

### 五条大橋に置かれた理由

松原橋、つまり旧五条大橋に〈禹廟〉ができた理由は、いくつかあると思います。規模まではわかりませんが、水害があったこともきっかけでしょう。

京都の人たちからいうと、鴨川の西側、平安京があり人が住んでいる所は、俗な世界。そして鴨川を渡る東の地区は聖なる世界。だから、お寺がたくさんある。こういう聖と俗という分け方は、かなり明瞭にあったわけです。一つの境界、まさに別世界と境する川が鴨川で、本来は鴨川を越えて、人は住まなかった。これは長い間、守られてきました。

今は東海道で三条が賑わっているけれど、古代はむしろ五条が中心で人の通りが多かった。西側に抜けて行く街道もあるし、清水寺をはじめ、たくさんのお寺に詣でるための信仰の道があつて、あの時代でいうと京都の中で一番人通りの多い橋といえれば五条大橋だったと思います。牛若丸も、まあ、橋はどこでもよくつて、賑やかな



五条の橋を選んだのではないですかね。  
そういう場所に、なぜか理由はわからないけれど、法成寺という安倍晴明にまつわるお寺があると  
いわれているわけです。晴明塚が

あったともいわれている。ここに  
陰陽師の塚とか寺があるというこ  
とは、当時、陰陽師が住んでいた  
地区と考えられます。おそらく、  
〈禹廟〉がつくられたところには、  
既に陰陽師が住んでいたのではし  
ょう。

禹の廟をつくるとすれば、人の  
往来があつて目に触れやすく、陰  
陽師のような集団が管理してくれ  
る場所が都合がよかった、という  
ことです。

## 都の中心が移動して

〈禹廟〉が現存しないのは、必要性が薄れて祀られなくなって消滅した、と考えることもできます。しかしそうではなくて、例えば陰陽師のような人たちが力を失うとか、予兆をつかんで拜むことに価値を見出さなくなった、という可能性もありますね。日本における文革みたいなことがあったのかもしれない。

「鴨川の治水神」(花園大学文学部研究紀要 第32号2000)を書かれた考古学者の山田邦和さんは「豊臣秀吉が陰陽師を嫌って」と書いています。確証がないからわからないですが、そういう可能性もあります。山田さんは〈禹廟〉の存在した期間を室町中期から1633年(寛永10)と推定し、豊臣秀吉による京都改修によって、五条中州にあった法成寺や晴明塚、〈禹廟〉などは取り払われて、姿形を変えて四条に移った、と考えられています。

少なくとも、目に見える五条大橋の下なり、中島にあった〈禹廟〉は消えるけれど、でもその後継みたいなものが神明社であり、目疾地藏に姿を変えて、四条に移っていくんです。古い地図で見ると、神明社は仲源寺の境内の一部にあ

ります。今は残っていませんが、おそらく移った当初は禹の後継としてあったのではないのでしょうか。

人が通る目立つ場所が北に移動して、京都の町全体の構造が五条中心ではなくて、四条中心に変わったことに対応して移っていくのです。人が集まり、人が一番賑やかな所。そこにやはり禹も寄ってくるのですよ。人が好きなので。だから私は、秀吉に潰されなくても自然に移ったかもしれないと思っと思っています。むしろ人目の目立つ所へ行きたがって、四条にきたのではないか。そういう風に、私は逆転して考えてきたのです。

来るべき時と所に、禹は出てくるな、と。まあ、そういう意味では、今、みんなが集まって、禹に再びフォーカスするということは、災害の神が求められていることなのかもしれないですね。

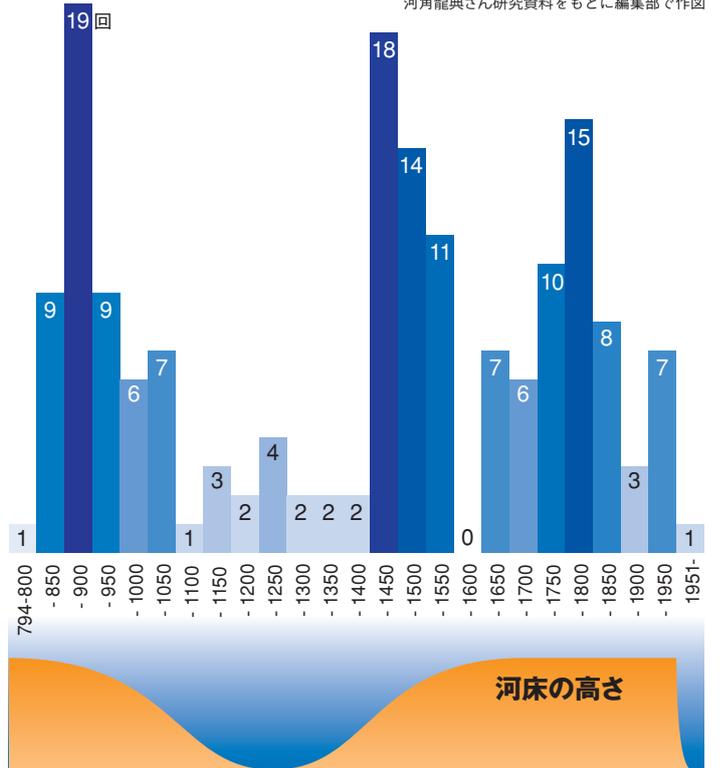
## 地殻変動でつくられた 京都盆地

私は自然地理学を専攻していますが、空間だけではなくて、やはり時間軸も歴史軸も見て、時空を両方理解しないと地域理解はできない、というのが持論です。

時空の理解には史料解説が基本的なことですが、空間は地図を見ることで理解が進みます。

# 1200年間の鴨川の河床高と洪水頻度

植村善博著『京都の治水と昭和の大水害』(文理閣2011)掲載の河角龍典さん研究資料をもとに編集部で作図



**河床の高さ**

1935年(昭和10)の京都大水害を受け、大規模な浚渫改修工事が行なわれた。

谷が砂礫の堆積により埋められて天井川化し、再び氾濫が発生しやすくなった。

鴨川の下方浸食が進み河床が低下し谷をつくったため洪水が波及しにくくなった。

平安京建設に伴う森林の伐採や温暖期の多雨の影響が考えられる。

京都盆地の地図を見てください(22ページ)。西も東も北も山地に囲まれて、南だけ開けている盆地です。この盆地の境には活断層があります。京都盆地は囲われている。数千年や、数万年に一回地震が起こって、その度に山は1mぐらい盛り上がるし、盆地は1mぐらい盛り落ちる、というようなことを繰り返してきて、大きな骨格ができたのです。こういう盆地を、変動盆地といいます。地殻変動がなければこの盆地も存在しませんでした。これは京都に限らず、近畿地方の内陸にある南北に細長い盆地

はすべて同じ起源を持っているのです。大阪平野、近江盆地、奈良盆地、三重県の伊勢湾とかね。それで鴨川の流路が西から東へ徐々に振ってくるのは、地殻変動に拠るところが一番大きい。活断層に囲まれているといったけれど、東側の花折断層のほうが大きいのです。そのために盆地の底が花折断層のほうに向かって、どんどん傾きながら下がるんです。

だから川は南東へ滑っていく。地殻変動が続く限り西から東へと低い方へ下がってくるとい傾向があつて、鴨川が今一番低い所に

きているのは、理に適った位置にあるということです。

**履歴が残る鴨川**

京都には東側は鴨川、西側は桂川という大きな川が2本流れていますが、桂川は自然堤防を形成した蛇行河川、鴨川は扇状地河川で性質がまったく違います。ですから、そこにつくられた地形も違いますが、川が洪水を起こした場合の災害の在り方も違うわけです。その辺から京都のことを理解してもらう必要があります。

京都の町の歴史からいうと、西は農業地帯だから、あまり人が住まっていなかった。だから桂川は記録も少ない。

古い扇状地で地盤が硬く安定していた中央部に平安京が設定されたのですが、右京の西側には、蛇行河川である桂川が、しょっちゅう洪水を起こす場所を広く取り込んでいたのです。

だから右京は早い時期に衰えていって、平安京の道もすぐに土に埋もれて、やがて水田になっていった。右京が早く衰退した分だけ、住居と人口は鴨川を越えて東へ東へと移動を続けている。

鴨川には、平安京以来ずっと川辺に人が住んできたから、さまざまな記録が残っています。

**水害の頻度とその理由**

水害を1000年スパンで見ると、もう一つ別な話をしましょう。鴨川の水害というのは、ずっと同じ頻度ではなくて、多い時期と少ない時期が繰り返しているのですよ。河角龍典さんという人がちゃんとデータを出しています。

平安時代は水害の頻度が高かった。鎌倉から室町ぐらいまでは割と少なくて、安土桃山ぐらいからまた増える。これは鴨川の洪水を考える場合には非常に大事なことです。

だから鴨川の禹の話も、こういう時代の中でどんな位置にあるか、考える必要があります。場所の特定だけではなく、時代性の中でとらえる必要があると思います。

平安時代に水害が多いのには、諸説ありますが、私は平安京をつくるときに周辺の森を伐採したことが一番大きい理由だと思っています。

当時、材木を集めた範囲は、京都北部の丹波の山地であることは記載にあることです。

主たる理由は、山の森林の乱伐。そのため、瞬間的に大量に水と土砂が流出してくるという状況になる。洪水が起こるのは平均雨量ではなくて、その頻度と強さ(集中度)が大事になります。

日本の場合、梅雨もあるけれど台風が大きく支配しているので、史料をそこまでくわしく分析するのは難しいのですが、台風の襲来頻度が重要になります。

のほとんどの川で、そうだったといわれていきます。

その理由は、気候が寒冷化して、海面下がったということも影響しているでしょう。今まで川は土砂を運んで堆積していたのが、海面下がったことで、川は浸食に変わって川底を掘り込むのですよ。だから段ができる。そのため川が少々あふれても段丘の上には氾濫しないことが多くなるので、中世は洪水が少ないのです。

## 土木技術の向上と天井川

秀吉時代から再び洪水が増えます。人口が増えたことと、秀吉は土木魔で、橋はつくる、城をつくる、新しい都市を造成するなど、大土木工事をガンガンやります。これも相当に乱伐・乱開発したようなことがあったと思います。

それで、人口が増えると、やはり山間地を開発して新田や新畑をつくる。木が茂っている所や山地斜面を切り開くと、どうしても土壌の流出が増えて、谷底に礫や砂が溜まりあふれやすくなります。

今度は、それを守るために堤防をつくらうとする。技術が向上して、強い堤防がつけられるようになると、堤防と堤防の間(堤外)だけに川の氾濫が限られてきます。すると、ますます河床が上がる。そ

れでまた、堤防をかさ上げする、といういたちこっこで天井川ができました。黄河も、何千年かにわたって堤防を固定しようとしてきたから、天井川になったのと同じなのです。

近畿の天井川っていうのは、このようにして17世紀から18世紀の間にほとんど全部できてしまう。何百年もかかったのではなくて、100年ぐらいいで、あつという間にできた。それは人間と自然の共存と対立の関係だと思えます。

## 守られてきた鴨川

水害の頻度が一番上がったのは、やはり幕末、明治維新期、近畿ではほとんどの川で、幕末から明治維新期がピークになります。1800年代(19世紀ごろ)から、ガーンと一気に増えています。

ところが鴨川はあまり、傾向が明瞭ではないのです。それは、江戸時代から、幕府が京都所司代などを置いて、人民支配のために川への対策と工事を行なってきたからです。

やはりどうしても天皇のお膝元であり大きな町だったので、桂川、鴨川の改修は幕末でも力を入れてやっていたのです。京都を治めるというのは幕府にとって大事なメンツでもあって、大きな改修をや

ったと思うのですが、その一番典型的なのは寛文の改修、寛文新堤の建設といわれるものです。これは今でも部分的に残っています。

寛文新堤  
1663年(寛文3)の洪水で、大きな被害を受けたのがきっかけとなって、1670年(寛文10)につくられた石堤。以降、左右に河原が広がる自然河川だった鴨川の流路が固定され、現在の鴨川景観の基礎がつけられた。

鴨川は、当時、1kmもの広い幅を持つ扇状地河川。鴨川が細いのは、堤防で川を閉じ込めて、少しでも人間が住む場所をつくらうと土地利用をより効率的にしていた結果です。都市域で被害が大きいと予想される所は、どうしても堤防で守る、ということになる。

逆に農村地域だったら、堤防をつくるような投資をするよりは、霞堤とかで守って、むしろ水が流れ込むことを歓迎する。霞堤でなくとも竹林を配置してもいいわけです。農村にはむしろ水を受け入れられるという、洪水受容型の考えが見られるのです。地力を回復するために土を更新してくれるという風に考えれば、あふれることは否定材料だけではありません。

また都市域が農村かという問題だけではなくて、河川のコントロールは、権力者が権力を誇示するための道具であり、支配の手段なのです。

秀吉が土木好きだということのも、

人々を納得させるために洪水を防いで、貸しをつくる支配のため。人民の生活に直結するから、すごい支配力を持ち得たのだと思います。太閤様といわれるのは、まさにそういうことでしょう。弘法様(空海)が有名なのは、香川県などで各地で池をつくって、早魃を防いだからです。人民にとっては、自分たちに最も大事なことをしてくれたかどうかということ、英雄にもなるし、信仰にも結びついてくるのです。

雨季の水は激しく、大量に流れる。ところが雨が少ない冬になると、扇状地河川である鴨川は、河底が全部砂利だから水はザルみたいに地下へ浸透していく。おそろしく水はあるかないかというくらい川原だったと思います。

それを人工的に浸み込まないようにしたのは、明治以降の河川改修によります。1935年(昭和10)の水害の後には、床張りという工事が行なわれました。川床にいろいろな材料を入れて地下に浸み込まないようにして、水が維持されている。それがなければ大半の水はもっともっと地下へ浸み込んで、水量は少ないだろうと思いますよ。

## 戦後の京都治水

京都、特に鴨川の特異性が顕著

に現われたものに、十五年戦争直前期1935年(昭和10)の大水害と治水計画があります。

軍備増強のために国債を発行することによって軍事資金を集めるのですが、鴨川の改修予算はその中に含まれて通るのです。京都の治水は、そういう軍国主義の進行という時代的な制約を背負っているのです。高橋是清が大蔵大臣のときには半分くらいしか国家予算を回さないとやっていったのを、説得している内に高橋が二・二六事件で暗殺されてしまった。そこで軍備増強と一体になって、京都の治水予算が認められたのです。

戦争中にも2回くらい洪水があつて堤防が壊れたりしますが、そういうものは国のお金で補修しています。やはり京都は帝都という暗黙の了解があるのと、こういう非常事態だから川を放っておいたら国民の戦意を喪失するからと、京都に金を回して、川を改修させたのです。金を取ってくる大義名分は天皇陛下のお膝元、帝都です。

しかも、懸案の都市計画も一緒にやっ飛ばさないと考えた。少し欲張っていたのです。疎水を埋めて道路を通し、京阪電車を地下鉄化しようとかね。そういう都市計画や景観の問題まで含めて改修事業をやろうとしていたので、予算が膨大に膨れ上がった。



四条大橋のそばに現存する仲源寺には、目珠地藏尊が祀られている。顔が判別できないほどすり減っているのは、何度も水害に遭遇したからだろうか、との思いが湧いてくる。



こういう経緯のち、1938年(昭和13)に鉄の供給がストップして地下鉄は完全に挫折してしまっています。全部完結させるべきだったのが、社会が変化したために完全には実施できなかった。

単に川だけを見るのではなく、こういう川と人との歴史を知ること、川の有り様を理解する上で大切なのです。

### 災害の記憶を学びとして

確かに1935年(昭和10)の、大水害以降、鴨川に関していうと、大被害を出すような水害は一度も起こっていない。昭和10年の大水害の治水事業というのは非常に大きな、決定的な役割をしていると思います。

1935年(昭和10) 京都の大水害  
6月の豪雨により、鴨川から水があふれ死傷者12名(桂川や天神川など他河川の洪水も含めた京都市全域では83名)を出し、家屋や橋梁が多数流失するなどの大災害となった。

### 鴨川改修

1935年(昭和10)の洪水を契機として、翌年から1947年(昭和22)まで、抜本的な河川改修を実施。最近では「花の回廊」整備(三条から七条間)、通水能力の低い陶化橋付近の河川改修などを計画的に進めた。

しかし河道計算の結果、まだ危険な場所がいくつか残っている。だから、鴨川は安全だと考えている人はいないし、起こるとすれば、この辺で起こるであろうという場

所もわかってはいるわけです。

ゲリラ豪雨による内水氾濫、要するに河川が溢れるのではなく、支流や下水・排水溝があふれるという形で氾濫が起こるといふようなことも一番心配されています。京都でも内水氾濫が、真剣な課題になっていて、地下鉄とかビルの地下街や地下駐車場の浸水被害が心配されています。

危険であることはわかっていますが、どうやって防ぐかという方法がなかなかなくて、運動場とか公共施設の地下に貯水タンクをつくらうてい間には合わないと思います。それで私は、どうしたら市民が水害の危険を自覚するか、について考えています。

鴨川が今のように美しい川になって、京都のシンボルにまでなったのは、自然になったわけじゃない。1935年(昭和10)の治水事業というのがあったからこそ、今の京都の鴨川があるということを知らないといけない。どこで堤防が切れたのか、どこの場所に、どんな工事をしたのかというのは、記録に留め、市民が知っておくべきです。1935年(昭和10)の水害と改修事業を記念するもの、河川改修事業完工の碑など、戦時下の影響でまったく存在していません。

### 災害と恵みの装置

川を怖がりたり災害の話が中心ですが、でもそれだけではなく、やはり京都の水、川っていうのは、京都の文化を支えてきた。京都は鴨川の水があったからこそ、茶道が起こったのだろうし、酒も、豆腐といった食文化も同様です。友禅という織物だって、川のきれいな水で洗ってこそ色が出るというわけなんです。

まさに京都のいろいろな伝統文化は川、特に鴨川の水にかかわっている。それなのに京都には自然系の博物館が一つもないでしょう。歴史や文化財を展示する博物館はたくさんあるのに。

やはり川の災害と恵みをしっかりと理解してもらうための装置として、鴨川博物館なり治水展示館が必要なんです。

災害史という立場からいうと、津波や地震の記念碑や慰霊碑はたくさん存在してその意味がある。それらに近いものが、水害における禹廟です。まだあまり注目されていないけれど、これは重要なシンボル、そして文化財になり得ると思います。

取材：2011年12月6日



# シリーズ里川 片品村五千人の心意気



千明 金造 ちきまさきんぞう

群馬県利根郡片品村村長

1948年群馬県片品村生まれ。片品村消防団長、片品村議会議員を経て、2005年から現職。

## 片品川の氾濫

片品村は、群馬県の北東部の県境に位置し、北は新潟県と福島県に、東は栃木県に接しています。周囲を山に囲まれ、火山群の活動によってできた湖沼や湿原が多く点在します。尾瀬沼南方と鬼怒沼山(2141m)西方に源を發した片品川が深い河岸段丘を形成し、その周囲に集落が發達しました。

片品川は、支流の箕科川や塗川、大滝川と合流して、沼田市の南で利根川に注ぐ、長さ約61kmの川です。この片品川に箕科川が合流した辺りは、谷あいからの流れが平野に開けた、古仲という地区です。その古仲地区に、中国の响嶼碑とほぼ同じ碑文が刻まれた「大禹皇帝碑」が、1874年(明治7)に建立されました。

### 响嶼碑

湖南省長沙市の何致という人が1212年(南宋)に地元庶民の案内で、石壁の上に刻まれた文字を確認。何致は禹王碑であると確信して、長沙の岳麓山に復刻。時代は下り、明代の長沙太守の潘鎰という人物がこれを写した碑をつくり、中国各地(雲南・大理/四川・北川/江蘇南京/栖霞山/河南・禹州/陝西・西安碑林/浙江・紹興/湖北・武漢)から出土している、といわれている。これらの話は不確かな伝承とされているが、近年研究が進み、越の朱句による刻石(前456

年)で、信仰の山である湖南省の南嶽衡山の祭祀の文章であるとする説が発表されている。

1963年(昭和38)に書かれた村史には、大禹皇帝碑のことが載っていますが、残念ながら学校で教わるということはありませんでした。碑のそばの片品北小学校には拓本があつて、中国の偉い人のことが書いてあるといわれていたそうです。ある年代までは「禹王様」と呼んでいたそうですから、ちゃんと教えられていたのかもしれない。

早稲田大学に問い合わせたこともありましたが、特殊な文字ですから専門家の間でも見解が分かれたそうです。中国で聞いたところによると、あれは書いた人が独自の表現をした文字だということですね。ですから、本人でないとな当の意味がわからないでしょう。時代背景としては、水害だけじゃなくて凶作もあったんです。日光白根山の噴火が起き、天明の飢饉と呼ばれた時代。食べるにも困って、あげくの果ては間引きという悲惨なことも起きた。当時の沼田の殿様が、これは人道上良くないことだからやめるように、といったという古文書も残っています。

片品が属する沼田3万石は独立した藩ではなく、松代藩の分領(分地)だった。1656年(明暦2)沼田領は松代藩から独立して正式に沼田藩となり、真田信利が初代藩主と



上と下右が片品川・古仲の大禹皇帝碑。下中・左が、中国・紹興の会稽山の  
 鉤嶺碑。非常に特異な書体だが、両者は酷似している。拓本で伝えられたの  
 かもしれない。



なったが、悪政を敷いたため改易となり廃藩  
 天領となった。代わって本多正永が入り、再  
 び沼田藩が立藩、黒田家を経て、土岐家の所  
 領となる。

片品は尾瀬沼を背後に控え、水  
 が豊富です。戸倉は谷が深いので  
 水害には遭わないんですが、古仲  
 にきて一気に土地が開けるので川  
 の水が広がって水害が起きる。し  
 かも片品川と笠料川が合流して水  
 量も増えます。

毎年のように田畑を流されて、  
 年貢を納めるのもままならない状  
 況でした。田畑が流されるといつ  
 ても、ほかは傾斜地ばかりで田ん  
 ぼはつくれませんから、また土を  
 盛ってやるしかありません。

その繰り返しだったから、星野  
 という地元出身の関守の一族の菅  
 市郎さんという人が、水害を治め  
 るための碑を建立しようと一大決  
 心をして、会津の藩校の親章先生  
 (姓は不明)に大禹皇帝碑の碑文を  
 書いてもらいに行った。私のお袋  
 は古仲の出身なので、私の先祖も  
 菅市郎さんと相談し合った一人だ  
 と思います。地元の人たちに働き  
 かけて、みんなが協力することで、  
 何年もかかって石碑建立を実現さ  
 せています。

関東以北の最高峰である日光白  
 根の2578mをはじめとして、  
 2000m超級の山々に囲まれて  
 います。しかもそれらの山が全部  
 火山系。山が急峻で表土が浅いか

ら、降った雨がすぐに流れ下るん  
 です。菅市郎さんの意に反して、  
 それ以降もたびたび水害に見舞わ  
 れています。古仲が近代土木技術  
 で守られるようになるには、ごく  
 最近まで待たなければなりません  
 でした。

### 高低差を用いた水力発電

片品川は水害も引き起こしまし  
 たが、プラスの資源でもあります。  
 実は片品村には七つの水力発電所  
 があって、日光白根水系に丸沼、  
 一ノ瀬、白根発電所と三つ。次に  
 戸倉、その下に栓ノ滝、鎌田。鎌  
 田発電所というのは、片品川と大  
 滝川の両方の水を集めて使ってい  
 ます。そして幡谷で七つ。

普通、水力発電所というとダム  
 を想像されるでしょうが、ダムで  
 はなく導水管で持っていくって、落  
 差を利用して発電しています。い  
 ったん落とした水で7回も発電し  
 て、沼田市利根町に持って行って  
 もう一度使って、最後は吹割の滝  
 の所で川に戻しています。川の水  
 が少ないように見えるのは、導水  
 管で引っ張っているからなんです。

片品村の七つの発電所で、6万  
 4000世帯分の発電をしています。  
 仮に1世帯が1年間に10万円  
 分の電気代を払っているとしたら、  
 東京電力は片品川で64億円の利益



橙色は発電所名。同じ水が導水管で繋がれているいくつかの発電所を經由している。  
 国土地理院基盤地図情報(縮尺レベル25000)「福島、栃木、群馬、新潟」及び、国土交通省国土数値情報「河川データ(平成19年)、行政区域データ(平成22年)、観光資源データ(平成22年)」より編集部で作図

を得ていることになりました。今の発電所はまったく無人でできますから、無人で、自然エネルギーで、365日、半永久的に発電しておよそ64億円もの利益を毎年生み出すんです。これは、片品川が生み出してくれる大きな恵みです。東京電力は、利益の一部を環境保全のために使っています。

### 被災者千人を受け入れる

東日本大震災の被災者支援で一躍有名になりましたが、最後の一人が9月29日に帰られて終了しました。

片品村は、上尾市や蕨市と防災協定を結んでいるんです。それで震災が起きた当日に、担当課長に、上尾市と蕨市と日光市に被害がなかったか確認させました。

ここは表土が浅くて岩盤なんで、2009年(平成21)に内閣府が発表した地震マップで見ても、強いんです。30年以内に震度6以上の地震がくる確率というのが0.1%程度なんです。と言いますのも、地震を経験した人たちが避難先でまた地震に遭うというんじゃない気の毒ですから、ここだったら安心して生活してもらえろという確信があった。それとここでは計画停電もないということもわかった。

それで3月14日の朝、いつもの散歩コースを1時間歩きながら、どういう風ならやれるか、頭の中で組み立てたんです。

私が村長に就任した6年前は、この村の財政も破綻状態。それを2011年(平成23)3月の時点でプラスにした。村長の手当ても群馬県内の35市町村中一番低く抑えさせてもらっている。だから、1億円を使って被災者を受け入れさせてもらっても文句は出ないだろう、と。それですぐに幹部会議を開いて1000人を1カ月間受け入れる、と申し出ました。

私は最初から、被災者を体育館なんかに入れてるつもりはなかったんです。それで民宿旅館連合会長のところに話を持っていき、それから県庁に向かいました。

私が安心したのは、そんなことをしている矢先に「被災者に何かしてあげたい」と相談が携帯電話にどんどん入ってきたことです。そういう声に後押しされて「もう、その方向で動いているから」と答えました。

被災されて来られる人たちのほうは、「群馬のそんな所までは」と言っ、なかなか決まらなかつたんですが、原発事故の避難勧告で、17日に双葉町から2000人、南相馬から1000人の受け入れ要請がありました。さすがに3000人は無理ですから、福島県庁



右ページ：片品川流域図。落差を生かして、小水力発電所が何カ所もつくられている。

左ページ：村営の〈花咲の湯〉には、温泉とレストランと土産物屋が。レストランの厨房では、地元の主婦が腕を奮い、地場産品を中心に心のこもった献立を提供している。普段は椅子席だけだが、冬になるとコタツが2組入り、ゆったりとくつろぎたい人に大人気。



に調整をお願いし南相馬の1000人を受け入れることになり、18日には23台の大型バスが到着し、938人が来村されました。

翌日からは、実際に問題が出てくるわけですよ。一番は、医療、薬の問題なんです。しかも19、20、21日が連休だった。村に一つの医院にあまり大勢押し掛けたんで、19日の午前中で薬がおしまいになってしまった。それで隣村の医院にまでお世話になりました。運が良かったことに、その医院のご夫妻が阪神淡路大震災の被災者だったから、よくしてくださった。

もう一つは燃料不足。ボイラーが焚けなくなる事態が発生しました。しかし、沼田のJAがなんとかしてくれました。その内、ボランティアも動き始めてくれて。

いろんな問題が起きましたが、職員に最初から「マニュアルがあつてやることじゃないんだから、どんなことが起きてても恐れるな」と発破をかけたんですよ。よく言いますが、火事場の馬鹿力。みんなやる気を出してくれて、乗り切ることができました。

### 文化遺産に目覚めるきっかけ

寄付を申し出てくれた人がガソリンスタンドの人だったんで「今は金より燃料のほうが有り難い」

と言って、灯油を給食センターと保育園に寄付してもらったりしました。民宿旅館の組合も六つあって、最初は45軒、最終的には90軒強の宿泊施設が受け入れてくれました。こういうことも、小さい村だからこそみんなが顔見知りで行えたことかもしれません。5000人の村で10000人の被災者を受け入れたと、全国から励ましや共感のメールをいただきました。私はそれを全部取っただきまです。が、この村の宝です。

避難された方と宿の人との、今でもおつき合いが続いているようです。2012年(平成24)8月開催の名水サミットや10月開催の尾瀬片品禹王サミットにも、是非来ていただきたい。

片品っていう村は、もともと人情が厚いところなんです。茅葺き屋根の屋根替えなんていうのも、村中総出でやってきた。それは厳しい自然環境が育んでくれたことかもしれません。今までは尾瀬やスキーといった自然資源に頼る部分が大きかったのですが、大禹皇帝碑は全国でも貴重な文化遺産。歴史や文化を再発見することで、片品の住民が地元を誇りを持ってくれたら、と思います。

取材・2011年11月14日



## 不思議な石〈大禹謨〉

香川県・高松の栗林公園の商工奨励館という建物の中庭に、「大禹謨」と彫られたこぢんまりとした石があります。大それた石碑というのではなく、穏やかな丸みを帯びた自然石です。この〈大禹謨〉が、今、注目を集めつつあります。

**大禹謨**  
『書経』中の「大禹謨」という問答集の題名。一般に「偉大な禹のはかりごと（政策）」と解されるが、謨には「はかりごと（政策）」という意味と合わせて、「君主に対する臣下の言」という意味がある。『書経』中の「大禹謨」は後者の意味の内容になっている。

大禹謨っていわれても、一般人にはわからないですよ。大はわかるけど、禹も謨もわからない。

それを教えてくださったのが禹王碑探求家の大脇良夫先生です。それまでは、全国各地にそんなたくさん禹を祀ったものがあるなんて、ちっとも知りませんでした。大脇先生にいろいろ教えていただくことによって、一つの石が、他の地域とのつながりがあるものだということがわかって、うちの〈大禹謨〉には、すごい力があるんだと気づきました。

## 西嶋八兵衛、讃岐に派遣される

西嶋八兵衛之友（1596～1680年）  
遠州（現・静岡県）浜松で生まれる。名は之友。八兵衛は通称。17歳で伊勢の津藩主藤堂高虎に仕えた。水利、土木、経済、書道に優れた八兵衛は、高虎の命で1625年（寛永2）～1639年（寛永16）の14年間讃岐に住んで、讃岐高松藩生駒家の領国経営に参画した。讃岐の実状を高虎に報告し、長期的視野に立った溜め池の改修や築造、香東川（こうとうがわ）の東流を締め切って、西流一本にする大規模な治水事業に取り組み、新田開発を実現した。讃岐を離れてからは、城和奉行や伊賀奉行を務めた。

西嶋八兵衛をつくったのは、西嶋八兵衛之友という治水家です。

讃岐（現在の香川県）は藩政が奮わない上に、地震や干ばつなどの災害が相次いだため、伊勢の津藩主である藤堂高虎は、家臣の西嶋八兵衛を讃岐建て直しに遣わしました。

物語の舞台となった高松は、いわゆる難波津や奈良、京都にも近く、瀬戸内海を使って西から攻めてくるのを監視する西日本の要所です。1587年（天正15）生駒氏が入封、香東郡野原郷に城を構え、高松と命名。生駒氏は秀吉の朝鮮出兵にも参陣し戦功を上げた大名で、守りの重要性を意識しての拜

領でした。そのころの高松は野原と呼ばれており、港町として栄えていたようです。

生駒家3代目の正俊は、津藩主藤堂高虎の娘を正室にしました。高虎が出家して高野山で隠棲したのを、秀吉の使いとして初代の生駒親正が説得し、下山させたという因縁もあります。正俊が亡くなったときに嫡男の高俊が幼少だったために、高虎は外戚の祖父として後見人となるなど、津藩藤堂家と高松藩生駒家は関係が深かったのです。

# 大禹謨発見の

## ドラマ

高松・栗林公園と西嶋八兵衛



古川 京司

ふるかわ たかし

香川県栗林公園観光事務所長

1958年生、香川県高松市出身。1984年、大阪大学法学部卒業後、香川県入庁。瀬戸内国際芸術祭推進室等を経て、2011年4月より現職。



湯水で取りざたされること多い香川県・高松ですが、市内を流れる香東川は、扇状地の暴れ川で伊勢・津藩から派遣された西嶋八兵衛によって治められました。そのときに記念として建立された〈大禹謨〉が、流転の運命の末、栗林公園内に鎮座しています。香東川の旧・河川を生かした庭園であり、高松藩12万石の傑作といわれる栗林公園が、〈大禹謨〉安住の地になるまでの軌跡を追います。

## 西嶋八兵衛による香東川の締め切り

香川県は降水量が少なく、47都道府県中、最も面積が狭い県であるにもかかわらず、全国の溜め池の1割があるといわれるほど、溜め池に頼ってきました。

西嶋八兵衛は、溜め池の基盤整備に取り組み、1184年(元暦元)以来、決壊したままになっていた満濃池(まんのう町)を4年がかりで復旧。龍満池(高松市香川町)、小田池(高松市川部町)、山大寺池(三木町)、三郎池(高松市三谷町)、瀬丸池(三豊市高瀬町)、亀越池(まんのう町)、仁池(丸亀市綾歌町)など、わずか数

年で九十余りの溜め池の築造・改修を行ないました。

生駒家が高松城(玉藻城)を築城した当時、香東川は大野郷(高松市一宮団地付近)から二股に分かれ、東の流れが城下町付近を通っていましたが、堆積した土砂で川底が浅くなったため、雨が降る度に洪水を起こしていました。

香東川というのは、香川県中部を流れ、延長3万2989m、流域面積113.2km<sup>2</sup>の二級河川です。奥山にある樺川という里に香り高い樺の古木があったために馥郁とした香りの水が流れた、という伝説からこの名がついたといわれ、県名の由来にもなっています。

す。

八兵衛は香東川の東流を締め切つて、西流に一本化。東の旧流路付近に新田開発を行ないましたが、この工事は想像以上に大変で、締め切った下流地域では長期にわたって伏流水が湧き出たそうです。ちなみに、この地方では湧水のことを出水と呼んでいます。

さて、香東川の締め切りを成功させた八兵衛は、安全を祈願して〈大禹謨〉と刻んだ石を鎮齋しました。時期は特定されていませんが、八兵衛が滞在した14年間の半ばではなかったかといわれ、場所は香川町善海辺りと考えられています。

しかし、1640年(寛永17)重臣の争いに端を発した生駒騒動が起こり、讃岐生駒家は出羽国由利郡矢島(現・秋田県)に改易になりました。

西嶋八兵衛は、水不足に悩む讃岐に、満濃池をはじめ、たくさん溜め池の築堤や改修を行なった恩人です。多大な貢献があったにもかかわらず、やはり生駒家の時代の人なので、その後そんなに評価されてこなかった。それもあって、〈大禹謨〉のことは、長らく忘れられた存在になっていたのです。

私も小中高と香川県出身なのですけれども、小学校で西嶋八兵衛

のことを教わった記憶がありません。正直言うと、栗林公園の仕事を始めてから初めて知ったくらいです。ただ、今は自分たちが住んでいる所をちゃんと勉強しようという風潮が強くなってきているので、小学校の教科書にも載っていて、何をしたかということがちゃんと書かれています。

## 大禹謨発見のドラマ

西嶋八兵衛も〈大禹謨〉も、すっかり忘れられていきました。時代は下って1912年(大正元)、香東川で大洪水が起こり、上中津の堤防が決壊してしまいます。そ



上：栗林公園内の商工奨励館中庭に安置された〈大禹謨〉。西嶋八兵衛の筆跡であるといわれている。商工奨励館は、1899年（明治32）につくられた唐破風の建物。漆器をはじめとする県内産品を展示即売している。  
下：県立香川中央高校そばにある〈中津の薬師堂〉。一時、〈大禹謨〉はこの横に安置されていた。今置かれているのは、〈大禹謨〉のレプリカだ。



の冬に県が施工した川普請の際に、なんと埋没していた〈大禹謨〉を大野中津の住民が偶然、掘り起こしたのです。ただ、そのときには字が彫ってあることに気づく者はいませんでした。

あとになって川原栄吉さんと宮武彌八さんという二人の若者が文字に気づき、知人の平木幸助さんとも相談して、右岸の旧・安原街道の薬師如来の隣に安置することにしました。

この〈大禹謨〉発見から間もなく、香川県内で西嶋八兵衛顕彰の機運が盛り上がり、なんと死後235年も経った1915年（大正4）、香川県からの申請により、正五位

に追贈されました。三重県庁で、子孫の方に授与されています。

〈大禹謨〉発見のドラマはまだ続きます。元・四番丁小学校校長だった平田三郎という人が、大野折口に疎開して『一宮村史』を調査しておられたのですが、1945年（昭和20）終戦になってから、川部橋北300m右岸にある河畔の草むらで、ふと目を留めました。そこに埋もれていた石に〈大禹謨〉と刻まれていたのを発見したので

す。川普請で見つかった〈大禹謨〉は、いつの間にか再び顧みられなくなっていたんですね。

興味を持っておられたので、この三文字が示す意義に気づき、写真に撮って西嶋八兵衛終焉の地である伊賀上野の市長に筆跡鑑定を依頼。三重県郷土史の権威である村治円次郎さんから、「西嶋八兵衛の筆跡に似ている」との回答を得ました。

平田先生が勤務した四番丁小学校は、奇しくも讃岐生駒家の菩提寺である龍松山法泉寺の真向かい。平田先生が1956年（昭和31）に亡くなってこの事実は忘れ去られそうになりましたが、やす夫人が平田先生の友人で西嶋八兵衛研究家の福家惣衛さんに遺稿を渡したことで、「治水の神を祭る民族」

（『新香川』1958年（昭和33）2月号）として発表されました。

県立香川中央高校の西側を北に進むと、野球のバックネットの裏辺りの道端に、南に向けて〈中津の薬師堂〉〈大禹謨〉〈牛の墓〉が三つ、今でも仲良く並んでいます。でも、この〈大禹謨〉はレプリカ

で、本物は栗林公園にあります。面白いのですよね、お話だけではなく、一つの石が〈モノ〉としてあり、こんないろいろな石がこんないろいろな価値を持っているなんて。

あれだけ石がゴロゴロしている中で掘り起こされて、「石に何か字が彫ってある」って見つけられ

るのも奇跡的ですし、それをまた平田先生が「おお、これは！」って再発見する…なんていう奇跡が何回も繰り返されて、運命的にここに安置されているのです。

### 〈大禹謨〉 栗林公園に遷座

では、薬師如来の隣にあった〈大禹謨〉が、なぜ今、栗林公園にあるのでしょうか。

それは元・栗林公園所長の藤田勝重さんの尽力によります。1961年（昭和36）〈大禹謨〉の存在を知った藤田さんは、伊賀上野に在住する稲住佳生さんに再度、筆跡鑑定を進めるように依頼しまし



た。西嶋八兵衛の子孫を訪ね、伊賀上野に赴いて西嶋八兵衛の真筆を自分の目で確かめるなど、精力的に活動しました。村治円次郎さんによって真筆との鑑定を得た藤田さんは、帰途、伊勢神宮に立ち寄り、神宮文庫で《大禹謨》の典故を『書経』(尚書)に見出します。

藤田さんは、こうして《大禹謨》がいかに貴重なものであるか確認していききました。そして、香川町

教育委員長の二川一美さんに、もう二度と《大禹謨》が見失われなように、適切な保全をお願いしたんです。

安住の地の条件として、香東川に因む場所であること、老若男女

たくさんの方の目に触れること、などもありました。こうして1962年(昭和37)7月7日、《大禹謨》は栗林公園内の商工奨励館の中庭に遷座しました。2012年(平成24)は、《大禹謨》が発見されて100年、遷座して50年の記念の年にあたります。

### 高松藩12万石の最高傑作

栗林公園を誰がつくったのかというの謎ですが、西嶋八兵衛の讃岐時代のことがわかってくれば、そういった謎にも迫っていけるのではないかと期待が高まります。

もともとは元亀、天正のころ、

当地の豪族佐藤氏によって西南地区(小普陀付近)に築庭されたことに始まるといわれます。その後、寛永年間(1625年ごろ)讃岐高松藩主生駒高俊公によって南湖一帯が造園され、1642年(寛永19)生駒家に代わって高松に入封した松平頼重公(水戸の徳川光圀公の兄)に引き継がれました。

栗林公園は、5代藩主頼恭公に至る百余年の間、歴代藩主が修築を重ねて完成されたもので、いわば高松藩12万石が残した最高傑作。明治維新まで228年間にわたり松平家11代の下屋敷として使用されました。

紫雲山を背景に、六つの池と13

の築山が《一步一景》といわれる変化に富んだ情景を生み出しますが、豊かな出水は、西嶋八兵衛が締め切った香東川の東流跡であることを物語っています。

西嶋八兵衛はもちろん、讃岐だけでなく活躍された人ではありません。もともとの拠点は伊賀上野ですし、小堀遠州とも姻戚関係があるというので、江戸の庭園づくりでも一緒に仕事をされています。

小堀遠州(1579~1647年)  
本名は政一(まさかず)。遠州は、武家官位の遠江守に由来する。安土桃山時代から江戸時代前期にかけての大名、茶人、建築家、作庭家。備中松山藩2代藩主、のち近江小室藩初代藩主。

父正次は、浅井長政の家臣であり縁戚でも

あったが、浅井滅亡後は羽柴秀吉に取り立てられ、秀吉の弟秀長に仕えた。大和国郡山移封に伴ない、秀長は山上宗二や千利休に師事。政一も小姓として影響を受けた。秀長と嫡子秀保の没後は秀吉直参となって伏見に移り、古田織部に茶道を学ぶ。

私たちは小堀遠州を声高に言いたいところなのですが、確定する史料がない。大きな政権交代がありましたので、生駒家の時代の史料はほとんど残っていないのです。

100年間もかかってできたにもかかわらず、ものすごく統一感があるお庭になっている。継ぎ足し継ぎ足しで作られた感じは、ぜんぜん見受けられない。ですからどう考えても、よほどしっかりしたランドデザインがあったのだ



紫雲山と一帯となった栗林公園は、水を巧みに生かした庭園だ。禹が目されるようになって、その名を冠した日本酒や和菓子もつくられるようになった。大禹譲は酒も和菓子も香川、禹王は片品。左は香東川の流域図。



ろうと想像できます。それだけのデザインができるという人物は、その当時そんなにはいないのではないかと、というのがベースにありますから、どうしても我々の想いとしては、小堀遠州にいくんですね。

## デザイン知事と呼ばれた金子正則

香川県に讃岐時代からの文化的素養があったためか、デザイン知事と呼ばれた金子さんという知事が就任した時期があります。日本を代表する建築家の丹下健三に設計を依頼して、旧県庁をつくったのも金子正則さんです。

金子正則  
(1907～1996年)

1950年(昭和25)から6期24年の間、香川県知事を務めた。香川県丸亀市出身。東京帝国大学法学部法律学科を卒業。司法官試験となる。敗戦翌年に東京控訴院部長となったが翌日付で退職し、丸亀市で弁護士を開業。1947年(昭和22)に香川県副知事に就任。在任中、吉野川から香川用水を引いたり、香川医科大学の開設を推進するなどした。香川県庁舎(現・東館)建設にあたっては、中学の先輩である猪熊弦一郎画伯の助言で丹下健三に設計を任せ、イサム・ノグチやジョージ・ナカシマら芸術家とも親交があり、「政治とはデザインなり」という言葉を残したとされる。

そういう知事がいたので、栗林公園の所長に西嶋八兵衛研究をされた藤田勝重さんを任命されたり、彫刻家のイサム・ノグチがアトリ

エを構えるなど、有名な文化人が香川に多く集まったのです。

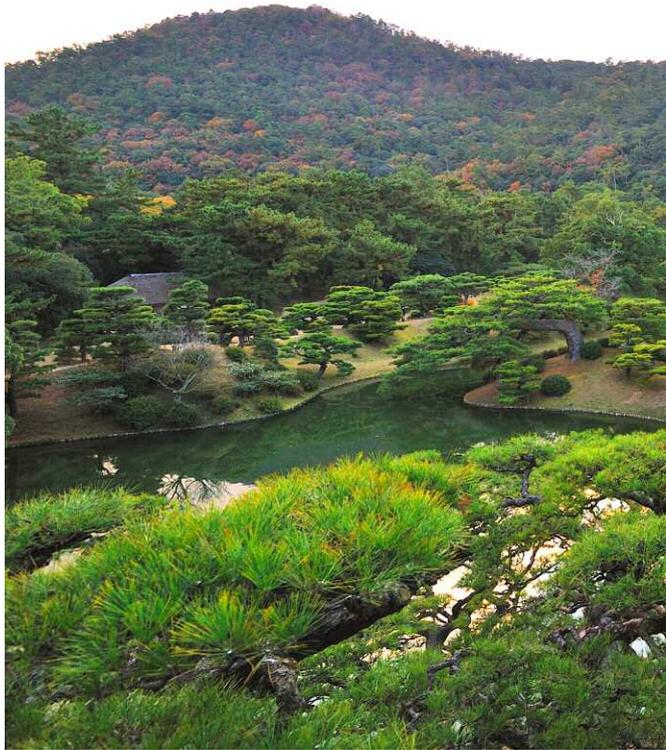
当時、讃岐民具連という運動があつて、県で蒐集した民具を展示する讃岐民芸館が栗林公園内につくられました。東京で新聞の挿絵を描いていた和田邦坊が郷里に戻り、初代館長になっています。こういう県立の民芸館というのは全国でも珍しいのです。ジョージ・ナカシマの家具をライセンス製作している桜製作所が県内にあることに因み、その作品を集めた家具

館もあります。また中庭は、「昭和の小堀遠州」と呼ばれた中根金作によって作庭されたものです。

和田邦坊  
(1899～1992年)

香川県出身、本名は邦夫。1926年(大正15)東京日日新聞社に入社、時事漫画を描く。ユーモア小説「うちの女房」や「ヒゲがある」を執筆して話題を呼んだ。1938年(昭和13)退社後は帰郷し、画家として活躍。1965年(昭和40)讃岐民芸館長、商業デザイナーとしての顔を持つ邦坊は、讃岐民芸館のために凝った内・外装デザインを施し、口ゴママークや買物袋の図案も手掛けた。

金子知事は栗林公園が大好きで、ここが文化の中心、文化サロンの



国土地理院基盤地図情報(縮尺レベル25000)「徳島、香川」及び、国土交通省国土数値情報「河川データ(平成18年)」より編集部で作図  
この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の基盤地図情報を使用した。(承認番号 平23情使、第630号)

になっていたわけです。

金子知事が「朝の栗林公園を散歩する会」というのを主宰したのですが、時の香川県の財界人や裁判所長官とかが一斉に集まりました。メンバーがすごいのです。大禹謨というお酒も、その時代にかけています。散歩会は、いまだに続いています。

## 禹で広がるネットワーク

観光というと、表面的な感じがしますけれど、そんなことはありません。「大禹謨」を通して、西嶋八兵衛をきっかけにした郷土史からの興行きと、日本全国から中国ともつながるような広がりの方ができたら、と思っています。

栗林公園には、県外からの観光客はぜひぶん来られているのですが、県民の来場者は、その内の1割くらい。平成になってすぐ動物園が閉鎖になり、栗林公園のみで集客しようという方針になって動物園とか美術館とかいった集客しやすい施設が閉鎖されたり園外に出ました。そういう状況で、苦戦を強いられていますのが現状です。

しかし、栗林公園は、特に重要な文化財庭園ということと、「特別名勝」に指定されていますし、世界的に有名な旅行ガイドの「ミシュラン」からは最高評価の三つ星をいただいています。また、アメリカの日本庭園専門誌では2011年(平成23)日本庭園ランキング3位にランクされました。国内

はもとより海外でも高く評価されている庭園なんです。ぜひ地元の皆様さんにもその価値をもっと知ってもらいたいと思っています。

観光地は一回行ったらもう行かないということも多い。でも、栗林公園は、庭園そのものの美しさに加え、歴史に裏打ちされた面白い謂われやエピソードなどがたくさんあります。

私も4月にこちらに赴任して、ボランティアガイドさんにレクチャーをお願いしたら、本当に興味深い話ばかりで、栗林公園を見直してしまいました。大禹謨や西嶋八兵衛のことなども、聞いてみるとわかりませんよね。そういった話を聞いて、初めて栗林公園の面白さがわかると言っても過言で

はない。これは若い人にも通じると思いますよ。この魅力を多くの人に知っていただくきっかけとして、西嶋八兵衛顕彰と大禹謨の物語を広げていきたいと思い、2013年(平成25)第3回禹王サミットの会場として立候補しました。

全国各地の禹王碑を研究中の郷土史家をはじめ、韓国、中国にもその輪が広がってほしいと思います。松平頼重公が来たときに1万3000人ほどだった高松の人口は、25年後には2万人になっていたといわれています。港町として繁栄し、そこで蓄えられた富が消費も促していたようです。

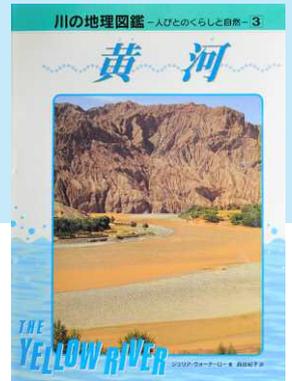
日本初の上水道は、早川を水源とする小田原城下のものですが、高松の上水道は、頼重公によって

1644年(正保元)につくられています。多くの住民の暮らしを支えるインフラ整備を大切にしたいとも言えますね。

高松の上水道が、1653年(承応2)玉川兄弟によってつくられた江戸の上水道よりも早くできたことは案外知られていませんが、郷土のことを知ってもらうことで香川に住む誇りのようなものが醸成されたら、と思います。

結局、大切なのはストーリーです。ただ見るだけじゃなくて、ストーリーがあることが重要。「大禹謨」発見のストーリーは、香川と栗林公園を牽引してくれる力を持つているんじゃないでしょうか。





# 水の文化書誌 31

## 《黄河は流れる》



### 古賀 邦雄

こが くにお

古賀河川図書館長

水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業

水資源開発公団（現・独立行政法人水資源機構）に入社  
30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集

2001年退職し現在、

日本河川協会、筑後川水問題研究会に所属

2008年5月に収集した書籍を所蔵する

「古賀河川図書館」を開設

URL：http://mymy.jp/koga/

と同様に児童書であり、コンパクトに書かれている。

黄河の流れは、標高4300mのチベット高原を源とし、蘭州から内モンゴル自治区へ。オールドス草原の防風林を過ぎ、山西省・陝西省の険しい峡谷の黄土高原で渭河と汾河と合流し、その後東向きを変え、峡谷地帯三门峡を流れ、三门峡ダムを通過して華北平原へ流れる。華北平原は海面すれすれの低い平原で、大量の泥が堆積し天井川になっており、他の川が合流することができず、この後河口までの800kmあまり、黄河はただ一本の川として流れる。夏には大洪水を起こすが、一方肥えた土地が広がる華北平原は中国農業の中心地でもある。最後には渤海に流れ込み5464kmの長い旅を終える。流域面積75万km<sup>2</sup>、支流約40本、年間流出量480億m<sup>3</sup>、年間16億tの土砂を運び、大小80の水力発電所と174の貯水池があり、延長6300km、流域面積180万km<sup>2</sup>の長江に次いで、中国第2位の河川である。

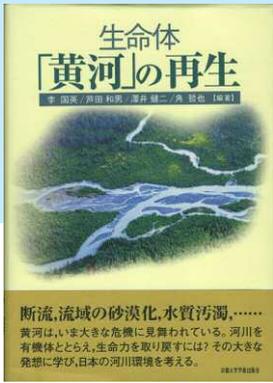
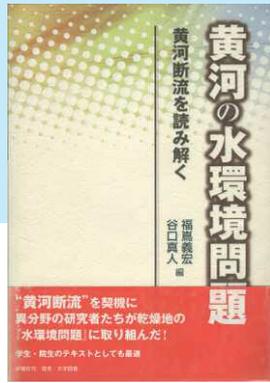
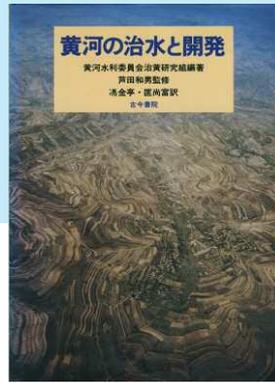
治区黄土高原、山西省・山東省陝西峡谷壺口瀑布・黄河のナイアガラ、黄河河口龍頭より鉄尾へ至る旅を綴る。旅を終えて小松左京は「黄河という河の途方もない雄大さと、その地理的な、歴史的变化さらに各地域での社会や技術とのからみあいの複雑さは、日本では到底想像もできないという事である。治水といっても、巨大な河の、源流、上流、中流、下流において、それぞれ異なった性格の計画をそれぞれに密接に関連づけながら行わねばならず、その作業の複雑さと龐大さに気が遠くなりそうだ。にもかかわらず、現在の政府は、革命後、いくつかの試行錯誤を繰り返しながら、この老大河のコントロールに基本的に成功しつつある事はたしかである」と述べている。

孟子は「禹の水を治むるは、水の道なり」と言っている。禹は黄河において大治水を行なったが、それはただ水の本性に従って、水に逆らわず流すべき所に流したまでであったという。「黄河を制する者は、中国を制す」、これは初めて黄河の治水に成功した禹のことを指している。黄河は暴れ竜と呼ばれるように、夏には激しい雨が洪水を起こし、その洪水によって山西省・陝西省地域には大量の黄土の泥が流れ込み、この泥が黄河の川底を浅くして、氾濫の原因となる。

孟子は「禹の水を治むるは、水の道なり」と言っている。禹は黄河において大治水を行なったが、それはただ水の本性に従って、水に逆らわず流すべき所に流したまでであったという。「黄河を制する者は、中国を制す」、これは初めて黄河の治水に成功した禹のことを指している。黄河は暴れ竜と呼ばれるように、夏には激しい雨が洪水を起こし、その洪水によって山西省・陝西省地域には大量の黄土の泥が流れ込み、この泥が黄河の川底を浅くして、氾濫の原因となる。

ジュリア・ウオーターロー著『黄河』（併成社1995）に、禹の治水方法は、川底をさらって多くの水が流れるようにし、さらに大量の水を分散させる運河までつくったとある。工事には大勢の人を使い、13年間かけて行なった。おかげでその後何百年洪水を免れたとある。それ以後の古代王朝でも禹の治水方法を踏襲するが、政治が不安になると、治水事業は疎かになっていき、その後洪水は頻繁に生じた。K・J・グレゴリー著『黄河』（帝国書院1987）は、上記の書『黄河』

『黄河行』（朝日新聞社1981）。小松左京著『黄河—中国文明の旅』（徳間書店1986）は、1985年5月から約3カ月かけての旅で、黄河の中国文明4000年の歴史をたどる。河南省鄭州の悪名高い暴れ河をはじめ、陝西省西安十二王朝の古都、青海省日月山脈農牧二天文化の分水嶺、青海湖アジアで最高所に位置する大湖、寧夏回族自治区・内蒙古自



模灌漑機構及び鄭国渠灌漑をめぐる諸問題、武帝期の黄河の決壊などの前漢時代の黄河問題、両漢交代期の黄河決壊と社会状況、「王景の治水」以降の黄河下流域と黄河問題、黄河下流域の古代帝国形成期などを論じる。

吉岡義信著『宋代黄河史研究』(御茶の水書房1978)は、北宋期(960~1127年)167年間の黄河に関する治水の研究である。1048年河川決壊によって、過去1000年間東流していた黄河が北流して新局面を迎えた。繰り返す決壊とその治水には、河北等北方六路の30万人と多大な物資とが投入される。ここに黄河治水技術は国家的要請に応じ、堤防の護岸工事において、画期的発展を遂げる。吉岡は長江を「経済の河」とするならば、黄河は「政治の河」ということができるとし、それは宋代の黄河は皇帝を中心に中央集権的官僚制度により、その治水が進められたからだと言う。さらに、鶴岡和幸編著『黄河下流域の歴史と環境』(東方書店2007)では、中国大陸の東に広がる朝鮮半島と日本をつなぐ海域、即ち東アジアに海の文明が伝播したのは古代の黄河下流域から始まったと論じる。

さて、戦前における黄河に関する書に次のようなものがある。大阪毎日新聞社編・発行『大黄河』(1938)は、黄河の歴史、地質、鉱産資源、河口の移動、舟、果物、魚類、古伝説等を捉えている。小越平陸著『黄河治水』(政教社1929)は、大正11年に黄河を踏査し、黄河の治水の困難性に直面しながらも、治水には全水域を測量し、測候所を設け、雨量や解水量を測り、水量の増減を測り、海の深淺を測り、風向を測らねばならないと

し、治水の根本は植林であるという。黄河流域は夏季には豪雨となり、冬季には異常なる乾燥を示し、水位、流量の増減は常に極めて大である。これらの気象調査について、胡煥庸編『黄河誌気象篇』(東亜研究所1940)がある。福田秀夫・横田周平著『黄河治水に関する資料』(コロナ社1941)は、既に黄河を治水の観点から国際連盟が調査した、フリーマンとトッド、エリアッセンの報告を紹介している。洪水の原因の一つ堤防の弱点について、防禦線が非常に長いこと、異なる地点で堤防の質が違うこと、関係諸省に権力を及ぼし得る中央の権威ある監督機関が欠けていたこと、資金の無いこと、そして、黄土を大量に搬出する黄河とその支流に固有な沖積現象を挙げている。このことから、平原における治水工事の改善が必要であり、それには堤防組織の強化と同時に平水時を固定する方法であると説いている。

1949年毛沢東による中華人民共和国成立後、黄河の被害を根治し、水利開発による総合計画を策定した。上流ではダムによる水力発電、中下流では灌漑と水運の発展、黄土高原は水土保持により河道への泥の流出を和らげる計画である。黄河水利委員会治黄研究組編著『黄河の治水と開発』(古今書院1989)では、黄河委員会が成立し、黄河が戦争時期の地域的治水から全流域の統一的な治水と開発を論じる。低く破損された昔の堤防は千里の堤防として高く強化され、堤防に生える木や草などで堤防が保護され、表土先前には水防林、堤防先端には並木が植えられた。また、ダムによる治水、河道掘削、低水路の安定、更に水利工事において砂防と排砂がなされ、洪水と土

砂を利用して生産を進展させた。1963年黄河中流地区の土壤保全事業を推進し、土壤保全事業の結果、土砂流失地区が減少し、農業生産が改善された。灌漑面積は80万haから350万haと拡大した。水力発電ダムは、三门峡ダムを初め天橋ダム、青銅ダム、八盤峡ダム、塩鍋峡ダムなどが完成した。

しかしながら、黄河流域は降水量が少ない。黄河はユーラシア大陸の東縁に位置し、流域の年平均降水量はわずか450mmに過ぎず、流下の中には草がまばらな乾燥地帯や草木も生えない砂漠を抱えている。加えて1970年代以降、水資源開発が進み、中流において灌漑用水等を大量に取水した結果、断流現象が起り、流れが河口まで達しなくなった。1990年代には毎年のように断流となり、1997年には断流日数が226日間にもなる異常事態が生じた。断流が続くことにより河口の渤海の環境は悪化した。この断流問題については、上田信著『大河失調』(岩波書店2009)、勉誠出版編・発行『アジア遊学75 黄河は流れず』(2005)、福嶋義宏著『黄河断流—中国巨大河川をめぐる水と環境問題』(昭和堂2008)、福嶋義宏・谷口真人編『黄河の水環境問題—黄河断流を読み解く』(学報社2008)がある。『黄河の水環境問題』では、断流について、黄河流域の社会経済発展と水資源からアプローチしている。黄河流域の大規模灌漑農業、黄土高原の地理学的・気候学的特徴を捉え、さらに人工衛星と水文・気象データを用いた黄河流域の土地利用・水収支及び土砂流出解析が成されている。なかなか解決方法が見出せないが、2002年「新水法」が發布され、

各大型灌漑地域には節水努力が課され、違反した場合は罰則規定が設けられた。「南水北調」と呼ばれる長江からの導水計画があり、南の長江から最終的には合計488億m<sup>3</sup>が輸送される。このときは黄河の水質問題が生じると指摘する。おわりに、李国英・肖田和男・澤井健二・角哲也編著『生命体「黄河」の再生』(京都大学学術出版会2011)を挙げる。

李国英は、河川を広義の生命体として定義する。即ち、生命体にはエネルギー移動、物質循環の機能が備わっているが、河川の水文循環過程もエネルギー移動、物質循環の特徴を持っていて、陸地と海洋の水が太陽エネルギーを吸収して水蒸気となり、大気と混合して地球の引力を克服して位置エネルギーに変換する。この過程で土壌侵食・土石の運搬・堆積により水成地形をつくり、それを生息地として進化して多くの生きものを育み、恵みを与える。このような考えから、黄河の健全な生命の維持とそのシステムについて、黄河治水の終極目標として、河川を生命体としてとらえ、それを侵略しないように、過度な水資源利用を慎み、汚染しないように注意し、生態系を守り、土砂堆積を制御して、危険を回避する必要性が述べられている。具体的に、黄河再生に向けて、黄河の調水調砂、黄河の粗粒土砂制御、黄河下流河道の整備方針を論じる。

以上、黄河に関する書についていくつか紹介してきたが、黄河は年間16億tの土石問題、断流現象、流域の砂漠化、水質の問題を抱えながらも、流域に約2000万haの耕地、人口1億人余を支えている。黄河は1億人余の生活の中を今も流れている。

# 禹の治水と中国史の流れ

日本にとって、中国は社会制度やもろもろの文化の手本であり、長らく、師と仰ぐ対象でした。しかし、中国文明の基層を理解するのはなかなか難しいことです。そこで、長い歴史を持ち、深く広い中国文明の基層を分析し、理解することによって、禹の問題についても理解を深めたいと思います。



## 蜂屋 邦夫

はちやくにお  
東京大学名誉教授 文学博士

1938年東京生まれ。1963年東京大学教養学部教養学科アメリカ分科卒業、1968年同大学院人文科学研究科比較文学比較文化博士課程満期退学、同年東京大学東洋文化研究所助手、1974年助教授、1975年より同大学院人文科学研究科（1995年に人文社会系研究科と改称）担当、1987年教授、1993年文学博士、1999年定年退官。1999年大東文化大学国際関係学部教授、2009年定年退職。中国思想史、特に老荘思想、道教が専門。主な著書に『中国の思惟』（法蔵館 1985）、『老荘を読む』（講談社 1987）、『金代道教の研究—王重陽と馬丹陽—』（汲古書院 1992）、『中国思想とは何だろうか』（河出書房新社 1996）、『莊子—超俗の境へ』（講談社選書メチエ 2002年）、『老子』（岩波文庫 2008年）ほか。

中国・紹興にある大禹陵。紹興は水路が網の目のように走る水郷都市で、春秋時代越国が会稽という名で都にした所。大禹陵は会稽山の広大な敷地にあるが、新しくつくられた建物や像が多く、本来の姿を想像するのは難しい。大禹陵碑の雄渾な筆致は、明代の紹興府知事 南大吉が記したものだという。会稽山の頂上に立つ巨大な像以外にも、たくさんの禹王像があるが、左ページの写真はギリシャ彫刻を思わせる、一風変わった禹王像だ。

## 夏王朝と禹

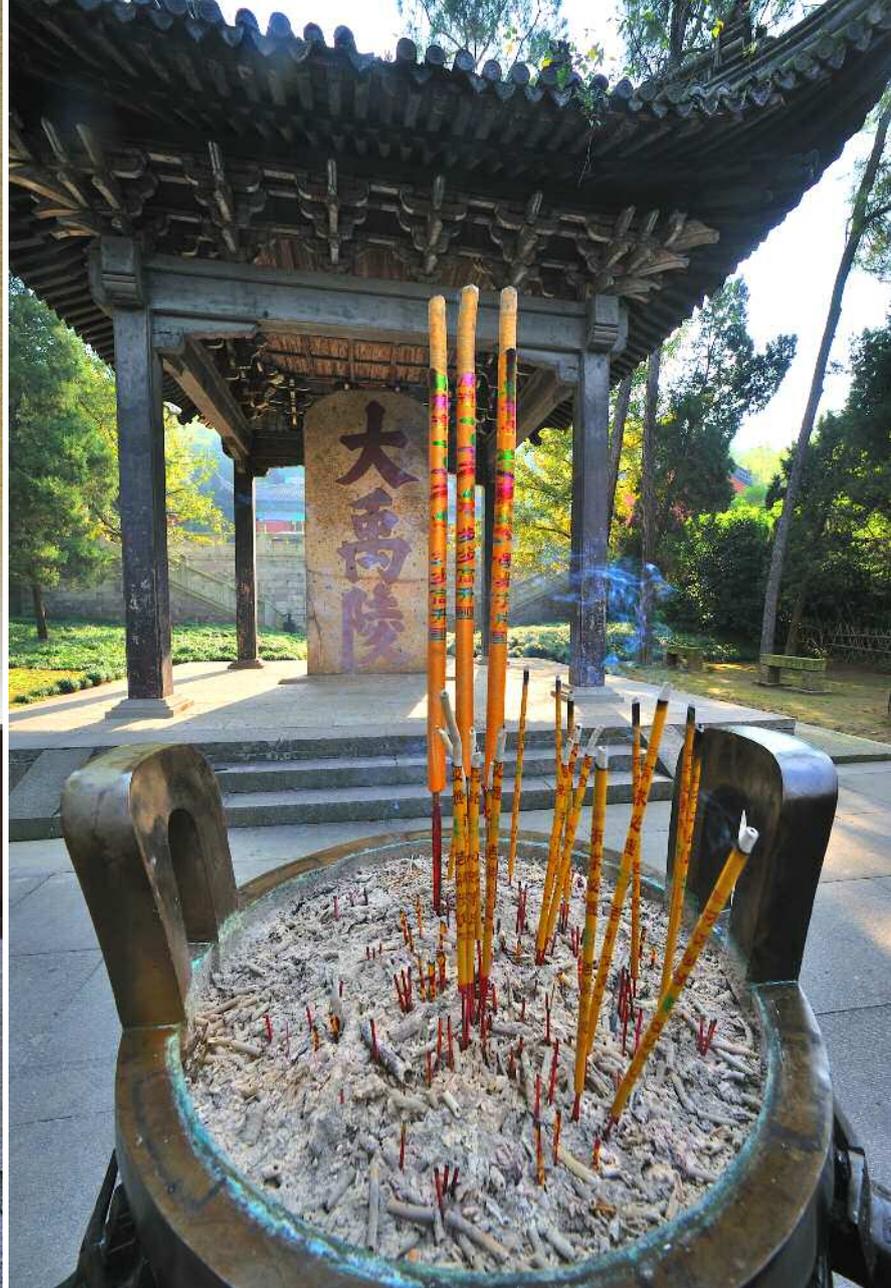
中国の伝統というのには長い歴史と深く広い内容があります。神話の時代から確かな歴史時代にかけて、中国には夏殷周という三代の王朝があったとされています。夏王朝（紀元前2100年ころから紀元前1600年ころ。以下、紀元前は前と略記）は、中国の史書には初代の禹から末代の桀まで17代、ほぼ471年続いたと記録されています。従来、伝説上の王朝とされてきましたが、近年、実が見直されています。文字史料が発掘されたわけではありませんので、文献史料のいう夏王朝が実在したことを直接証明はできませんが、中国現代の歴史学界や考古学界では実在したものとみなされています。

この夏王朝を開いた人物が禹でした。『尚書』（後世では『書経』と呼ばれる「堯典」）によれば、堯帝の時代に大洪水が起こったので、堯帝は禹の父親である鯀に治水を命じました。しかし9年たっても成果が上ががりませんでした。また『尚書』「洪範」には、鯀が洪水をふさごうとしたときに五行を乱したので殺された、とあります。『山海経』「海内経」には、帝の息壤（自然に盛り上がりてくる土）を盗んで洪水をふさいだが、帝の怒りを買って殺された、とあります。いずれにせよ、鯀の治水事業は失敗したわけです。

鯀の事業を受け継いで治水に当たったのが息子の禹です。禹は鯀が誅されたときに、鯀の腹から生まれたという伝説があります。また、鯀も禹ももとは水神で、鯀は亀、禹は龍の化身であり、亀信仰部族から龍信仰部族に勢力が交代したのだ、という説もあります。鯀の治水方法は「堙」といい、水没地帯を埋め立てる方法、禹の治水方法は「疏」といい、水路を切り拓き、堤防を築いて洪水を流す方法とされていますが、禹はまた「埋」方式も採用しており、両者の間で基本的には大差がない、とする議論もあります。

では、なぜ鯀は失敗者となり禹は成功者とされたのでしょうか。これは簡単に結論を出せる問題ではありませんが、例えば民族や部族間闘争の反映、信仰形態の違い、神話の伝承系統の相違、後世の歴史家らによる合理づけなどが要因として挙げられます。ただ、治水事業や自然観察の経験が蓄積することによって、「埋」よりも「疏」の方が水の性質に適合しており、「疏」こそが治水の基本なのだ、という認識が一般化した、ということはいえます。

ずっと後世のことになりますが、



前4世紀ごろ、中国の戦国時代に活躍した孟子は、楊朱ようしゆという人物を批判して、「楊朱という奴は、脛の毛を一本抜けば天下が救われるという場合でも、その毛一本さえ抜かない」と言いました。その意味は、楊朱は自分のことしか考えない奴だ、ということなのです。

楊朱  
(約前395年〜前335年)  
 戦国時代の思想家。楊子、楊子居とも呼ばれる。儒家や墨家に対抗し、個人の生命を重視し、他人を侵害しないという個人主義的な為我説を唱えた。孟子は楊朱の思想を異端として極力排撃した。『孟子』『莊子』『韓非子』などに断片的な学説が残る。

孟子の言葉には抛り所があり、禹が泥の中を這い回って治水に苦心し、そのために脛の毛がみな抜けてしまったという話が前提になっています。ですから「脛の毛を抜く」という言葉だけをとりえたなら、それだけで社会が救われるというわけではないのですが、これは自分を犠牲にして労働するという意味にとらえなくてはならないのです。禹のことがわからなければ意味は通じません。

堯帝の後を嗣いだ舜帝から、治水の功績により、禹は帝位を譲られました。その後は代々禹の子孫が帝位を嗣いだので、ここに中国最初の世襲王朝(夏王朝)が成立しました。禹の治水事業は中国人の間に伝説となって継承され、今日

でも中国各地に禹王廟が残っています。

日本にも、禹にかかわる碑や地名が20以上もあると聞いて驚きました。我が先祖たちにとつていかに治水事業が重大なものであったか、日本人がいかに中国の歴史・伝説に学んだかがわかります。

ところで禹は、後世、堯・舜・禹・殷(商が正称。後半は殷を都としたので、一般的には殷と呼ばれる)の湯王・周の文王・武王と並べて聖人として尊敬されました。特にそうした系列を尊崇したのは儒家の人たちでした。なぜ儒家の人々は禹をそれほどまで尊敬したのでしょうか。そこには儒家独特の見方がありますので、次に儒家の思想を見てみましょう。

### 伝統社会の基層は宗族制

儒家は孔子が始めたということになっていきますが、孔子自身は「述べてつくらず、信じて古いにしへを好む」(論語)述而と言っています。「自分はなにも創造的なことを言っているわけではない、昔のことを言っているだけだ」というので、すから、孔子から儒家が始まったというのは本来おかしな言い方なんです。孔子が言った「いにしへ」というのは周の初めのことで、具体的にいえば周公(周公旦)の教え



禹が山を削り拡幅したといわれる龍門は、別名禹門口とも呼ばれている。かつては両岸に禹廟がいくつも建っていたが、日本軍によってことごとく破壊された。今は、大禹廟跡であることを示す碑亭がひっそりと建つのみ。黄河は黄土高原の黄土を削り、下流へと運んでいく。俗に「水一斗土六升」つまり、1斗の水に6升の土が含まれる、といわれる。禹門口を案内してくれた張仲勛さんが、河津博物館（文物局）で保管している禹王碑の見学に立ち会ってくれた。向かって左は、王芳さん。



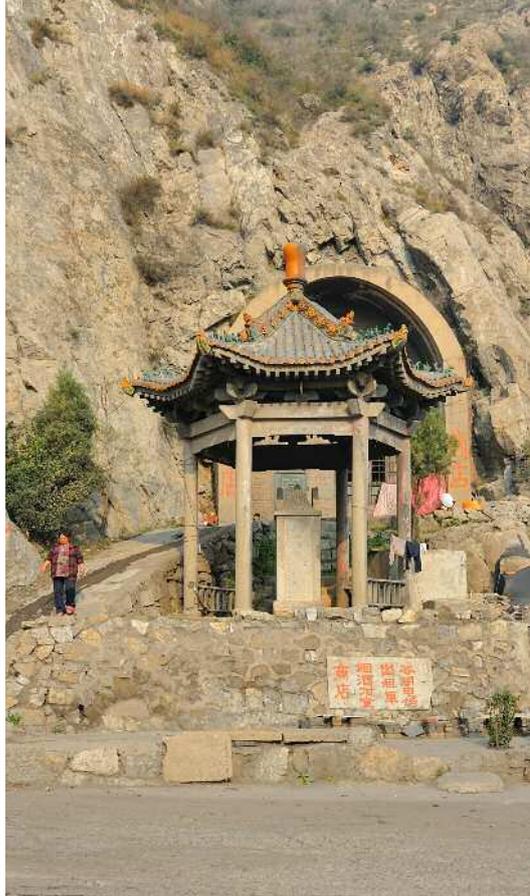
です。さまざまな政治制度や法の規定、文化の在り方など、一切合切を周公が基を創った、とされました。それが崩れてきたから孔子は周公の精神に立ち戻った社会にしよう、という努力をしたわけですね。しかしこれは孔子の考えであって、実際に周公がこういうことをやったかどうかは別問題です。

周は前11世紀後半から前256年までの王朝で、前半の前8世紀初めころまでを西周といい、その後を東周といいます。西周は西安のそばにある鎬京という所を都としました。しかし、西から来た異民族に圧迫されて、洛陽近辺に都を移しました。それから後を東周といいます。東周の前半、前5世紀半ばまでを春秋時代といい、そのあとを戦国時代といいます。周

王の権威は春秋くらいまでは何とか保たれましたが、戦国時代になると周は洛陽を中心とする小地方権力に過ぎないものとなりました。孔子は春秋の末期に生まれ、失われてゆく周の秩序を何とかして回復しようと努力をしたのです。孔子の考えた周の秩序は宗族制と封建制の形で保たれていたものです。宗族というのは、祖父―父―自分（男）―息子―孫というような男子の系統、つまり男系一族を指す言葉です。宗族制は、宗族の結束を強くする祖先崇拜と、成員

の宗族内での位置によって決まってくる日常の行動ルール、言い換えれば「礼」を尊重することによって維持されてきました。その伝統が、中国の人たちに「関係こそが大事なのだ」という意識を植えつけました。私は1980年（昭和55）以降、何度も中国に行きましたが、行くたびに痛感するのは、人間関係のネットワークに入り込まなければ、何もできないということ

です。宗族制には「礼」の秩序が欠かれません。礼は、君臣の間での作法、諸侯や臣下同士の間での儀式、冠婚葬祭の式次第などまで含む形式であると同時に、もっと大切なことは、そうした形式を成り立たせている気持ち（道徳）だと考えられました。孔子は人として最も大切な気持ちは「仁」だと考えましたが、仁の気持ちは、実は親や兄に対する気持ちをもとになっています。つまり、親に対する孝、兄に対する悌です。孝悌のうち、特に大事なものは孝です。孝とは、具体的に言えば父母に対して食べものや飲みものを捧げて大切にすること、ということです。そういう孝を一番の基本にして出てくる徳目が仁なんですね。仁を大切にしたいというのは、やはり目上の者に「仕える」ということが基本になります。仁とは、親に対する孝を



一般的な人と人の関係にまで拡大していった考え方、ということになります。

禹は治水事業を成功させた点が評価されたばかりでなく、孝の徳目を身につけていた点でも評価されました。『論語』『泰伯』には、

孔子の言葉として「禹は吾れ間然することなし。飲食を非くして孝を鬼神に致し」という発言が見えます。「禹は、文句の付けようがない。自分の飲食物を粗末なものにして、先祖の御霊に孝行した」という意味です。先祖に孝行するというのは、先祖の神霊に飲食物を捧げて、立派にお祀りをした、ということ。存命中の親に対しても、亡くなった先祖に対しても、飲食物を捧げるというのが孝だったのですね。禹は儒教の聖人としても尊敬されたわけです。

宗族の「宗」というのは、家の中で先祖の神霊が祀ってある大事な所、という意味です。ですから、大本の意味になります。清朝の末期に日本から宗教という言葉が入ってきたときに、中国人にはレリジョンなんていう発想はありませんでしたから、一番大事な教え、という意味でとらえました。そして中国で一番大事な教えとは、いったい何だろう、と考えました。それは儒教に他なりません。そこで、儒教は宗教である、という風

につながっていくんです。しかし、儒教には必ずしもいわゆる宗教とはいえない面があります。社会制度であり、道徳であり、政治理念ですね。キリスト教とか仏教とは違いますね。

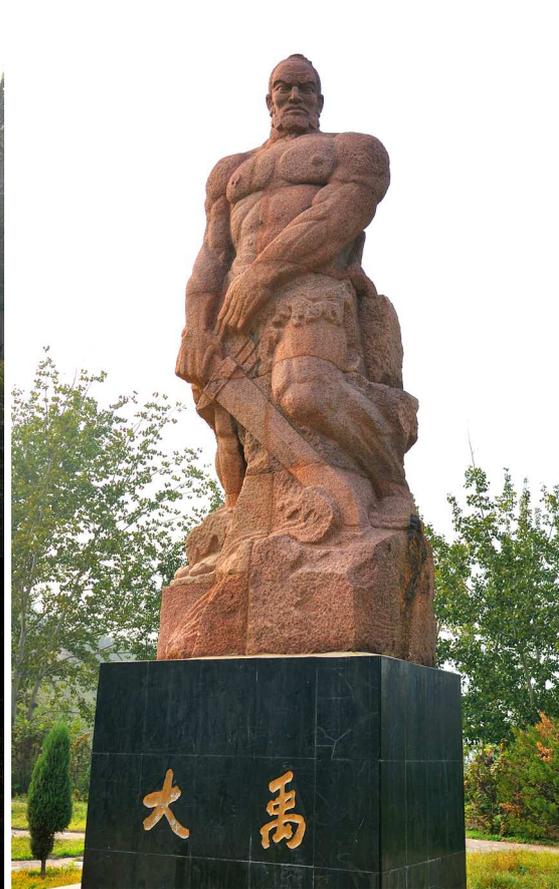
ただし、先祖の神霊を拝むわけですから、似たところもあります。元来、天を拝み、先祖を拝み、食べものや飲みものを捧げて神として祀ったわけですから、その面からいったら宗教と言って言えないことはありません。微妙なところですね。

### 封建制と郡県制

宗族制と並んで、周の大事な制度として封建制がありました。封建制は、周が殷を滅ぼしたとき、武王が一族の者や功臣に「そなたは、ここに国を建てろ」と土地を与えてできた制度です。土地に封じて国を建てるから封建というのです。周の人たちは、殷を滅ぼしたのは殷王が暴虐で天（最高の神さまである天帝のこと）を侮ってきちんと祀らなかつたからであり、そこで天は、天をよく祀っている周に、殷に代わって王朝を開けという天命を与えたのだ、と主張しました。天を祀るといえるのは、王が、定められた日時に決まった場所で、決まった手順を踏んで飲食物を捧



三門峽ダムは、1960年（昭和35）西安の下流につくられた。当時は中国最大のダムだったが、流入する泥を少なく見積もるといふ計画ミスのために、貯水池に大量の泥が溜まった上、発電所のタービンも能力不足に陥ってしまった。今では、土砂を流し出すトンネルやタービンの性能を上げるなどの努力で、ダムとしての機能を維持しているが、発電量は当初計画の5分の1に留まっているという。ページ中央：ダム堰から下流へ。左ページ上：上流のダム湖。下はダム湖畔。右：三門峽ダムのサイトにある大禹は、筋骨隆々。



げて行なうことです。そのことを周の人は徳と呼びました。封建制の根底には王の徳があったのです。武王や周公が、殷には徳がなく周には徳があると強調したことは『尚書』の中に出てきます。ただ、歴史的事実としては、その全部を信じるわけにはいきませんけれども。

孔子も周には徳があったから天命を受けたのだということを一所懸命宣伝したんです。この徳は後世の道徳の徳とは違って、神に飲食物を捧げて祀るという意味ですが、先祖の神霊を祀ることも徳である、ということになってきます。この徳を道徳の意味にまで深めたのは孔子でした。

孔子の考えでは、封建制と宗族制の秩序がきちんと保たれていることが大切でした。徳に基づく封建制の理念、祖先崇拜や親孝行を中心とした宗族のまとまり、これらをきちんと維持しようとしたのです。そして、天を祀っていいのは周王だけで、それ以外の人がやったら越権行為なんです。天を祀ると同様、地を祀るのも、天下の名山を祀るのも周王だけ。それらの祀りを、いつ、どういう風にして祀るかという規定も、事細かに決められていました。封建制や宗族制の秩序の中心が、「祀る」ということなんです。そして、儒

というのには祀りを担当する人という意味で、そういう人を総称して儒家じゆかといったわけです。

ところが、孔子が生きた春秋の末ごろには、封建制の秩序がだいぶ崩壊していました。諸侯同士が、周王の命令も待たずに勝手に戦争をし、本来は周王から封建されたものである他国を滅ぼし、自国の領地を広げていったのです。春秋の初めには国が140ぐらいあったといわれているんですが、春秋末期には40ぐらいに減少しています。次の戦国時代になるとさらに減って、主な国は七雄（秦・楚・斉・燕・趙・魏・韓）といわれるようになります。周王の権威もまったくなくなってしまいました。

自国に近い国を滅ぼしたら自国にくっつけます。つまり県です。県の本字は縣で、これは懸と同じ意味で、ぶら下がる、という意味を持ちます。本国にぶら下げたわけです。ところが時代が進んで大規模な戦争が起こるようになりますと、本国から遠く離れた国々を征服するようなことが起きます。そうした場合、その地域をまとめて統括するようにしました。それが郡です。まとまった多くのものという意味で、群と同じ意味です。日本の行政系統ですと某県某郡となりますけれど、中国は県よりも



王朝の流域図 「グローバルワイド 最新世界史図表 二訂版」(第一学習社 2008改訂11版) をもとに編集部で作図



郡のほうがずっと格が上です。このように統治に際して郡と県をつくり出していったのが、郡県制です。郡や県には本国から官僚を派遣して統治させました。封建制の根底には徳があり、然るべき血筋の者が国君として統治するのですが、郡県制では統治の能力こそが重要で、時代の要請は徳から能へと転換していったのです。

### 秦の天下統一は法家の力

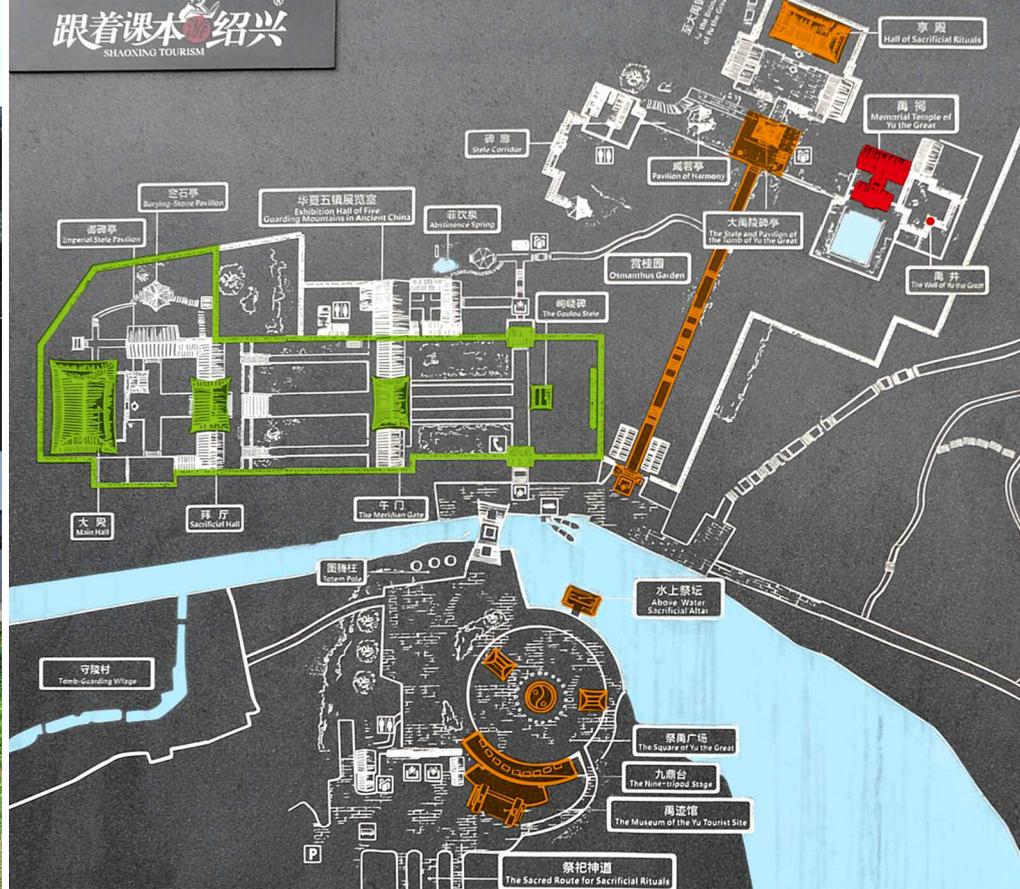
戦国の七雄の中で勝ち残ったのは秦でした。秦の始皇帝は前221年に全国を統一して秦王朝を開きました。始皇帝は郡県制を徹底して推し進め、統一後は中国全体を36の郡にしました。しかし秦は、はじめから郡県制の国というわけではありません。その方向へと強力に推し進めた人物がいたのです。孝公（前361〜前338年在位）の時代に活躍した商鞅（約前390〜前338年）という人物です。

商鞅は衛の人でしたが、秦に行って孝公に仕えました。商鞅が進めた政策は法令を最も重視するもので、商鞅は法家に分類されます。「人民に知識を持たせる必要はない。国の政策としては農業だけをやる」として、商業や工業を徹底的に否定しました。商業で金儲けをするようになると、みんながそ

ちらに頭を使うようになって、農業がおろそかになる。また、議論に優れた人を官僚として採用するのにもダメ。そんなことをしたら、みんな議論ばかりして農業をやらなくなってしまう。工芸品をつくるのもいけない。工芸品がいくら立派でも国は強くない、というわけですね。でも、人はみんな豊かになりたいですよ。ですから元氣な農民は兵隊になって、その功績のみに賞を与える、という考えで強国をつくらうとしました。

ですから貴族が勝手なことをするなんていうのは、もってのほかです。こうした政策を貫徹するために、商鞅は法というものを非常に重視しました。法を犯した人間は厳罰に処しました。罪を犯した者だけではなく、一族すべてに連帯責任を負わせたのです。政府の政策としては、十のうち九は罰、褒めるのは一だけです。あるとき皇太子が法を犯しましたが、まさか皇太子を罰するわけにはいきませんので、後見役の公子虔を罰し、教育係の額に入墨を施しました。のちに公子虔がまた規律を犯しましたので鼻削ぎの刑にしました。秦の人々は法を守るようになりましたが、商鞅は大いに憎まれます。商鞅は宰相となり、秦は強国になりましたが、孝公が亡くなると、皇太子が即位して恵文王となり、





公子虔は商鞅は反逆を謀っている  
と告発しました。商鞅は秦の都から逃亡し、途中で宿に泊まろうとしますが、宿の主人は「商鞅様の法令で、手形を持たない旅人を泊めると罰せられます」と断られてしまいます。商鞅はいったん魏に逃げますが追放され、封地の商で秦の討伐軍に攻められて殺されました。恵文王の命令で遺骸は車裂きの刑に処せられました。

このように非常に恨まれた人物ですが、商鞅のお蔭で秦はたいへん強い国になりました。そのような法家の路線を受け継いでいったから、始皇帝も天下統一できたのです。始皇帝が行なったことの一つに焚書坑儒というのがあります。書物を焼き、儒者を穴埋めにするというのは商鞅が考えた教えを継承しているのです。

このように法家の理念というのは、法令を重視し、君主の意のままになる官僚がいて、その官僚が身分に応じて民衆をコントロールしていくというものです。つまり徳なんていうものは全然関係がなくなりました。

### 秦の始皇帝と五行思想

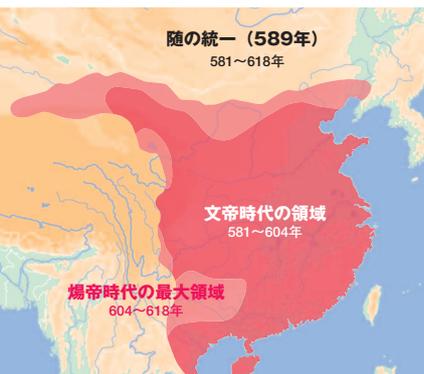
秦の始皇帝は極端な法治主義をとりました。その拠り所の一つが五行思想です。五行思想とは戦国

時代の半ばごろから出てきたもので、元来は、堯舜から禹（夏王朝）それから殷周という王朝の推移を理論づける思想でした。つまり、なぜこのように王朝は推移したのか、その根拠を分析したのです。五行とは木火土金水という五つの要素、もしくは原理のことです。

木は燃えるから火を生み、火は物を燃して土を生み、土からは金属が産出し、金は溶けて水を生み、水はまた木を育てるというように、五行は次の要素を生み出す方向で循環します（これを五行相生と言います）。また、木は金属のナタに切られますし、金は火に溶かされますし、火は水に消されるといいうように、勝ち負けの関係にもあります（これを五行相勝または相克と言います）。また、土の要素を持つものは土徳があると言います。火の要素を持つものは火徳があると言います。王朝はみな土徳とか火徳とか、何らかの徳がある、と考えられました。

こうした五行の関係によって王朝も交替した、と考えたのです。たとえば木徳の王朝の次は火徳の王朝になります。木徳の王朝を戦いで滅ぼしてできた王朝なら、木に勝つ金徳の王朝になります。

五行思想は、のちにはさまざまな事象に当てはめられ、天地の間に存在するあらゆる物事の推移、変化を説明する思想となりました。





紹興・会稽山の大禹陵。施設の配置にも、五行思想に則った流儀があるようだ。禹陵村の住民の多くは、禹と同じ姓である姒(じ)で、現在で144代目であるという。祖廟(写真左)には、歴代の氏名が書かれていた。

下図：五行思想を反映させ、木火土金水にあらゆる物事を配当したのが、五行の配当表だ。



五行	木	火	土	金	水
方位	東	南	中央	西	北
色	青	赤(朱)	黄	白	黒(玄)
季節	春	夏	土用	秋	冬
五臓	肝	心	脾	肺	腎
道德	仁	礼	信	義	智
聖獣	青龍	朱雀		白虎	玄武
生数	三	二	五	四	一
成数	八	七	十	九	六
五岳	泰山	衡山	嵩山	華山	恒山
味	酸	苦	甘	辛	鹹



### 漢王朝と儒教

秦はあまりにも急激かつ厳格に  
 秦はあまりにも急激かつ厳格に  
 秦はあまりにも急激かつ厳格に

秦はあまりにも急激かつ厳格に

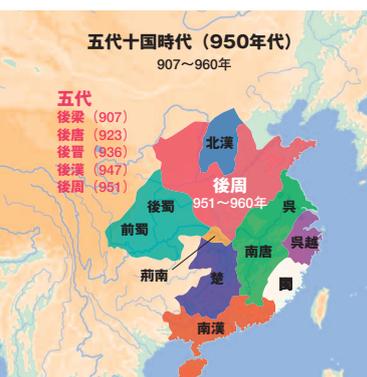
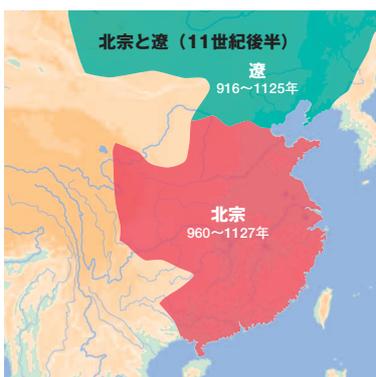
最初は、ともかく政権を安定させなくちゃいけません。人民は秦末の戦乱で疲弊していますから、まずは人民の力を回復しなければなりません。そのときの拠り所となった思想は黄老思想と呼ばれます。つまり黄帝と老子の思想です。黄老思想とは、できるだけ政府の干渉を避け、人々の生活力が自然に回復するのを待つというものです。黄帝は実在の王というより伝説上の古代の帝王ですが、中国文明の基を創った帝王として知られています。老子は実在の人物とすれば春秋末から戦国の初めころに活躍したことになります。

文帝(第5代皇帝)や景帝(第6代皇帝)

いわば中国の世界観となったと言ってもいいと思います。五徳の内、特に土徳が重視されましたが、その根拠は農業を生産の基本にしていたからです。農業生産を安定させるという行為が、いかに重要だったかが理解できると思います。高貴な色が黄色とされるのも、土徳には黄色が配当されているからです。農村社会の基本は春に種を蒔き、夏に成長させ、秋に収穫して、冬に休息するという生活様式です。ですから季節は一年を単位として循環、再生するものだという意識も生まれました。

周の文王のときに赤い鳥が赤い文字で書かれた文書をくわえて周のやしろに集まるという現象があったので、周は火徳とされました。秦は周王朝を破ったのですから、秦王朝は火に勝つ水徳だと自負しました。水徳の内容には北・黒・冬・六・厳格などの原則があります。そこで、秦の旗は黒でしたし、正月は冬の初めです。統一後、中国全体を36郡にしたのも、六の二乗だからです。もともと法令尊重の伝統がある上に、始皇帝の統治が一段と厳格だったのは五行思想に拠っていたのですね。

法令による政治をとったため、短時間で亡んでしまいました。秦に続く漢(前漢)は、南方の楚から出てきた項羽を、河南あたりから出てきた劉邦が破って、前206年に全国統一を果した王朝です。漢王朝の力というのは、当初、中国全体の3分の1ぐらいにしか及びませんでした。直接統治できた所は郡とし、力が及ばない諸侯王の領域は国と称しましたから、郡国制と言われています。漢の初期には、国を滅ぼして郡の力、つまり王朝の力を強めようとはしました。それが完成してくるのは、王朝ができて100年ぐらい経った、第7代皇帝の武帝あたりの時代です。





夏県禹王村で訪れた禹城遺跡。だだっ広い野原の真ん中に、突如台地が盛り上げられ、その上に禹廟が建てられている。台の下に開いている穴は、作物の貯蔵に使われていたが、暑い夏と寒い冬を乗り切るための住まい（ヤオトン）も同様にしてつくられる。黄土は砂より小さいシルト状の土壌だから、粉状になって飛び散りやすい。埃が多く、絶えずもやがかかったような景色なのは、この黄土のせいである。村には禹城の城壁がまだ残る箇所がある。版築という技法でつくられている。収穫の季節、とうもろこしが道一杯に並べられるが、実を取ったあとの芯はあとから溝に落とされて燃やされる。

帝のときも黄老思想が有力でした。しかし実際には法令によって王朝の力を強くしたいというのが本音です。それで法律を重視する法家的な政策に近づいていきます。法律というのは普遍性がありますから、現代のように万民に平等に適応されるわけではないとしても、どんな人でもあることをやったら罰を受ける、ということになっていないと機能しません。そういう法家的な傾向が、文帝時代あたりからちらほら見受けられるようになります。文帝も景帝も表面上は黄老思想を尊重した穏やかな人とされますが、実際には法家的な人材が登用されているわけです。

しかし、秦の例もありますので、法家政策をばつと表に出すわけにいきませんから、慎重に行動したのです。宗族制も根強く残っていますので、建前は儒教でやったわけですよ。道徳も、宗族制で重要な孝の徳を忠の徳と読み替えていくのです。忠は、元来はまごころというような意味ですが、漢代では忠君の意味に転化していきました。官僚制の職責も封建制の身分に読み替えていきます。封建制というのは王がいて諸侯がいて、王にも諸侯にも臣下として卿・大夫・士という身分がありました。卿などは君主の一族がなっている場合がけっこうあります。そこま

で支配階級で、その下に庶民がいるというヒエラルキーがあるわけです。そこで、郡太守とか県知事を卿や大夫、士として読み替えていくのです。本当は法治を推進する官僚なんですから、あたかも封建制の臣下のごとくに思わせるようにしたのです。

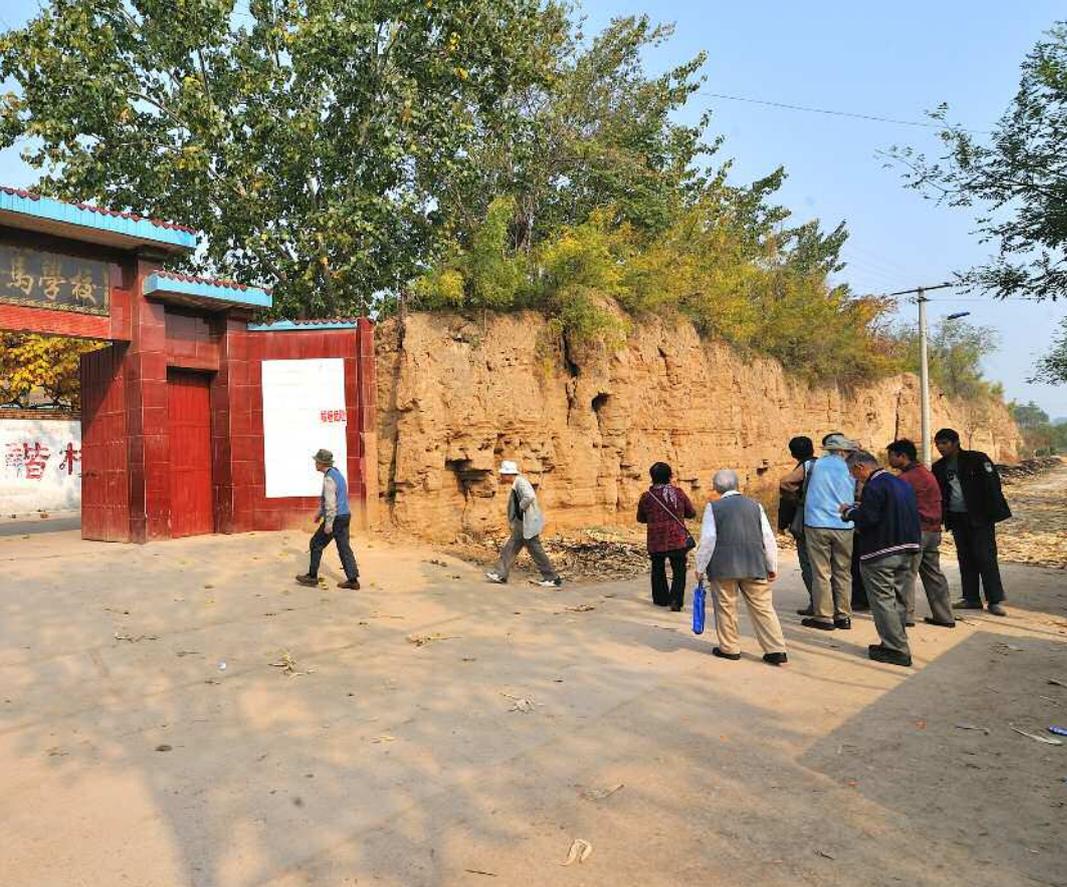
そもそも宗族制というのは男系の血族集団として閉鎖的にまとまる傾向にあります。地方分権的な社会に適合する組織であって、中央集権制になって宗族の秩序よりも君主の法的な権力だけが強力になるというのは困るのです。しかし、皇帝の立場から考えてみますと、宗族なんてないほうがいいし、卿などの貴族なんか、いないほうがいいんです。全国を県とか郡にして自分の官僚に地方を治めさせたほうが都合がいいんです。そうした両方の都合あるいは利益を調和するものとして、儒教が尊重されたのですね。

景帝のときに諸侯王の領地を削減するという法家的な政策が行なわれましたが、そういうことをすると反乱が起きます。そのときに誰が割を食うかというところ、そうした政策を推進した法家的な官僚です。反乱側の風当たりを弱めるために首を切られてしまいます。しかし、そうやって段々と封建制的な国の力を弱め、武帝のときにや

つと王朝権力が安定してくるんです。本音を言えば、皇帝は官僚を郡とか県に派遣して、自分の意のままにやりたいんですよ。しかし、あの広い中国でそうした形で権力を維持するのは不可能ですから、それぞれの地方にある宗族的な社会の存在価値を認めていかないと折り合いがつかない。それに一番都合のいい思想が儒家思想なんです。

それで武帝のころに、儒教一尊といって、儒教以外の思想は尊重しない、となるんですね。今はいろいろな議論があって「そんなことはなかった」と言う人もいます。しかし、全体の流れから見ると、前漢という時代に儒家思想はいわば国教になって、儒教となったのです。

漢代には、おおむね官僚は儒教にもとづいて採用しました。武帝が、毎年国や郡ごとに孝なる者、廉なる者をしかるべき基準で推荐するように命じたのです。この選抜制は郷挙里選もしくは選挙といえます。ちゃんと人事担当官がいて、文字通り、「選んで挙げて」いたのです。郷挙里選で挙げられるには、知識よりも行動が重視されました。「あの人は親孝行だ」「財産を気前よく人に施す」というような良い評判が基準になりました。一番重視されたのは親孝行



で、そういう人が太学たいがくに行つて儒教を勉強して然るべき役職に就く、というようになります。ですから前漢というのは非常に儒教的な国家だったことがわかります。

後漢になると儒教はもっと盛んになります。選挙で挙げられた人は官僚になり、やがて豪族化する人も出てきました。それで後漢では、選挙された人たちが一つの勢力になっていきました。有力者は、ほとんど豪族化していきます。その豪族が貴族化してくるのが三国時代以降で、西晋、東晋以後は多くの大貴族が政権を担ったのです。

**孝廉**  
 父母への孝順、および物事にたいする廉正な態度を意味し、選挙の中でもっとも重要視された。やがてこの種の選挙は孝廉と通称されるようになり、漢代選挙制の中の最重要科目としての地位を占めるようになり、儒教的な教養と素行を兼ね備えている人物が主に推挙された。

### 貴族社会から官僚国家へ

後漢あたりから唐代まで、豪族・貴族の勢力が非常に強い時代が続きました。しかし、五代に貴族が全部没落したあと、代わりに出てきたのが宋以降の官僚社会です。官僚を採用するのに科挙の試験が重視されるようになりました。科挙の試験自体は隋代からあったのですが、きわめて重要になったのは宋代からです。

唐代の科挙では、一番重視されたのは詩です。宋以降のように政論もありましたが、詩を詠むことが一番大切にされました。しかし、どんなに立派な詩を詠む人だって政治的な能力があるとは限りませんが、そういう時代だったんです。

日本では白楽天が人気がありますが、それはわかりやすいからです。杜甫の詩は難しい。東晋や南朝の詩はもっと難しい。なぜ、難しいのかといえば、多くの表現に典拠典拠があるからです。典拠典拠がわからないと、本当の意味は理解できません。だから大変な教養が必要です。その典拠たるや、儒教の経典であるとか、歴史書であるとか、あらゆるところから引かれています。

中国の詩は杜甫の詩を代表として、政治的あるいは社会的なことが詠まれています。男女の関係を詠んでも、どこかに社会的な問題がある。ですから科挙の試験でも詩が重視されたのですね。中国は歴史始まって以来、徹頭徹尾、政治的な社会でした。

### 中国の領域拡大と客家

ここで、中国領土の拡大について考えてみましょう。いわゆる中華文明ができたのは、3000年

くらい前で、せいぜい遡って4000年くらい前のことだと思えます。つまり夏殷周の時代で、中心地は黄河中流域、今の山西と河南の辺りでした。夏と殷は山西と河南を中心として、河北と安徽の一部ぐらいでしたが、次の周は陝西から起こりましたが、山東や河北にも封建国家が生まれています。春秋時代に入ると、夏殷の山西と河南、西周の陝西に、安徽、山東、江蘇、河北などが加わります。また、黄河中流域のいわゆる中原諸国とは別に南方には楚が起りました。楚の本拠地は湖北と湖南で、河南の南方です。春秋時代は、中原諸国と南方の楚との対立が続いた時代です。楚は陝西の秦に圧迫され、安徽から最後には山東まで逃げて滅ぼされました。長江下流には呉や越が起り、浙江や江西も領域に入ってきました。

秦の始皇帝が全国を統一するころには、四川、浙江、福建、広東、広西あたりまで政権の力が及んだようです。広西に運河を開削していることをみると、たしかに政権の力はある程度及んでいたでしょう。しかし、南方が「中国化」してくるのは、まだ後代のことでした。

中国では、人口の大移動が4回ありました。1回目は前漢の末期、2回目は西晋から東晋にかけてで、



開封の禹王大公園。黄河を見下ろす山の頂上に、巨大な禹王像が立つ。禹が手に持っているのは、土木工事に用いる鋤（すき）だが、その形を模してつくられたのが貨布銭。地下に何千年も前の遺跡が眠っている中国では、こうした古銭が土産物屋で売られている。



このときは地縁血縁でまとまった一族郎党が集団で逃げました。その集団のことを部曲というんですが、部曲単位で逃げたのです。3回目は唐代の半ば、4回目は満州民族の金が入ってきた時代です。こうした人口移動を経て、南方が中国化していったわけです。中華文明の中心は黄河流域から長江流域に移り、さらに南方の珠江まで下がっていくんです。しかし、その先がない。それで海外に出ざるを得ません。一人二人がバラバラ

と出るのではなく、まとまって海外に出た。行った先では華人街をつくる。そのとき中心になるのは宗廟、つまり一族の先祖を祀った廟なんです。海外に行った者、つまり華僑は宗廟を中心にしてまとまっているのです。宗族制は変化しながらも、しぶとく生き残っていくわけですね。

家と呼ばれる人々は、古くても宋代ぐらいからの人たちのようです。客家の人たちは故郷を持たずに他人の領域に入っていくわけですから、頼りになるものといったら客家同士の連帯とお金です。それで客家の人たちは主として経済と政治の分野の一翼を担い、政治家や実業家が多く出ています。鄧小平もその一人です。

最後に私自身の道教調査についてちょっとお話しします。私は、文化大革命が終息した1970年代半ばから道教が少しずつ復活してきたというので、1985年（昭和60）以降10年ほど調査に行きました。ご承知のとおり、文化大革命では宗教は否定され、古いものはみんなダメだとされました。仏教ダメ、道教ダメ、儒教もダメですね。道観やいろいろな廟もずいぶん壊されました。神像はことごとく壊され、石碑でさえ、たくさん破壊されました。道観は、建物として残っていても、倉庫とか学校とか別の目的に転用されていきました。道教の文物は、よほどの山奥に行かなければ、昔のものは残っていません。廟などは日本軍が壊したものもあります。今見られる禹王廟も、だいたい新しいものだと思います。

その後、外国からの圧力もあって信教の自由が認められました。しかし、道観の外に出て民衆に布教することなどは認められませんでした。現在はいよいよ自由になってきているようです。道観もかなり再建、修復されています。東岳廟や媽祖廟なども結構あります。媽祖は本当は道教の神様ではないんですが、関帝などと同じように道教を取り入れた神様です。道教は何でもかんでも取り入れますからね。遑つて考えてみると「なんだこれは、カエルじゃないか」というような神様もいます。そういうのは、特に南方に多いんですよ。

取材・2011年10月25日  
(2012年1月18日補訂)



## なぜ日本に

禹のことを知ったのは、『水の文化』32号〈治水家の統〉で和田一範さんが中国・四川省の都江堰について話されたときだった。最初はパソコンの文字変換でも禹という字が出てこなかったし、「禹の王様？」と勘違いする人もいたぐらい。

その程度の知識だったから、2010年（平成22）11月に神奈川県足柄上郡開成町で禹の全国サミットが開催されると知って、びっぴりした。しかも、禹にかかわる石碑や地名は、当時、全国に18カ所も確認されていた。各所在地から集い、それぞれの思いを込めて研究成果を披露する発表者たちの熱い思いに触れて、当初の驚きはいっそう大きくなっていった。

## 禹と孔子の切っても切れない関係

そもそも、古代中国の王である禹が、なぜ日本で治水神として祀られるようになったのだろうか。

禹は、中国が国として興った中心地〈中原〉を流れる黄河の治水を成し遂げて、人が住める土地をつくり、作物の生産性を高めたとされる。治水神としてあがめられると同時に、勤勉で誠実な為政者の象徴とされることも多い。日本でも、古事記や日本書紀では、聖人君子の比喩として描かれている。

禹を治水神にした一番の功労者は、中国・春秋時代の思想家で、儒家の始祖といわれる孔子だ。孔子は実力主義が横行し階層制秩序が解体されつつあった周の末期に、周公旦（周王朝初代武王の弟）が建国した魯国に生まれた。残念ながら、孔子は自らの考えを国政の場で実践する機会に恵まれなかったが、周公をモデルとして、階層制秩序の再編と仁道政治を掲げた。

中国最古の歴史書『尚書』（のちの『書経』）は、儒教では孔子が編纂したとされている。伝説上の堯帝、舜帝から始まって夏・殷・周の王の詔を整理した政治文書で、禹の功績を讃えた文献もこの中にある。日本へ禹が伝播したのも、儒学とともに海を越えてやってきたと考えられる。

また、孔子の死後、弟子たちによってまとめられた『論語』は、孔子と高弟の言行録で、中国のみならず朝鮮半島や日本でも広く読まれた。特に日本では、江戸時代には藩校や寺子屋で、第二次大戦前までは修身科で、『論語』が教育の基礎となっていたという。

しかし、第二次大戦での敗戦によって、『論語』は一転して批判の対象に。身分や立場の区別を厳格に守ろうとする孔子の教え（階層制秩序）が、封建主義的な身分制度を強めようとした、とみなされたからである。

## 本家中国では

20世紀に中国で起こった文化大革命で、孔子は封建主義を広めた中国史の悪人とされ、禹も当然のことながら批判の対象になった。

禹廟や禹像の多くは破壊されたが、中国のアイデンティティー復活のためか、近年、再整備されつつある。大掛かりに禹を祀る施設や像を見るにつけ、中国人にとって禹はおのれのルーツであり、精神の拠り所であると思わされる。文化

大革命だけでなく、日中戦争で日本軍が破壊した禹廟も多い。孔子も禹も不遇の時代を経て、今、やっと再評価が始まったばかりだ。

## 時代が要請する禹の存在

酒匂川の治水事業を行なった田中丘隅は、水害の再発防止を願う象徴として禹を用いた。田中丘隅は隠居後に、江戸で荻生徂徠から古文辞学を学び、実務家であると同時に、〈祀り〉の重要性を認識する文化人、教養人でもあった。高松・香東川に大禹謨を建立した西嶋八兵衛もまた然り、である。

このように、近世以前の日本人は、大陸中国文明を父として、半島朝鮮文明を兄として、さまざまな学びを深め、教養を磨いてきた。したがって、「禹にかかわる事物」が日本に15河川22カ所（2012年（平成24）2月現在）も存在することが確認されているのも、広く浸透した儒学の教養を考えれば、あって然るべき、と言ってよい。さらに、近代河川工学を修めた研究者や技術者に、このことが驚きをもって受け止められているという。

禹に象徴されるような治水の知恵（ローカルノレッジ）を知り、伝えることの重要性に改めて気づかされる。

22カ所の「禹にかかわる事物」の中には謂われがわからなくなったり、今は存在が確認できないものもある。消えていったのも、必然があつてのことだろう。しかし禹に託された治水の歴史、つまり人が暮らしていく上で欠かせない川との折り合いのつけ方は、22カ所のすべてに共通して存在する。

禹には拠り所としての強い求心力があるだけでなく、川を治めるにあたっての心構えも示してくれる。この〈治水に向き合うリアリティ〉こそが、水の流れと人との距離を縮め、里川を創成する第一歩だ。いったん姿を隠した禹が、再び現われてきたのも時代の求めによるもののように思う。



里山や里海だけではなく、暮らしとかかわるすべての水循環の経路を私たちのセンターでは「里川」と呼んでいます。いろいろな里川を発見しその価値を身近に感じたい！ ということで、2011年度からスタートした〈里川文化塾〉。39号でレポートした「府中用水ワークショップ」に続き、「里川づくりワークショップ」(10月23日)「小水力発電 はじめの一步」(11月17日)「春の小川」の流れをめぐるフィールドワーク(2月5日)のレポートをお届けします。

# 里川文化塾

詳細はHPで公開しています。

<http://www.mizu.gr.jp/bunkajuku/>



左：神田川では、隅田川とは異なり、オフィスビルが川に背を向けるように建っている。川の本横で働く人の川に対する心理的距離はいかほどか。

下：難波匡甫さん



## 里川づくりワークショップ

会期：2011年10月23日(土) 10時～17時

会場：ミツカンフォーラム(東京都中央区)・日本橋川・神田川・隅田川・小名木川

水先案内人：難波匡甫さん 法政大学サステナビリティ研究教育機構研究員

地域形成史を専門に全国の川を視察している難波匡甫さんを水先案内人に招き、非常時における川の利活用法に注目。日本橋川・神田川・隅田川・小名木川を船で巡り、非常時における川の利活用法について考えるワークショップを行いました。

乗船前に難波さんから、「江戸東京のまちづくりと川」について、地図や図版を用いてお話がありました。難波さんからは「現在、都会で生活する人は川とかかわることが少なく、川の素晴らしさも川の怖さも知る機会がない。今後は、これら両方を常に一緒に意識し、さまざまな場面で川の利活用法を考えていくことが望ましい。在り方ではないか」という問いかけを受けて、乗船フィールドワークを体験。所要所で難波さんからレクチャーを受けたあと、再びミツカンフォーラムに戻って、感想や非常時における川の利活用法について話し合いました。

感想の中には、「応援する」という言葉が出ましたが、「一方的に住民側が公に要求することが多かったとこれまでの関係を改めて、地域の安全性や快適性を高めていくためには、両者の間に信頼を築くことが大切」という気づきを与えられました。



小水力発電施設。2基併設されている。発電容量は270kw(135kw×2)。

下：古谷桂信さん



## 小水力発電 はじめの一步

会期：2011年11月17日(木) 14時～20時30分

会場：川井浄水場(横浜市旭区)・横浜市技能文化会館 ホール 協力：横浜市水道局

ワークショップリーダー：古谷桂信さん フォトジャーナリスト、全国小水力利用推進協議会理事

東日本大震災の影響により、2011年の夏は、エネルギー不足が深刻な問題となり、例年以上に再生エネルギーへの関心が高まりました。そこで、小水力発電適地の目利きである古谷桂信さんと一緒に、実際に小水力発電を行なっている川井浄水場を見学し、第2部では会場を横浜市技能文化会館に移し、小水力発電の基礎知識から今後の展望などのお話と質疑応答を行ないました。

古谷さんから「東日本大震災以降、『何かをしななければいけない』という状況の自治体が多い。小水力発電で採算を取るには固定買取価格がポイントだが、この金額が確定するまで待つてから取り組むのでは遅い。採算が取れると決まったら小さな町にも大企業が押し寄せて地元の人たちが参入できなくなる可能性がある。多少のリスクを冒しても先行して動くことが重要だ」という生の声を聞くことができました。

家庭の屋根に設置すればすぐに発電できる太陽光発電などに比べ、導入の難しさやわかりにくさもあって過小評価されてきた小水力発電ですが、浄水場も適地になること、高知で小水力利用推進協議会を立ち上げた経験談など、はじめの一步を踏み出す学びが得られた一日でした。



上：合流式と書かれたマンホールの蓋。下：第2会場で参加者からの質問に答える中村さん(右)と田原さん



## 『春の小川』の流れをめぐるフィールドワーク

会期：2012年2月5日(日) 10時～17時

会場：ハロー貸し会議室Shibuya(東京都渋谷区)、国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区)

講師：中村晋一郎さん 東京大学総括プロジェクト機構「水の知」総括寄付講座特任教授

ゲスト：田原光泰さん 白根記念渋谷区郷土博物館学芸員

渋谷に生まれ育ち、勤務地も渋谷という田原光泰さんが渋谷川についてのガイドダンスを、引き続き、中村さんが「なぜ、渋谷川が暗渠になったのか?」渋谷川から考える、これからの都市河川再生」と題してレクチャーを行ないました。昼を挟んで、フィールドワークに出发。並木橋、稲荷橋、宇田川新水路、鍋島松濤公園、河骨川跡と、渋谷川の開渠部分から上流の暗渠を遡り、支流の宇田川と河骨川の跡をたどりました。

第2会場では、全員で感想・コメントを述べ、中村さんと田原さんに答えていただきました。都市河川が下水道化され、蓋をさしていった経緯を学び、高度経済成長期にはこれが効率的な方策と考えられていたことに驚きを与えました。都市河川再生は、まず川本来の機能とは何かを考えるところから始まります。そのため、流域を超えた水収支や下水道形式を見直さなくてはならないこと、ひいては私たち一人ひとりが、「川との暮らし方」の舵取りを変えることが、渋谷川をはじめとする都市河川再生の鍵を握っていると気づかされました。

## ■水の文化41号予告

### 特集「和紙」(仮)

日本には水と切っても切れない関係にある伝統的な産品が多くあります。工芸の分野では、和紙がその代表。果たして和紙をつくることは、どのような水使いを育ててきたのでしょうか。



## 水の文化 Information

### 『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

### ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

### 水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

### ホームページをフルリニューアルしました

当センターのホームページが昨年、フルリニューアルいたしました。知りたい情報にたどり着きやすくなることを心がけ、ウェブならではのコンテンツも新設しています。新しくなったホームページ、どうぞご高覧ください。

### 編集後記

◆「禹」！ 恥ずかしながら今回の取材を通じて、初めて知りました。日本でも禹に学び敬い、治水に生かしたことを知り、ロマンを感じると共に自国と隣国のことをもっと知らなくては、と痛感した数カ月でした。(宮)

◆歴史に疎く、禹王といわれてもピンとこなくて、禹については取材を通じて知ったようなものである。中国では禹はある種の理想的人物像に祀りあげようとしているのかもしれないが、それが人や社会が進化していく契機になれば、禹王も見直されるのではないかと思う。(新)

◆酒匂川は小学校の社会の教科書で勉強して以来、歴史のロマンたっぷりの魅力的なところであった。禹に関するさらなる発見が楽しみでならない。(ゆ)

◆自宅に近い多摩川の横を、昨年開削四百周年を迎えた六郷用水が流れている。1700年頃には荒廃しており1725年に改修したのが田中丘岡だった。灌漑技術にも中国思想の影響があったのだろうか？(中)

◆KPOP人気や東日本震災時の台湾からの義援金などで、アジアと日本の心理的距離が縮まっているように感じる。明治初期から「脱亜入欧」を主軸に近代化が進められてきたが、国際社会となった現在、改めてアジアと日本のつながりを見つめ直してみたい。(緒)

◆禹について理解できたとはいえないが、普段知る機会の少ない中国の歴史に触れたことで、新たな興味を抱かされた。あまり興味のなかったことでも、機関誌をつくり上げていく過程では、常に新しい発見がある。これがこの仕事をやめられない楽しさなのだと思えた。(力)

◆中華思想の根本に「農」がある。時間観念が循環に支配されるのも、四季に応じて死(枯死)と再生(芽生え)を繰り返すからだ。「時間軸は直線」という科学的思想がアジア人の心に馴染まない理由は、そこにあるのかもしれない。合意形成には、相手の土俵を知ることが要諦と知った。(賀)

### ミツカン水の文化センター機関誌

## 水の文化

第40号

ホームページアドレス  
<http://www.mizu.gr.jp/>

※ 禁無断転載複製

発行日 2012年(平成24)2月

企画協力 沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授  
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会  
島谷幸宏 九州大学工学研究院教授  
陣内秀信 法政大学教授  
鳥越皓之 早稲田大学教授

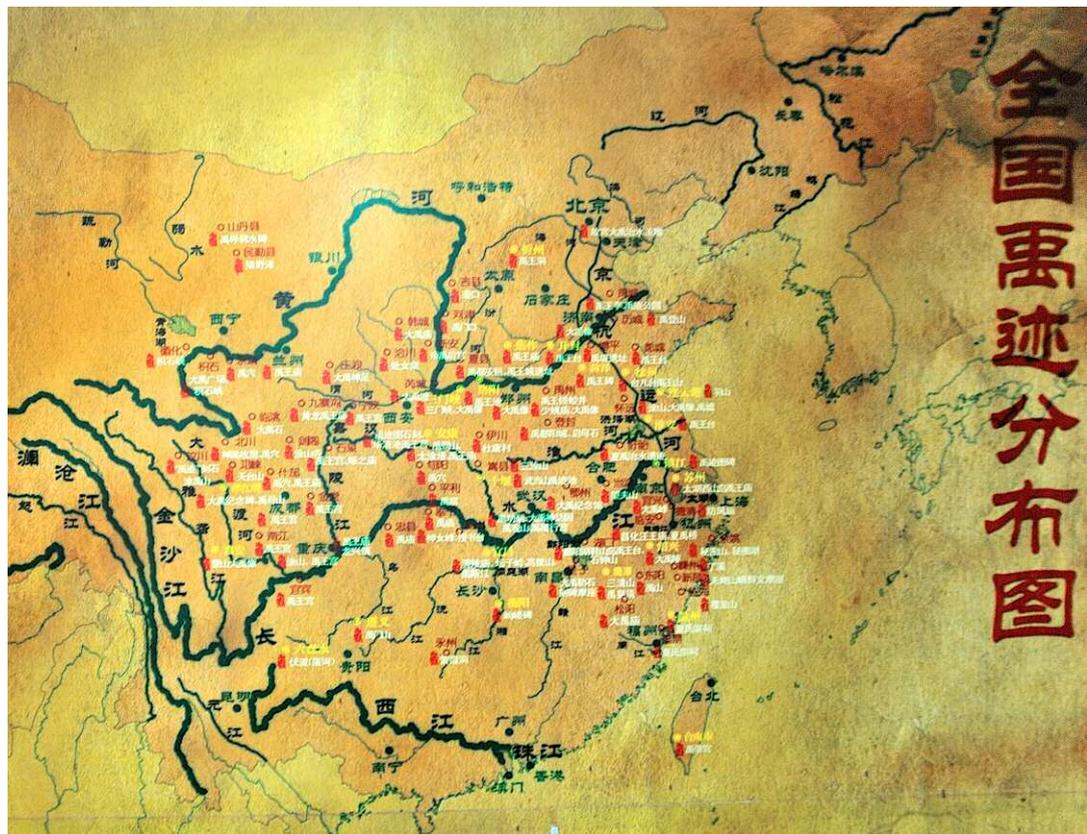
客員主幹研究員 中庭光彦 多摩大学准教授

制作 宮崎真次 新美敏之 松本裕佳 小林夕夏 緒方大輔 原田朱野 吉田奈保子

編集製作 賀川一枝 編集長 中野公力 賀川督明 デザイン・撮影

発行 ミツカン水の文化センター  
〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15 茅場町中壘ビル9F  
株式会社ミツカングループ本社  
Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ ミツカン水の文化センター 事務局  
〒104-0043 東京都中央区湊3-4-10 レジディア10F  
Tel. 03 (3552) 7504 Fax. 03 (3552) 7506



## ミツカン水の文化センター

表紙上：中国・紹興の大禹陵にあった棟飾りは、剣に刺し抜かれた龍。単純に考えれば、水の象徴である龍を治めた、とさえ言えない。しかし、中国では文化大革命などで古いものがいったん壊されたため、本来の意味を伝えるものかどうか、ルーツを探るのが難しくなっている。

表紙下：禹王城址は黄土で築かれた高台の上の禹王廟のほか、歴代の夏王が並んでいる博物館がある。禹王廟は3室に分かれ、妻の徐氏と禹の像、そして毛沢東の写真が飾られている。再興も維持管理も村人が行ない、春と秋には盛大な祭りがあるそうだ。

裏表紙上：大禹陵の博物館にあった、禹にかかわる事跡図。地方に行くと、もっとたくさんの事跡があることが判明。禹を訪ねる旅はまだ続く。

裏表紙下：左が片品村にある大禹皇帝碑。右が中国の大禹陵にある峴嶼碑の模刻。1行の文字詰めが違うので、中国の碑文を並べ替えてみた。独特の書体も含め、極めて似ていることがわかる。片品村に、なぜここまで酷似した碑があるのかは謎。2012年10月20～21日に開催される〈第2回全国禹王まつり 禹王サミットin 尾瀬かたしな〉で、この謎が解明されるのだろうか？ 乞うご期待。

